
Journals of the Dead

田中数奇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Journals of the Dead

【Nコード】

N8860S

【作者名】

田中数奇

【あらすじ】

人里離れたお嬢様学校。外界から隔離された学園に閉じ込められた少女たち。ある者は脱走を企て、ある者は日常を謳歌し、ある者は触れてはいけない秘密を探っていた。

だが、そんな日常は音も立てずに崩れ去る。死者が起き上がり、生者を食らいだすその時に。

死者であふれ、絶望が覆う中で、彼女たちは何を思っているのか。

勝気な美少女。生真面目な生徒会副会長。人の心を読む魔女。情緒

不安定なアーチェリーの天才。無口な不良学生。引き籠りの科学者。
いじめられっ子。そして秘密を抱えた転校生。
個性豊かな面々で贈る、絶対絶命学園ゾンビサバイバルアクション。

終焉（前書き）

グロシーンがありますので、気をつけてお読みください。

終焉

人間は様々な物に恐怖を覚えてきた。

夜の闇。深い森。未知なる生き物の声。醜悪な暴力。見知った隣人。

だがそれらの根底に流れているのは死への恐怖だ。

痛みも、未知との出会いも、喪失も、いずれも死が横たわるゆえの恐怖だ。

あらゆる生物は生まれ落ちた瞬間から生を享受すべく、受け継がれた本能に従って全力を尽くす。

そしてやがて至る死をできうる限り回避すべく、生きる。人は生きるために、生きる。

生きることは喜びだ、いや苦痛だ、と言葉遊びするものがある。きれいはきたない、きたないはきれい。

くだらない。生きることは、そうしたすべての感情や感傷を得るための前提条件でしかない。

生きているという状態がなければ、すべては無価値だ。

怒りも悲しみも喜びも愛もなにもかも、等価に過ぎない。

本当に恐ろしいのは、失われること。何もかもなくなってしまうことなのだ。

だからこそ生には価値があり、そして死はそれ以上に恐ろしい。

すべてをゴミ袋の中の出来事のように包みこみ、無に還す。

どこか底のしれない穴の底へ。闇の中へ、消しさっていく。

地獄という場所さえ、あるいは恐怖の裏返しかもしれない。

だが果たして、先人たちは私たちのように死をおそれただろうか。

生きたまま四肢がばらばらにされる。

胴体を引き裂かれながら、臓器が幾つもの手に引きちぎられる。

断末魔の声を上げる舌はもぎ取られ、目玉は水風船のように潰される。

齧りつかれ首筋から噴き出た血は、周囲を赤く染める。

苦悶の表情に塗りつぶされた顔は、耳を削がれ鼻をもがれ上唇を剥がされる。

まるでそんなものなど、なかったかのように。

それが、私たちの死だった。

原形を失った肉片となり、食われる。

蹂躪され、惨殺され、食われる。

生きたまま。激痛に叫びながら。苦しみにもだえながら、死に至る。

だが真に怖れるべくは、そうならなければ、もう一つの死が提示されていることだ。

首筋からシャワーのように血を浴びながら、首筋の赤い筋に顔をうつめる。

腰にかぶりつき、ベルトごと噛み切る。口元からぼろりと歯を落としながら、お構いなく租借する。

引き裂いた腹から、食道と思われる赤い管を、食いちぎる。

頭に鉋を突き刺しながら、人の手を口に運ぶことに腐心する。
指は口の中に運ばれるたび、一本ずつ消えていく。

腕を乱杭菌で執拗にかじりつき、徐々に骨をのぞかせる。

他者の死を食らい、むさぼり、さまよい続ける。

私たちが真に怖れるべきは、奴らの餌食になることではない。
奴らの仲間になることだ。

それは人が作りだした地獄よりも、醜悪な現実。

耳元で、ぴちゃぴちゃと音がすることに気付く。ゆっくりと、頭を動かす。

私の瞳は、それを写す。

下半身を失い、臓器をさらけ出しながら、血まみれの床を這う姿が。
焼け爛れた顔が、此方を見つめる。

白く濁った、虚無的な瞳。

その中には、怯え戸惑う、私の顔があった。

20XX年、冬。

終わらない死が、そこにあった。

及川
芹乃

終焉（後書き）

自分の好きなホラー映画や小説、ドラマなどをごちゃまぜにしてみました。

特殊な構成になっていますが、お楽しみいただけると幸いです。ご意見のほど、よろしくお願いいたします。

お気に召してくださった方は、これから末長いお付き合いとなると思っております。

手記1（前書き）

独白形式と三人称形式を織り交ぜた構成となっています。
今回は独白回になります。

手記 1

ある種の出来事が、私たちすべての価値観というものを変えることがある。

それはテロリストによる大量虐殺だったり、政治家による汚職の発覚だったり、高名な人物が死んだりすることでおこる。

その結果、社会が殺気立ち、皆が疑心暗鬼と凶行に至ることがあるかもしれない。

あるいはそれは多くの人の心に傷痕を残すかもしれない。

しかしそれでもそれまで気づいてきた人生というものを手放すには社会は強固だ。

誰かが続けている昨日までと同じ今日を、手放せる人は少ない。

よきにせよ足きにせよ、私たちは日常というその泥の中にとらわれてしまっている。

だからこの何十年もの間、自由と不自由を満喫しながら、平和という時代を生きてきたのだ。

だがそれでも、何か決定的に変わる時が訪れる。

それは天変地異と言われる出来事だったり、戦争と言われる状態だったり、つまりは私たちがたっている場所そのものが大きく揺れ動かされる出来事をいう。

それは人の力の手の及ばない範疇での出来事であり、川下にいる私たちはただただその流れに身を任せるしかない。

けれどもこの出来事を、それと同じものと見なすのにも、やはり抵抗がある。

私たちが今巻き込まれているこの状況を。

価値観が変わった、そういうレベルではない。文明それ自体が変わったのだ。

失ったものは、枚挙すれば暇がない。社会、秩序、安全、日常。それから家族。

ルールと数字、そして歴史に裏打ちされた世界は、今はもうない。

思えばあの日。皆が登校してくるあの一日前こそが、最後の日だった。

いや、厳密に言えばおそらくはすでに終わりは始まっていたのだろう。私たちの思いもつかぬ別の場所から。

けれど、最悪な現実として私たちの目の前に現れた日が終わりだとするなら、日記に退屈なことをかける最後のページこそが、その日だった。

友人と早く出会いたい一心で学生寮まで二日はやく学校にやってきた私が、互いの再会を喜んでいた日のことだ。

だからあの日はといえば、クラスメイトの香奈ちゃんと朝からずっと一緒だった。彼女と一緒にご飯を食べ、勉強をして、それから私の部屋で、おしゃべりばかりしていた。

たわいもない話だった。あときはお互い精一杯にまじめに話をしていたけど、今になってそう感じる。

けれども、かけがえのない時間だったと、今になってそう思う。決して軽んじることのできない、私の人生のページ。ありふれた、どこにでもある、退屈な一日。それでよかった。私の人生は、そういう風に出ていたんだから。

話は、お正月の話。初詣に友達と神社に行ったら、大吉が当たったこと。帰りに食べたラーメンが美味しかったこと。ちょうど隣にいた人がカツコよかったからときどきしながら見ていたら、女の人がやってきて手を組んで店を出て行ってしまったこと。もらったお年玉で、福袋を買ったこと。中に入っていたものを、店の外の喫茶店で同じように買っていた人と、交換したこと。

自分の話は、あまりしなかった。普段から私は聞き手にまわるのが好きなのだ。香菜ちゃんのころころ変わる表情を見ながら、相槌を打っているのが私の楽しみなのだ。だから、この日もそうだった。

今になって、自分の話がもっと出来るようになっていけばと思う。私は聞き手にまわることで、自分の感情や気持ちを出せないことをごまかしていたのかもしれない。

全ては手遅れかもしれないけど。もっと佳奈ちゃんに、私のことを知ってもらったらよかったのかもしれない。誰にも話していない苦い初恋や、親から受けたひどい仕打ち。

そして私がどんなに香菜ちゃんを大切に思っていたのか。

こうやって紙に記していても、実感がわかない。私は何を言おうとしているのだろう。

悲しみをぶつけたかったはずなのに、怒りをぶちまけたかったはずなのに。

ペンを通して書きだされる私の言葉は、血の通っていない黒い染みでしかない。

いったい私は、何を伝えたかったのか。何を言いたかったのか。よくわからなくなってきた。

いつかこのノートが誰かに見られる事があるなら、それをきつと見つけてほしい。

とにかく、私の失われた最後の日常は、やっぱり当たり前の日常だった。

後悔も無念ものみこんで、ただただ今になって特別な輝きを放っている、平凡という一日。

ただいつもと違うこと、特別な出来事があるとすれば、ひとつだけ。

転校生が、やってきたことだ。

—— 阪上千波

手記1（後書き）

一応続きは、第一話の方になります。

第一話 赤と白（1）（前書き）

更新が遅れてしまい、大変申し訳ありません。

ようやく展開の方向性の目途がついたので、連続で投稿していきます。

序章ということで、まだゾンビは出てきません。少しばかりのご辛抱を。

第一話 赤と白（１）

遠くから、音が聞こえた気がした。

まどろみの中から起こされた意識が、その正体をつかむべく耳を澄ます。

枯れ木も山のにぎわいというが、そこにあるのは沈黙だけだった。一月。新年という勝手な区切りなどお構いなく、年を跨いだ冬の景色が立ち並ぶ山の中。

自然と戯れるというにはどこか薄ら寒い、貧相な木々が立ち並び、鈍色の空を仰いでいた。

いつの間にか覚醒してた意識がとらえたのは、そんな夢とも現ともつかない――この場合は悪い意味で、だ――退屈な風景だった。

「お目ざめになられましたか？」

前方からの声。視線を向けると、ルームミラー越しに眼があった。

「お疲れのようですね。それとも昨日は緊張して眠れませんでしたか」

「すいません、お話の途中だったのに」かすれた声で、謝る。鏡の向こうで、目じりが緩む。ほほ笑んだようだ。

「貴方もいろいろと都合が御有りなのでしょう。構いませんよ。それに年よりのお喋りは、若い人には退屈なものと相場が決まっていますからね」

「気を使ってもらって、すいません」

「そう、かしこまらないで。居眠りくらい、したい時はありますよ」そう言つて老女は鷹揚な笑みを浮かべる。なるほど、神に使える人間らしい寛容さだ。

適度な振動と、暖房で保たれた過ごしやすい室温。ワゴン車の中は、

橘夕たちばなゆうがくつろぐには十分な空間だった。

おまけに変わり映えと刺激の少ない自然の景色なら、意識が途切れの仕方がないだろう。

つまらない景色から焦点をずらして、窓に映った自分の姿を眺める。肩口まで伸ばした髪。ややきつめの瞳に、うすい唇。

そこには紺色のブレザーを着た少女の姿があった。

胸元にあるワッペンには、「鳳凜」の二文字が大きく縫われている。それをみて、改めて気を引き締める。

自分はこれから、一人の女子転入生となるのだと。

*

「なにか、音がしませんでしたか？」

ふと、チョーカーをいじりながら、そう尋ねる。

気のせいとは思いつつも、思わず口をついていた。すると意外な回答が返ってきた。

「近頃は山から鹿が降りてくることも多くて。いろいろと数を減らす努力をしているみたいです」

とすると、猟師などと呼んで間引きさせているわけだ。すると先ほどの音は、銃声だったかもしれないのか。

理事長はそこから話を別の方向へ持つて行った。

「もともと、人が住むところや食べものを奪ったから人里に下りてこなくてはいけなくなつた。彼らの領域を犯したから、彼らも我々の領域にやってこざるを得なくなつてしまったというわけです」

「このあたりの森林開発は進んでいるんですか？これから行くところは、閑静な場所だと伺っていましたか？」

「ああ、先ほどのトンネルから先は、ほとんど手を入れられてないわ。山ごしに県をまたいで動物は移動してくるからですよ。人が勝手に決めた区分けなんて、関係なくね。彼らに罪はないというのに痛ましいことです」

沈痛な面持ちからは、いかにも自然を愛する善人の顔がうかがえる。なるほど、自然を愛し、俗世を嫌う。そんな人間でもなければ、こんな山奥にある学校の責任者なんていうものは、勤まらないだろう。焦点のぼやけた思考の中で、シートに預けられた老女――学園理事長の役職の女性、鳥養玲愛の背中を見つめる。

彼女は自分がこれから向う学園の理事長を務めている。

三学期からの転入ということで学園に向かっていく夕に、車での送迎を持ちかけてきてくれたのだ。

新学期は二日後からだ、その前に転入手続きをするためだ。

電車を乗り継いでたどり着いた在尾市で待ち合わせて、今はその道中というわけだ。

そうですね、と同意を示すにとどめてポケットから携帯電話を取り出す。

車に乗ってから、一時間ほど。思っていたより、寝ていた時間は短かったようだ。

此方が携帯をいじっているのを見てか、理事長が再び口を開いた。

「携帯電話は、後で預かります。構いませんね」

ええ、と頷いた。元より、電波も届かない場所というのが、これから行く場所の売りの一つだ。

「何も持たなくなること、文明の利器から解放されることこそ大丈夫であることが贅沢だなんて、おかしい話ですね」

ふとそう呟いた言葉に、老女は「慧眼ですね」と評した。

「まさしくそのとおり。持つことは、縛られること。貴方達の年ではまだ分からないかもしれないけれど、どう生きるかというのは非常に細かい部分で語られるべきなの。」

だからこそ、貴方達にはのびのびと若い時間を使ってほしいのです

よ。子供を食い物にする大人が、この国には多すぎます」

そこには何処か厭世家のような、遠いところに居る人間独特の声音があった。

「モノがあり、何でも手に入るのが自由ではありません。それを心にとどめておいてください」

はい、と熱弁をふるう年寄りに答えながら、夕は携帯電話を再び視線を手元に落とした。

そしてストラップだけを外して、夕はそれを手の中に握り込んだ。まあいい。郷に入っては郷に従え。

連絡なんて取りたい相手も、別にいない。

曲がりくねった道を抜けて、ようやく空が開けた場所に出た。

鏡の向こうの老女は、前を向いている。

「どちらにしても、貴方はまだ自由です。物事をどうとらえていくか、どう考えるかを自由に選べる。これから——この学園で」

空が一気に開け、車の行き先がようやく見えた。大きな石造りの壁に、鋼鉄の門。

「いずれにせよ、ここはいいところよ。あなたがこれからの学園生活、過ごすには」

守衛がこちらに気づいて、門を開ける。

「ようこそ、橘タさん。ここが、あなたの新しい学び舎にして家。

——私立鳳凜学園です」

間もなく門が開き、その向こうにある堅牢な建屋がはっきりと見えた。

「願わくば、ここが貴方にとって楽園でありますように」

＊

「ここは、地獄よ！こんなところ、一秒でも早く脱出すべきよ！」
どすん、と地面に恨みでもあるかのように踏みつけて少女はそう言い放った。

「こんな最低の学校に、私たちはいちゃいけないのよ！」

まるで世紀の大演説をぶったかのように胸を張る少女。後ろに括った長い髪を揺らしながら、きりりとした眉を立てていい放つ。

「今こそ我々は、立ち上がらなければいけないわ！」

彼女の強い決意を迎えたのは、小さな拍手だった。二つだけの。

「雰囲気だけなら、大したもんじゃないの？駅前でたすき掛けて話してもスル―するけど」

ニット帽の位置をいじりながら、長身の少女はそう評した。

「でもなんだか、ひよちゃんかつこいい。革命家だね！」

前髪をヘアピンでとめた少女は、喜色満面の笑みを浮かべる。

「ふふん。今年の私一味違うのよ。まかせてちょうだい。今年こそ、私たちはやってやるわ。この学園から——逃げ出して見せるのよ」
そう言つてうすい胸元を、少女——小林日^{いば}和良^{わら}は叩いた。

そう。こんなところにい続けてはいけないのだ。彼女は四方を睨みつけてから、決意を新たにする。

壁の向こうは、見渡す限りの山、山、山。自然に囲まれて、逃げ出すこともろくにできはしない。物理的に不可能なのだ。

私立鳳凜学園。

知る人ぞ知る、良家のお嬢様専用全寮制名門ミッション系学校。外部からはそうした評価が与えられているが、そんなものは間違いだと日和良たちは知っている。

つまるところは、隔離施設。それなりに裕福な家や訳ありの子供を人里離れた場所に押し込め、何事もなく少女時代を過ごさせてしまふための場所。

彼女らに求められているのは、ただひとつ。

「なにもするな」。

ここは、大人の都合を押しつけられた子供たちが行き着く場所だ。

日本が

そんな鳳凜学園からの脱出を目論むもの。それこそがこの三人だった。

いつものように、彼女たちは寒空の下で人気のない体育倉庫前にたむろっていた。

「とにかく、こんなところに押し込められるなんてごめんよ。逃げるのが、戦いよ!」

「ポジティブなんだか、ネガティブなんだか」

「周りには何んにもなし。テレビも映らず、携帯の電波も通じない。トンネル抜けて、やっと一本立つか立たないか。あり得なくなくない?」

「否定型多いな」「数えきれなかったよ」

「まったく!何が悲しくって、こんなところに放り込まれて、青春をこんな薄ら寒いところで終わらせにやなんのよ。女子高生が、聞いてあきれるわよ。なんの得にもならないわ」

まあまあ、と一人興奮する日和良を、絵美がなだめる。

「でも、ほら、ここは少なくとも安全だよ」

「絵美。どうせ私たちはここを卒業したら、社会に羽ばたかないといけないのよ。この高度情報化、グローバルゼーション、OPPが進む高度文明社会に」

「なんか変なの混じってたな」「横文字に弱いよね、ひよちゃん」
日和良の耳にはそんな突っ込みも入らない。

「だから、今自らの力で飛び立つのよ！タンポポの種子が飛び立つように、たとえアスファルトの上だろーが太陽の指さない樹の下だろうが、そつと静かに！力強く！」

「やかましいタンポポがいたもんだ」そつと響が呟く。「私なら踏みつぶすな」

こほん、と温まった空気を（主に日和良の演説で）落ち着けるために一息つくと、日和良は改まって言った。

「そろそろ私たちHDDは、改めて行動を見直すべきだと思うの」
鳳明脱走同盟――HDDは、三名からなる軍団だ。

日和良がこの学園に転入してきてから、くすぶっていた絵美と響を誘う形で結成された。

「さて、私たちは昨年十一月に、脱走を試みたわ」

日和良たちHDDがただ不満を持っているだけの学生と違うところ。それはまさしくその実行力につきた。

去年の十月に一度脱走を企てたのだ。あててこの手を使って、夜の間に彼女たちは山を越え、街までたどり着くことができたのだ。

「しかし、結果はあえなく、失敗」響が唇を曲げて続ける。

だが最後の最後までそのまま引き戻される運びとなってしまった。

鳳凜学園の影響力の大きさを改めて思い知らされた。鳳凜の設立者でもある鳥養家は、地元の名士だ。このあたりの山はもちろんのこと、近くの町でもいまだその影響力を持っている。町の人たちに見つかり、指を刺されて追い回されたときはまさしく恐怖の一言だった。駅は完全に封鎖され、町では青年団と警官が目や目を光らせてい

た。

そうして結局はこの学園に送り返されることになってしまった。

「散々だったね」

計画としてはほとんど完璧だったが、思わぬアクシデントが全てのもくろみを泡にした。

その結果として彼女らは一ヶ月間の清掃活動や反省文数十ページ、聖書の書き取りなどの重いペナルティを科されることとなった。

「ま、ここから抜け出ること自体は難しくないわな。警備だって、昔ほどきつくないみたいだし」

無駄に広い学園の敷地。ちょっとした大学のキャンパスくらいありそうだが、反面人の少なさが際だつ。

とくに礼拝堂などは、「趣を残す」という名目の下で、ほぼ当時のままぼろぼろのまま放置されている。

「馬鹿でかい学校だって言うのに、用務員もちょっとしかいない。教師の数だって、ぎりぎりだ」「ろくでもないのも、混じってるしね」

絵美の声がちょっと尖っているのに気付かないふりをして、日和良は響を見つめる。

「ま、本当なら車でもばくれば、あつという間だけだな」

「それじゃあ、連れていかれる先が警察署になっちゃうよ」

冗談だよ、と響は言うが、彼女ならやりかねない。大森響は素行不良がたたってここに押し込められたことを公言している。日和良は嗜めるような視線を送るが、響はどこ吹く風で笑っていた。

「とにかく、この作戦の失敗には、根本的な欠陥があったのよ。私はこの休みの間に、それを考えていたわ」

「んなこと考えてたのか」「普通に言ってくれたらよかったのに」

冬休みの間。

問題行動のペナルティーとして、長期休暇中にも関わらず三人は帰宅さえ禁止された。つまり学園でクリスマスも年も越さされた。ほとんど人もいない校舎で、ただただひたすらに罰としての清掃をやらされたり、やりたくもない聖書の書き写しをさせられた。

「何十年という歴史があつて、その中で脱走に失敗した生徒は数知れず。しかし、地理的条件からいっても物理的事情からいっても、それは成功してこなかった。それだけ、相手の守りは堅牢だということよ。」

つまり、相手の土俵で戦ったことが最大の失敗だったということ」

日和良はしかめっ面を作つていい放つ。しかし、聞き手の二人はきよんとしたままだ。その反応に不満だったのか、渋面を深くして続けた。

「だいたい、二三人が逃げたところで、向こうにしてみれば対して痛くもかゆくもないのよね。毎年そういう子供は出てくるし、すぐさま捕まえてしまえばそれ以上のことは何もない」

「まあ、そうだな」「うんうん」

と、ここまでは同意を示す二人。そこで、びしりと日和良は言い放った。

「じゃあ、何十人という数で逃げだせば、どうかしら」

これが会心の笑みだ、という表情で二人を交互に見つめる。つまりドヤ顔であつた。

日和良はゆつくりと、言い聞かせるように二人に話しかけた。

「いい？子供たちを、安全に手間をかけさせることなく面倒を見てくれる。そういう場所であると謳っているからこそ、鳳明学園は何

十年も続いてきた。親にとっては便利な場所で、子どもにとってはここは監獄よ。

けどね、それこそがこの場所の最大の弱点よ。つまり、逃げ出す生徒よりも、最終的に逃げ出さない生徒が多かったら、預けられてきた。そう思わせてきたことが奴らの本当の武器なのよ。

私たちが戦うべきは、自分ひとりの自由ではないわ。不自由さを強要してくるシステムそれ自体なのよ。

何十人もの脱走を許し、そして何人かは所在不明になったり自宅に帰ったりしたら、どうなるのか。

その時は学校の権威は地に落ち、その存在意義すら疑われるようになる」

「なるほど、私ら自身が学園側にすればウィークポイントなわけか」
そのとおり。わが意を得たとばかりに、日和良は続ける。

「大事なものは、ただ逃げ出すということだけじゃない。その行動が相手にとってどういう意味があるのかを考えて、常に行動することなのよ」

絵美と響は顔を見合わせる。そこにあったのは戸惑いと、驚きと、苦笑と——感嘆の表情だった。

時折常人とは異なった次元での発想をする。

そういった意味で、まさに小林日和良はこのHDDのリーダーにふさわしい人材だった。

「つつても、そんなお仲間をどうやって集めるよ」

「そりゃ、ひとりひとり友達になって、説得していくしかないわよ」
うへえ、と響は舌を出した。

「お友達づくりか。そりゃ大変だ。こっちは筋金入りのおてんば娘たちだぜ。今でさえ敬遠されがちだったのに、いけるかねえ」

「大丈夫よ。女の子グループなんて、一人と仲良くなれば芋づる式

に仲良くなれるわ」

響があごに手を当てる。

「とはいえ、ただ仲良し子よしになれただけじゃあ、意味はないんじゃないか」

「響、絵美。よく、考えてもみて。この冬休みに、わざわざ学園にいる人間のことを」

言われてみて響は目線を宙にうかし、それからうなずいた。

「理由ありつてことか」ザツツライト、と日和良は指をはじく。

「そうよ。高確率で、学園にむりくり押し込まれている生徒。彼女たちは家に帰るに帰らない、さまよえる女子高生たちなのよ」

今現在は冬休みの途中である。本来ならば始業式であるはずの日が土曜日だったため、やや遅れての三学期の開始となっている。にもかかわらず、こんなところにいるのなら。

それはきっと、何かしらの理由があるに違いないと日和良は推測を立てたのだ。

家に帰ることができない、そのうえで、学園に居るしかない生徒。それが今仲間にすべき相手だった。

「なるほど。反抗する理由は持っている人ってことなんだ……」

しかし絵美は首をかしげる。

「でも、別の理由できてる人もいるんじゃない……」

「勿論それもあるでしょう。でも私たちと同じ気持ちの人は必ずいるはず。学園そのものに不満がある人はね。これは抗議行動の一環なのよ。それなら、何かしらのアクションを学園から引き出すことも可能かもしれないでしょ」

「状況の改善を求めるってのは、それらしいな」

「そっか。娯楽を増やしたり、住み心地をよくしたいっていうのなら、賛成してくれる人も増えるかもね」

そつだ。あくまで、学園対生徒という図式に持ち込んでしまえばいいのだ。そうすれば大義名分を得ることもできるし、相手もこれまでは違つアクションを返すはずだ。

「私たちはこれまで自分たちが逃げることだけを考えてきたわ。でもそれじゃあ通用しないのよ。相手はシステム。大人。ブランド。

――つまり、イメージよ」

それは形がないものだ。

「立ち向かうべきは、学園にはびこる何をしても無駄だという絶望的なイメージと、そして学園が得ている信頼というイメージ。私たちが戦うべきは、それなのよ」

だが、戦えないというわけではない。自分たちも考え方を変えて、行動の意味を考え、為すべきことを見極める。

そうすれば、勝てない相手などないはずだ。

小林日和良は、そう信じていた。それこそがこの世の理なのだ。

「とにかく！私たちは、新たなメンバーを加えるべきよ。質より量で、今年は攻めていくわよ」

「48人くらい集めんのか」「一番人気が誰とかで、揉めそーだよ
ね」

「さあてそうときまれば、レッツらゴーよ！」

意気揚々と歩きだす日和良。そんな姿に苦笑しながら、二人も後を追う。

何かを変える力。人を引っ張る力。行動を未来に繋げる力。

それを持っているのが誰なのか、彼女たちは知っているからだ。

そうして校舎へと三人は歩き出す。しかし、はたと絵美が立ち止まった。

「げ。やなやつ見つけ」響が呟いた。それにつられて、日和良も彼女たちの視線を追った。

だが、その時一瞬、正門から一台の車が入ってくるのが見えた。理事長のワゴンだ。これまでの経験から、日和良の胸中に苦々しい気持ち湧きあがってくる。

「さっさといこーぜ。説教くらうのは御免だ」響と絵美は早足になる。

だがそれよりも、気になるものを日和良の眼が捉えた。

後ろの席に、人の姿が映っていたのだ。見慣れない顔。

眼があつた。ガラス玉のような、無機質な目。

こちらを人ともモノとも思っていない、そんな瞳だった。

日和良はそんな彼女から眼を離せず、駐車場へと向かっていくのを眺めていた。その車体が見えなくなるまで。

「おい。何やってんだ」

掛けられた声でようやく現実に戻った日和良は、慌てて二人の方へ走って行った。

これが橘夕と、小林日和良の最初の出会いだった。

第一話 赤と白(2)

かくして小林日^{こはやしひより}和良、大森^{おおもりひびき}響、木仲^{きななかえみ}絵美の三人による作戦——「オペレーション友達」が始まった。

やるべきことは一つ。よく知らない学生相手を、友達にすることだ。まずは景気づけ、勢いをつけてこれから活動に弾みをつけたい。そんな合意がなされたため、最初に声をかける相手についてはスムーズに決まった。

同学年で顔見知り程度の相手。それでいて、声をかけても嫌がられない人。

「松浪さん、だよね」

「あ、えと、はい。あなたたちは、えつと……」

東校舎のと体育館の間。寒々しい花壇の前に、彼女はいた。

花壇を眺める姿勢から腰を浮かし、少女は三人に向き直った。

垂れ下がった眼に、ふつくらとした頬^{まっなみようこ}。

植物の世話が好きな、園芸部の松浪曜子^{まつなみようこ}が最初のターゲットだった。

突然話しかけられて、戸惑っている彼女に、日和良は告げる。

「ああ、気にしないで。話しかけたのはこれがほとんど初めてだから、私たち。私は小林日^{こはやしひより}和良。こっちのかわいいのが木仲^{きななかえみ}絵美、大きい方が大宮^{おみや}響」

どうも、と互いに挨拶を交わす。驚いてはいるようだけど、嫌そうな感じはしない。

「ええと、私は松浪曜子^{まつなみようこ}です。ええと、それで……突然、どうかしたの？」

「うん。いや、冬休みなのに学校にきてるしさ。あー、よかったら、この機会に友達増やしてみようと思って」

あれこれ考えてはいたが、結局真っ向から行くことに日和良はした。これが自分の性分なのだ。

そう答えると、松浪は少しだけほっとした顔になった。

「そうなんだ。それで、声かけてくれたんだ」

「うん」

「ありがとう」

そんな態度だけでも彼女の人柄は知れるというものだろう。

荒れ果てていた校舎横の花壇を復活させたり、用務員の雑用を手伝ったり。園芸部に在籍する彼女の聖人ぶりは、日和良たちも実際に目にしていた。

変な下心を抜きにしても、友達になりたいと思える相手だった。

「ま、いきなりお友達になりましたようつてのもあれだし、よかったら晩御飯でも一緒に食べようって感じで、どう、よ」

ちよつと照れてしまった。日和良としても、こういう風に声をかけるのは初めてのことだった。

響も絵美も、やや緊張した面持ちで松浪を見ている。

「……うん。クラスのお友達も、みんな来るのは明日だから。話し相手ができて私も嬉しいよ」

そういつて、松浪は春の花のような笑顔を向けてきてくれた。

響が息をついたのがわかった。よかったね、と絵美も笑う。

「クラスとかが違うと、知り合いが増えにくいしね。せつかくの学園生活なんだし、それはもったいないよね」

絵美が前に出て、手を伸ばす。その手をそつと握り返して、松浪も笑顔を見せた。

「うん。素敵な考え方だと思う」

絵美とはちよつとタイプが違うが、彼女も癒し系キャラだ。たんぽぽと、チューリップといったところか。かわいらしい。

「食堂つて、第一食堂だよな。それなら、私と同室の子もつれていきたいんだけど、いいかな」

「もちろん。にぎやかな方がいいしね」

願ったりもない提案だ。思わず二人と視線を交わす。

「今も花壇の面倒を？」

「うん、ちよつとチューリップの球根をみてたの。寒そうなのに、大変だねって」

「あ、噂の植物とお喋りッて云う奴？」

もうそういうのじゃないよ。そう言って少し膨れてみせる。そんな仕草までいちいちかわいい。

「植物に話しかけるとね、普通より元気に育つて言うじゃない。だから、私もね。……雪が降ったりする寒い中でも、がんばれ、ってね」

日和良もしゃがみこみ、かすかに雪が残った土を見つめる。

「聞いたかー。お母さんがそう言っただから、がんばれよ、おまえらー」

「おい、おまえ呼ばわりとか球根さんに喧嘩売ってんのか？さんつけろよ」響が口を挟んだ。

「なんで球根の方が私より偉いのよ！」

などというやり取りをしながら、四人は笑う。

「春が楽しみだね」絵美が呟く。

うん。そうだね。土の間から少しだけ頭を出した球根たちを、松浪は慈しむように見つめる。

寒空の下で、春を待つ少女か。

日和良にはそんな彼女がまぶしく見えるのだった。

と、駐車場のほうに視線が伸びて、ふと尋ねてみた。

「そういえば、さつき理事長が帰ってきたけど、見た？」

「あ、ごめんなさい。ちよつとぼんやりしていたから……音は聞こえたけど」

それがどうかしたの？と松浪は首をかしげる。

「いや、それがね」

日和良はさつき車から見知らぬ少女が見えたことを話した。

「なんだ。そんなのが見えたのかよ」「転入生ってことかなあ。こんな時期に不思議だけど」

「そ、そういえば、この前うちの寮の四階の部屋を整理してなかった？もしかして、あの部屋じゃない？」

松浪の言葉に、響が続いた。

「ああ。空き部屋になってたところだろ。大掃除じゃなかったのかもな」

「ふうん。じゃあ、一人部屋になるのか？というか、もう寮の部屋っていっぱいだっけ？」

基本的に寮生活において、部屋は二人で一つである。日和良は絵美と同室だからそんなに問題はないが、響はちよつとうらやましそうな顔をした。

「そっか。それじゃあ、その転校生さんも食事に誘うの？」

そんな松浪の言葉に、ふむん、と日和良は考える。計画は抜きにしても、個人的に興味があつた。

「そうね……せつかくだから、それもいいかな」

「うーん、でもよ」

と、響が割って入ってきた。

「久しぶりの転入生だったら、面倒を見てくれる人がいるんじゃないの？」

そう言われて、日和良にもピンと来る相手がいた。

「丁度今一人来てるんだしな。うちの、「面倒見がいい」生徒会副会長様がさ」

*

食堂に食料を、購買部に雑貨を置きに行った後、橘夕は職員室につ

たちはなゆう

れてこられた。

それから教師陣にあいさつした後、応接室で人心地ついた。

「こちらが事務棟になるわ。お隣が東校舎で、ここからちよつと行つたところが西校舎。特別科目はそつちで受けてもらいます。食堂はさつき言つたからわかるわね。

それから、その裏手に職員棟があるわ。大人はみんなそちらで寝泊まりしています」

先ほど見た限りでは、男性の教師も多かった。女子生徒と寮が違うのは、そのせいだろうか。

「ええそうよ。淑女を育てるという責任を持っているわけですから、ご家族の方達が気にやまないようにそうしています。あなたに入つてもらふ宿舎は、学園から出て二十メートルほどのところ。」

それから、体育館は門から入つてすぐのところにあつたという。

「スポーツはお盛んなんですか？」

「ええ。ここでは、皆さん勉強やスポーツに、雑念なく打ち込んでいます。特にアーチエリーでは、県大会でも好成績を収めています。ちなみに橘さん、スポーツは？」

夕は首を振つた。

「あまり。静かに本を読んだりする方が性に合っています」

「そう。それはよかったわ。読まれる本は知りませんが、西校舎の地下にある書庫には結構な数の良書があります。最近の物は知りませんが、あなたの気に入る物もあると思うわ」

「楽しみにしておきます」

そうやって二人歓談していると、ドアがノックされた。

「……ああ、ちょうどきたみたいね。それじゃあ、あまり年寄りと話していても楽しくないでしょうし、そろそろお若い人と変わりますうか。どうぞ」

失礼します、とドア越しの声とともに扉が開いた。

「はじめまして」

ヘアバンドでだされたおでこに、くつきりとした眉。

意思の強そうな瞳をもった、清潔感のある少女がそこにいた。

「彼女が来学期からこちらに通うことになりました。橘夕さん。一年生よ」

「二年で生徒会副会長をやらせてもらっています、すぎむらあかり 杉村明里です。どうぞよろしくね」

清楚で朗らかな笑みに、よろしく、と出来るだけ失礼のないように返した。

「杉村さんは、生徒会に二年連続で所属している方で、成績優秀で品行方正、鳳凛の生徒の模範となれる生徒です。それじゃあ、このあとは貴方が学内を案内してあげてね。お願いするわ」
はい、と杉村は笑顔で答えると、改めて向き直った。

「それじゃあ、行きましようか。橘さん」

二人は理事長室を出て、職員室の教師たちに会釈しながら廊下に出た。

「ふう」

と、杉村は途端にため息をついて、

「お疲れ様。お喋りでしょ、うちの理事長」

先ほどより少し砕けた口調で、そう話しかけてきた。

「あんまり緊張はしないでいいわよ。理事長がどういつていたかは知らないけど、学生はみんな割とのんびりやってるから、ね。ミッシヨン系なんてのも形だけだし、スポーツや勉強も程々だし。それに何より、私みたいなのが副会長をやってるくらいなんだから」

どうやら、此方の緊張をほぐそうとしてくれているらしい。それを理解した有は、こくと頷いた。

「分かってくれたんなら、よし。不便も多いし、戸惑うことも多いと思うけど、大丈夫。みんな、いい人だからね」

「……ありがとうございます」

なんと答えるべきか暫く考えた後、もつとも無難な答えを夕は返した。

それを緊張と捉えたのか、杉村は満足げに頷いた後、「学内の案内を始めようか」といった。

「まあ、そんな変わったところもないし、楽しいかどうかはともかく……」

そう言つて、杉村はそつと窓の外に視線をよこした。

「ここは色々個性的な生徒も多いから。面白い友達は、いるかもしれないわね」

*

化学室は東校舎の三階の奥に位置する。長期休暇において本来ならば科目室は閉じられているはずだが、そこだけは違った。

日和良がドアに手をかけると、鍵を開けるまでもなくがらと音を立て開いた。

「ありや。お間抜け三人組じゃないの。何してんのさ」

黒塗りの巨大な机に顔を押しつけながら、少女は問うてきた。

気だるげな表情と、寝ぐせのままの髪の毛。

彼女が学園でも怪人物として名高い鳴海聡子^{なるみさとし}だ。

小中与神童ともてはやされ、数々のコンクールなどで優秀な成績を残していた才女だ。

しかしその好奇心があだとなったのか、なんでも一度火薬を使った実験でボヤ騒ぎを起こし、ここに入れられる事になったとのこと。

実はヤバい薬を作っていたとか、ほんとは学校を爆破しようとしていたとか、そういった類の噂がささやかれているが、その真偽は不明だ。

ただ彼女はいつも化学室にこもり、得体のしれない何かをやっているということだけが、周囲の人間が知ることのできる彼女の姿だった。

「まーたなんか企んでんのさ？」

「中国三千年の技、黙秘拳を行使します」

そう言って日和良がファイティングポーズをとると、無邪気な顔で鳴海は笑う。

「殴って黙らせるのか、黙らなきゃ殴るのか？」「それどっちも同じだよ響ちゃん」

「わはは、分かりやすいねアンタら。ま、どうでもいいけどね」
とろんとした目つきで、ばっさり切り捨てられる。そうしていかにもどうでもいいという体で、眼を閉じられる。およそ人との応対をしようという気力を感じられない姿だった。

「それはまあ置いて。それよりも、ちょっとお話があるんだけど」

「何だわさ。アタシはさっさと、自分だけの世界にこもりきりたいんだけど」

「まあまあ、あ、コーヒー入れてくれるんだったら、ミルクよろしく」

フラスコに入っているコーヒーを見て、あつかましく日和良はそう言い放つ。

「三人分はないだわさ。友情にひびが入るから、これはアタシが全部処理するわ」

めがねを曇らせながら、アルコールランプで沸かしたコーヒーをすすする。

「まああんたらのノリは、私も嫌いじゃないけどさ。その無駄なエネルギーは、きっと地球温暖化に一役買つてると私は見てるね」

「そりやどうも。その割には相変わらず学園内はクソ寒いけどね。で、話なんだけど。夕食みんなで取るんだけど、どう？」

「遠慮しとくわさ」

そう言って肩をすくめる。「ま、おしゃべりは嫌いじゃないけど、飯食いながら話すのは下品だってアインシュタインも言ってたし。舌は味わう為にある、って舌を出した写真もとられてたっしょ？」

「あれ、そうだったけ……？」騙されてるぞ、絵美。

へらへらと笑う鳴海。

彼女とはそれなりに付き合いがある。

鳴海の持つている知識は幅広く、以前の脱走の前にも下準備として色々と山登りで大事な人間なメカニズムなどの話もしてくれたのだ。最も、彼女自身に脱走を手伝ったというつもりはなく、あくまで質問に答えたただけだという言い分を学園側も認めた。そのため彼女に対しては、特におとがめはなし。

誰とでも仲が良くて、誰とも仲が良くない。それが鳴海聡子だった。「そっか。まあ、アンタはそういう感じのことを言うんじゃないかって思ってたけど」

「ま、それがアタシのスタンスなんで。あんたたちも、風邪引かないようにさっさと部屋に帰りな」

「へいへい」

「まったく。こんなクソ寒いのに学校ない歩き回ってるのは、あんたらぐらいだわな。あと、杉ちゃんか」

「杉ちゃん手……杉村が、どうしたって？」日和良が頬をつつきながら言う。

「ああ。だから、杉ちゃんは、新入生を案内しに行ったわけさ。生徒会副会長としての仕事だからって」

「予想どおりっつー感じだな」響が肩をすくめた。

「謎の転校生ねえ。いやしかし、そうなると今日はタイミング悪いかもね」

彼女はまずそうにコーヒーをすすりながら、指先でテーブルをついていた。

正確にはその下に居る何者かに、指先を向けた。

「今日はよりもよって、魔女がいる日だからね」

*

夕はそれから図書館まで案内するよう頼んだ。彼女はとくに何でもないようにふるまっていたが、前を歩く間にため息を何度か漏らしたのを見逃さなかった。

「ええ。まあ、そうねえ。此処に居る人は、ちよつと変わっているけれど……気にしないようにね」

そんな得体のしれない忠告を受けながら、夕は杉村のあとを歩いた。西校舎の地下。どこことなく埃臭い空間に、本が所狭しと並べられている。

「あら、お客さん？」

そう言つて、カウンターに座っていた女子生徒が顔を挙げた。

「ああ、そちらが噂の転校生？図書委員の霧生詠きりゅうよみです。よろしく」

その姿に、夕は一瞬心を奪われた。

女子高生離れた艶のあるほほ笑み。日本人形のように整えられた挑発でありながら、肌はフランス人形を思い起こさせる白さを見せていた。

「橘夕です。よろしく」

「あなた、お料理とか得意？」

不意にそんな質問が投げかけられた。

「簡単なものなら。あまり、手の込んだものは」

「あら、どうしたの桐生さん。料理部にでも入ったの？」

ぎこちなく笑いながら、杉村が会話に入ってきた。しかし、桐生はまじまじと視線を夕から放さない。

「あなた……そう、いい手ね。慣れているわ。器用で、いろんなことが出来る手ね」

独り言のように呟く桐生に、夕は強引に手をひっこめた。なるほど。相当な曲者らしいということは、夕にもよくわかった。

「ああそういえば、桐生さん。橘さんも読書が好きらしいの。ね」
気まぐれなりかけた雰囲気の中で、杉村がそう水を向けてきた。

「ええ。ミステリーやサスペンスはありますか？」

「もちろん。数少ない娯楽だから、頻繁に仕入れているわ。中にはお嬢様が読むには過激なものもあるわ」

「桐生さん。変な方向に橘さんを連れてかないように」

それはごめんなさいね、とくすくすと笑う。歯を見せない、上品な笑い方だ。

対する杉村の笑みはぎこちない。腫れものに触れるような態度を訝しく思いながら、本棚を案内する彼女のあとを歩く。

「こっちの、手前にある方が新しい作品。人気のあるのはみんな予約しちゃって、殆ど見かけることはできないから、向こうに張り出してある人気ランキングを見て予約を入れて。それから、あっちが外国の作品で――」

ふらり、と不意に本棚に手をついた。俯いて息を荒げる。

「だ、大丈夫！？霧生さん」

「あ、ごめんなさい。少し……ごめんなさいね」

「保健室まで行く？」いえ、と霧生は首を振った。

「お水……何か飲み物でも、買ってきてもらえないかしら」

わかったわ。霧生に肩を貸して座らせると、杉村は階段を上って行った。

「今のは演技ですか？」

「あら、私が貧弱なのは本当よ。ただ、私がそのことをどのタイミングで思い出すかどうか、の問題」

そう言つて悪戯の共犯者に向けるような笑みを浮かべる。

「杉村さんはいい人よね」

「からかう分には、そうでしょう」貴方にとっては。

「ふふ、そうかもね」

「ところで、貴方何かを探しているようだけど……今なら、どんな質問にも答えてあげるわ」

彼女の言葉に、心臓が一瞬跳ね上がる。

しかしそれを一歳表情にも仕草にも見せることなく、夕は霧生を見据える。

「何が言いたいんですか？」

「勘違いならいいのよ。ただ、私は思ったことを口に出したただけ。でも、杉村さんには答えられない質問を、私は答えてあげられると思うわ」

それから、夕はしばらく黙って本棚を眺めた後、一つの質問をした。

その質問に、霧生は答えた。

「ええ。人が、死んだのよ。——この学校でね」

第一話 赤と白（3）

「あら、橘さん」

食堂にある自販機から、三つ分の飲み物を抱えた杉村明里が戻ったとき、橘夕はすでに図書館前の廊下に上がって来てた。

「ああ、副会長。彼女、やっぱり気分が悪いので奥で横になるそうです」

？開いた掌には、百円玉ひとつと十円玉が二つ。「手間をかけさせて申し訳ない、だそうで」

橘が肩をすくめ、明里もため息をつく。

「ま、あの人のことだからね。驚きはしないけど」

浮世離れしている、というのだろうか。あの喋りに雰囲気。彼女が何を考えているのか、いまひとつ分からない。「とりあえず、座りましょう」

？多目的室にあるソファーに腰掛けて、三つある紙パックの飲み物を差し出す。

橘は一瞬迷ったが、「お礼はいずれ」と言ってオレンジジュースにストローを突き立てた。

しばし二人して黙って喉をうるおす。それから杉村は出来るだけ何気ない風を装って、橘に話しかけた。

「何か、話した？」

「いえ。図書館の本について、聞いていただけです」

「そう」

そっけなく言い放つ橘から、その内心は窺えない。何か良くないことでも吹き込まれていないといいのだけれど。

「ええと、さ。……こういうのは、なんだけど。霧生さんは、どういう人だと思った？」

「結構な性格をしているようですね」

苦々しげにそういった橘を見て、杉村は思わず破顔した。

「うん、それがわかってるなら十分。私からはあんまり何か言いたくないけれど、まあ、ああいう人だから。適当にね」
はい、と橘が答えるのに満足する。彼女なら、まあ大丈夫だろう。
適当な距離での付き合いが出来るはずだ。
たとえば、あの図書室の魔女相手でも。

＊

霧生詠とは何者か。それは多くの人間にとって、学園内でも随一の「怖い人」だという認識である。

容姿端麗にして頭脳明晰。病気がちのため、一年留年して年は十九。ただし基本的に学習は保健室登校という名目で行われ、彼女を見ることがあるのは授業が終わった後の、図書室だけだ。

普段は司書のようにカウンターで読書にいそしみ、外界のことなど素知らぬ顔で佇んでいる。話しかけても笑顔で応対するが、決して深くはかかわろうとしない。それで

それだけならいい。病弱な深窓の令嬢というだけなら、今のようには恐れられはしない。

皆が恐れるのは、時折思い出したように出会った人にちよつかいを掛けてくるときだ。

「あなた、人の恨みを買ったでしょう。足元には気をつけなさい」
そう言われた生徒は、一週間後に足を滑らせて怪我をした。

またある生徒は、「手を大事にした方がいい」と言われたその日のうちに指の骨を折った。

そんなことが何件も続けば、誰だって気味悪がり始めるのも無理はない。彼女自身に直接の原因がなくとも。そんな風に積み重なった噂は、彼女を魔女として皆から遠ざけた。

そうしてついたあだ名が、図書室の魔女。近寄りがたく、そして近寄りたくない。アンタツチャブル。

それが霧生夜見に対する学園の少女たちのイメージだった。

その彼女に次いで、別の意味で近づきたくない相手がいるとしたら、誰か。

「と、いうわけで夕ご飯一緒に食べない？」

東校舎の屋上手前の階段。そこが彼女の定位置だった。
はまがたみちこ

浜形路子。

「……」

身長178cm。ざんばら髪から鋭い視線をのぞかせる彼女こそ、学園内でも要注意人物と目される一人だ。その長身をいかし、バレの選手だったらしいが今は特に部活動には参加していない。

一説には部活内の暴力事件を元に退学を起こしたとも言われており、本人はそれを否定していない。もっとも、肯定もしていないのだが、なぜなら彼女は転入時から変わらず、この半年徹底した沈黙を貫いている。意思の疎通にさえ億劫さをのぞかせる態度をして、彼女のスタンスを定めていた。即ち、孤立。

「黙ってばっかじゃ、分かんないわよ。何か答えたらどうよ」

「……」彼女はそう言われてようやく此方を向き、首を振った。そうしてまたふいと空の方を眺めている。

万事が万事、この調子である。教師からの質問には答えず、回答を求められても無視し、気が向いたときにぶらりと校内を徘徊する。自由と言えば聞こえはいいが、要は素行不良のただの問題児である。もちろん校内でもそれなりに問題にはなっているが、その恵まれた体格と本心を覗かせない態度から、教師陣も半ば彼女には匙を投げているというのが実情だ。

「ちょっと、そういう態度は……」

響が肩をつかむ。するとその上から浜形は手を掴んできた。

そうして、両者にらみ合う形になる。響も背は低くないのだが、それにしたって相手が悪い。響が見上げる形になってしまう。

「チッ」

そうして結局、先に目を逸らしたのは、響だった。舌打ちしながら、

手を離す。

すると浜形はもう興味はないとばかりに、再びあさつての方を向いてしまう。

そんな背中を響は忌々しげに、絵美はおろおろしながら見ている。けれども日和良だけは、彼女に向かって真摯に語りかける。

「浜形さん。あなたが一体何を考えているのか、どんな人なのかは知らないわ」

背中には動かない。けれども、聞いている。声は届いているはずだ。日和良はそう信じた。

「けれども、ずっと空を見上げる人間がどういう人なのかは、知ってるわ。今いる場所に、不満を抱いている人よ。大なり小なり、ね」
ゆっくり、噛んで含めるように言う。浜形は動かない。

「また、話しかけるから。覚悟しといて」

今日はここまでだろう。そう判断して、日和良は踵を返した。

響も絵美もあつけにとられていた。浜形に向かって静かに語りかける会談を降りたところで訪ねてきたのは、そのことだった。

「いいのか？」

「ああいう性分の子は、時間をかけて付き合うしかないでしょ。三顧の礼。急がば回れ」

二人はそんな絵美をどこか感心したように見つめていた。

「てかさ」

日和良が言った。

「どうよ、さっきの私、ちよつとかつこよくなかった！？どや。どや！」

「……ひよちゃんは、もうちよつと黙ることを覚えようよ」絵美は苦笑した。

それよりもさ、と響は声のトーンを落とす。

「あいつを誘うくらいなら、やっぱあつちを誘うほうがよかったんじゃないか？」

そう言つて、響は窓の外のある方向を指さす。それだけで日和良は

何を言わんとしたか察する。

「まあ、確かにあつちは悪い奴じゃないけどさ……」

日和良が絵美の方に視線を向けると、彼女も困ったように笑う。考えていることは同じようだ。

「何を考えているか分からないやつ」よりも、「何でそう考えるのかわからないやつ」のほうが苦手なんだけどね、私は……」
そう言つて、ため息をついた。

*

渡り廊下をすすむと、途中で何かが飛ぶような音がするのに夕は気がついた。

「何の音だと思う？」どこか誇らしげに語りかける杉村に、すぐに察しがついた。

「これは、県大会優勝したという……」

「なんだ、知ってたの？ ああ、理事長から聞いたのね。学校の唯一の自慢だもんね、無理ないか」

そういわれて、体育館隣へと案内される。

言われて開けた空間に、黄色、赤、黒、白と色分けされた円が描かれたのが並んでいた。

そうして風を切る音と、衝撃音を感じ、それからその的に何かが突き立っているのに気づいた。

「ド真ん中。流石ね」杉村が呟く。夕はそのまま頭を巡らせて、その矢をつき立てた本人を見つめる。

黒い肩あてに手甲。下は体操服か。名前は見えない。

やせぎすで、ややくまの見える顔であつたが、その眼が剣呑なものを孕んでいるのが夕には見て取れた。

視線は一切的から逸らさない。そうして踏み込み、構え、弓を番える。

無駄のない動き。素人目にもそれが自然で無理のない動きだと感じ

られた。

はたしてその体制から再び矢が放たれたそれは、見事再び真ん中の黄色い部分を貫いた。

アーチエリー。西洋弓ともいわれるその高校生の大会でも、見事好成績を残している少女。
すなのかすよ
砂野一世だった。

しばらく二人はそうして彼女の腕前をみていたが、四本ほど突き立ったところで、杉村が手を振り上げた。

「砂野さん。おーいー」

ようやく砂野も気が付いてくれたようだった。
すると先ほどまでの毅然とした態度とは打って変わって、大慌ての体で此方に向かってきた。

「ど、どうも、すいません、すいません」

おどおどした態度で遮二無二頭を下げてくる。

「ご、ごめんなさい、ほんと、気がきかなくて。気がつかなくて。本当に、誰かいるなんて思いもよらなくて、ずっと前しか見てなかったし、その、」

何か杉村に怯えているようだ。夕が問うような視線を杉村に送ると、「大丈夫よ、砂野さん」ひきつった笑顔を浮かべながら、ちがう、と首を振る。

「え、ええと、す、すいません。す、砂野です、じゃなかった、砂野一世です、はい」

まるでおびえた子犬のような素振りを目つきで、応対してくる砂野。ほとんどこちらと目を合わせようとはせずに、あちこちに視線を飛ばしている。

そう言っただけな笑みを浮かべる砂野。もう一度視線を杉村に寄せると、なにやらしかめつらしい顔を作っただけで見てた。こういう

子だということだ。

「先ほど射を見せてもらいました」

「そ、それはそれは、お目汚しを……おはず、かしいですよ」そう言
って視線をさまよわせる。

それを見かねたのか、杉村がこれから校舎を巡る胸を伝えた。

「そ、そうですか。それじゃあ、どうぞ、お氣をつけて。何かあつ
たら、呼んでください」

そう言つて、弓を掲げる。面白い冗談が言える人間なのだと、夕は
思うことにしてその場を後にした。

「それで、次はどんなユニークな人に会えるんですか？」

「ううん、まあ、今日はここまでよ。最初に難しい問題から解くタ
イプなの」

「さて、後は簡単なものよ。ここからは、本当になんてことない紹
介だから。ね。あと少しよ。頑張つて」

杉村の言うとおりにになった。残る案内は極めて無難なものに終わつ
た。

そして、夕食の時間が訪れた。

*

鳳凜はミッション系の学校であるが、それも今は昔のことだ。礼拝
堂はぼろぼろのまま回収されておらず、食事の時に全員でお祈りを
捧げることもない。せいぜい授業の中に「宗教」という科目があつ
たり理事長が聖書にまつわる話を朝礼などで話すくらいだが、その
どちらも居眠りしている人間には意味がない。

そんなわけで、食事も極めて普通だった。夕食の時間の間に食堂に
行き、各々が勝手にトレイをもって食事を済ませる。とはいえ娯楽
が少ないこの学園内では、癒しの時間であることも確かだった。

しかし長期休暇中はそうもいかない。普段人でひしめき合っている

食堂は空席が目立ち、それぞれが島を形成してお喋りに講じているだけ。食堂は静かなものだ

しかし日和良たちの席は、いつもよりかしましかった。

「どうもおおきに。今日は誘ってくれてありがとな」

クリステイーナ・稲葉だ。

「自分ら有名人やしな。はなしてみたいとは思っててん」

それを言うなら、間違いない彼女もそうだ。アメリカ人と日本人のハーフの彼女は、否が応でも人目を引く。

すきとおった白い肌に、きらめく金色の髪。それに加えて関西弁。美しさと親しみやすさを兼ね備えているだけあって、彼女の友人は多い。人気者という奴だ。

「それはうれしいわ」

いやいや、とのけぞりながら手を振る。

「外人言うだけで、やっぱり距離はあるからねー。あと中身がおばはんくさい言われて、がっかりされるしさんざんやで」

そういつて快活に笑う。

「ナイス自虐風冗談ね。そっちの方がいかしてるわよ」

親指を立てると、照れたように頭の後ろを描く。

「そういつてもらえると、うれしいわ」

そのあとは教師の悪口トークで盛り上がった。

クリスとはあつと言う間に打ち解け、お互いに下の名前で呼びあえるくらいになった。

基本的にはクリスと日和良が場を作り、ほかのと三人が要所要所でつつこみと詳細をはなすという流れだった。舌鋒鋭いクリスの喋りに、情感豊かな日和良の喋りが重なって、場は大いに温まった。

「あいつ字が汚いくせに、こっちが板書が読めなくて困ってたりすると、授業を受ける気がないのか、とか言い出しやがるのよね。あのM字メガネ」

「M字禿で、メガネやろうな」「Mの字のメガネだったら、おもしろい先生だよな」

「柔道部でもマッサージやなんやいうてセクハラ紛いのこととっらしいしな。エロおやじやで」

「ここの教師になれたのも、理事長のコネだとか聞くと、あんまりいい噂は聞かないよね」

「なんやかんや、久しぶりに楽しい食事だった。」

「ところで、あの子見かけないわよね」

「ああ、転校生かいな。へえ、こんな時期やったら、訳ありかな」

「まあ、そればかりは人のこと言えないよな」
響きがそうぼそりとつぶやく。

「それにしても、なんか……」

クリスはしきりに首をひねる。

「いや、なんか……変わった雰囲気の子やなって」

「まあ、せっかくやし。声掛けてみよか」

「うーん、そうだなあ」

響とクリスは乗り気だ。そうしてクリスが椅子をつかせようとしたところで、食堂のドアが開いた。

「げ、理事長」言ったのは響だが、日和良も同じことを考えていた。
「なんやろ。なんかもつとるけど……」

皆がひっそりと様子を窺っていく中で、理事長は毅然とした足取りで杉村達のテーブルに向っていった。

*

「これを、あなたに持ってきたの」

突然食堂に現れた理事長があいさつもそこそくに夕に突き出してきた

たのは、一冊のノートだった。

しかも珍しいことに、小さな錠前がその表紙には取り付けられていた。

「これは？」

プレゼントよ、と理事長はほほ笑んだ。

「これは、私の癖でね。自分の中にどうしても吐き出したい気持ちがあったり、出来事があったときには、書き留めるようにしているの。ここが若者にとってはそれなりに不自由なことは、私にも分かっているわ。誰かに聞かせるには過激な気持ちや、悩みを抱える生徒がいるときも。そういうときに、このノートを使ってほしいの。自分だけがみれる、自分のための日記帳。鍵をかけさえすれば、人に見られることもそうはないでしょう。だから、ね」

笑顔でそう語りかける理事長。夕は戸惑うが、杉村が頷いているのを見ると、皆もらっているということなのだろう。

結局押しつけられたノートを、夕は両手で受け取った。

「ありがとうございます」礼を言う夕に、理事長は満足げにうなずく。

「いつもつけるとは言わないわ。何かあったときだけに、ね」

そう言っただけで彼女は去って行った。

「まあ、あの人なりの歓迎の仕方なんだろうね。私ももらったわ」

「副会長さんも、何か書いているんですか」

「まあ、私はあんまり。普通に手紙とかに書く方が好きだから」

暫く手の中で弄ぶ姿を見て、

「もらっても別に困るものじゃないし。いつか使う時が来るまで、寝かしておいたらいいと思うわ」

はい、といって夕はしばし白紙のノートを見つめるのだった。

*

学生寮は、二つあり、四階建てが二つになる。基本的に低学年が上で、高学年が下の階。これは校舎でも同じで、つまりどっちの方が楽に目的地に着けるかということで決められる。高学年の方が優遇されているというわけである。

そんなわけで、三階に位置する二年生の部屋。

隣の様子を伺えば、絵美はもう寝ている。絵美に比べて、日和良は寝つきが悪い。たまにぼんやりと何か形にならない思いが湧きあがり、こうして夜の闇を一人過ごしていた。

「……」

そうして、一階のロビーに降りる。

「……わ！」思わず、声を上げる。

ラウンジにある自販機の隣に、たたずむ陰があったからだ。

「失礼。声をかけたほうがよかったですか？」

自販機の光で、その顔が見えた。よく知らない相手。いや、車に乗っていた子。転校生だ。

「あ、いや、気にしないで」ははは、と情けない姿をごまかすように嗤う。そうしてお目当てのホットミルクのボタンを押す。

それから少し迷ったが、日和良も座ることにした。今日は話しかけられなかったし、せつかくだから少し話すのも悪くないだろう。

沈黙。紅茶をすする音だけが部屋に響く。

「ええと、転校生なのよね。私は、小林日和良。二年C組の」

「はいそうです。一年B組に入る、橘夕です」

お互いに、よろしく、と簡単に頭を下げると、そのまま二人して黙りこんでしまった。

そうして間が持たないことに息苦しさを覚える。相手は無愛想なたちようだが、このまま無言で帰るのもあれだ。と、そこで適当な話の切り口を見つけた。

「あ。そのストラップ……かわいいわね」

何気ない一言だった。会話の糸口をつかむために。

「ねえ、それって……あはは、なんか変だねー」

そんな言葉が思わず口をついて出ていた。

そこで質問のバカさか現に気付いた日和良は、続きを口にしようとした。

だが、そこであることに気付いた。

「何がですか？」

その視線を受けて、ぞっとする。先ほどまでとは違う、湿度と冷度の同居した瞳。

橘夕が、こちらを射竦めんばかりの勢いで、見つめてきたからだ。思わず言葉を失ってしまう。

「何が、変なんですか？」

闇のなかにもかかわらず、いやだからこそ明確な輪郭を伴った敵意、凶暴な意思が、そこにははつきりと感じられたからだ。

「あ、いや、ごめん、なんだか、橘さんのイメージと違ってかわいらしいからさ、その ごめん」

気まずい思いをしながら、必死に頭を下げる。

一体なんだ、この反応は？

非常に不可解なものを感じながら、相手の眼を見る。

それはどこか研ぎ澄まされた刃のような、鋭く野蛮な視線。

先ほどの浜形などとも違う。もっと別の――。

そんな日和良の疑問は、突然肩を掴まれて吹っ飛んでしまった。

「わー！」

思わず飛び上がる。その勢いのまま目を見開いて映した相手は、誰あらん。

「ひーびーきー！ー！！！」

「わはは、ビビった？びびった？」

肩をいからせ睨みつける日和良もなんのその、上機嫌に此方を指差してくる響。

よ、と軽い挨拶を転入生に投げながら、自販機に小銭を投入する。

「何？お友達になったのか」ココアを片手に、微妙に答えずらい問いかけをしてくる響。どうこたえるか、日和良は一瞬悩んだ。

「たまたま一緒になっただけです」転校生はあっさりとはっきりと解決してくれた。いい性格だ。

「そか。そんじゃ、こいつ借りるぞ。ひよ、ちょいつきあえ」

そう言っただけで箱の方へ歩き出す。

「え、ちょ、じゃ、じゃあね」

暗闇に半分溶け込んだ橘に手を挙げながら、日和良は表に出るのだった。

第一話 赤と白（４）

学生寮から五分ほど歩き、日和良は学園の中心にある広場にまで連れてこられた。

「どうしたのよ、こんなとこにまで引っ張って。月見酒にはちと時期外れじゃない？」

「いや、いいじゃんか。そんな日もあるって」

そう言つて、響はベンチに腰を落とす。日和良もそれに続く。

「松浪とクリス。いい奴だよな」

「……そうね。クリスは気安く接してくれるし、松浪さんもいい人よね。二人、仲がいいのもわかるわ」

二人とも、これまでほとんど接触がなかったのが悔やまれるくらい、気の合う相手だ。あの二人を通じてほかの学生とも付き合いを重なれば、友達を増やしていくことも難しいことではないだろう。

今のところ評判こそ良くないが、学生同士での付き合いでも問題のある相手ではないとすれば、それだけでも十分だ。

「なあ。あの二人を、本気で打算だけで仲良くしようと思つてたのか」

それはもはや質問ではなかった。響はこういう時遠慮なく問い詰めてくる。

「……わかつてるわよ」

白い息を闇に溶かしながら、足元をみつめる。

こうやって、人との繋がりを作れば、居場所が出来ていく。逃げ出すはずのこの学校という場所で。

居心地のいい場所を作っているのだ。

矛盾しているのだ。私たちのやっていることは。

居心地の悪いはずの場所から逃げ出そうとしていたはずが、少しずつ慣れて、認めて、そうして当たり前になっていく。

オペレーション友達？それは本当か？

目指す場所は違っていても、結局は同じことをやっている。

ただただ以前は軽蔑していただけの、「ごく普通の」学生と。

ただただ何も考えず、毎日を謳歌する若者。

それとなんら、変わらない。

それに、と唾を呑みこんでから響は言った。

「おまえ、ひよつとして私らに罪悪感……あるんじゃないか」

響は言葉を噛みしめるようにして、日和良に話しかける。

「誘ったのは自分で、巻きこんじまったとか考えて………それで、今私らをあっちに馴染ませようとしてるんじゃないか？」

「……あんたも、色々考える奴よね」

大森響の本質は、その態度や容姿とは裏腹だ。

繊細で心の機微に敏感で、そして傷つきやすい。だからこそ彼女は敵に対して冷ややかであり、仲間に対しての温情に厚い。友人でいたいと、思わせてくれる。

そんな彼女だからこそ、色々なものが見える。色々なことを、分かってくる。

「買い被りすぎ。考えることはあるけれど、そこまで深い人間じゃないわよ、私は。何でも間でも他人の責任までひつかぶるのも、失礼だって知ってるわ」

日和良は大仰に肩をすくめると、響に向かってはつきりといった。

「私はこれまでと同じ。こうしたいから、こうすべきだと思うから今行動している。それだけよ」

そうして相手の目を見据える。響はしばらくそのまま瞬きを繰り返すと、視線を外した。

「ならいいんだ」

響が隣に並ぶ。どこを見るともなしに、夜の山の向こうを見つめている。

二人は黙って、しばらくそうしていた。

「綺麗だな」響が呟く。あまりにも真っ直ぐな言葉。だから私も、思いついた言葉で返す。

「……こういうのも、青春かな」

「だろな。つまんない、当たり前前の、何でもない毎日だよ」

「でも、悪くないと思える……のかな？」

友達とあれこれ騒いで、おしゃべりして、ぼんやりとあさつての方を見つめる。勉強もスポーツもしてないけど、多分こういうのがこの学校にいる生徒の正しい青春なんだろう。打ち込むモノがなくなつた。みんなと一緒なら、なんとなくでも生きていける。

「ま、一人で歩いてるんじゃないってわかってりゃ、大丈夫だよ。

みんなさ」

明確な目標や倒すべき敵。超えるべき壁。そんなものがなくっても、人は困らない。

「かもな。……てかお前寒くね？」

「寝間着のまま連れ出したのはアンタでしょーが！」

そう言つて、二人笑いながら、肩を震わせながら、寮へ歩きだす。

そうして、夜空を眺める。

星はきれいだけど私だけのものじゃない。友達はいるけど、私だけの友達じゃない。

特別なものは何一つない。何でもない一日。
でも悪くない。そう思える。

「明日は明日で、声掛けるわよ。それが、私らだから」
へいへい、と響は片手をひらひらさせながら答える。

まあいいさ。何かが変わるかもしれないし、変わらないかもしれない。それでいい。

自分は一人でないと、それだけを分かっていたら。

なんとなくいい気分になった日和良は、ふとその視覚のなかで、違和感を感じた。

そうして、じつと寮の四階を見つめる。

「……？」

隅の部屋のカーテンが揺れた気がした、のだが。
気のせいだろうか。いや……。

まあいいさ。大きな欠伸をしながら、日和良は寮まで歩いた。

*

橘タの部屋として割り当てられたのは、最上階の奥にある一室だった。

元は物置代わりに使われていた部屋だが、掃除されており埃臭さは感じない。

何より、他よりも狭いため一人部屋なのがあった。

窓の外に立つ人影から視線を外し、タは簡素なベッドの上に座りこむ。

部屋の天井を見つめながら、今日一日を振り返る。

優しい言葉をかけながら、迎えてくれた理事長。

人の良さそうな笑みで、自分を案内してくれた副会長。

才能にあふれ、青春を謳歌している学生。

食事しながら、おしゃべりに講じる者たち。

「くだらない」

そう一人ごちると、一度上着を脱ぐ。上半身裸になったまま、喉元につけていたチョーカーを外し、しばし手をはわせる。そこにあるしこりを確かめながら、自分の体を確かめる。

華奢な体に、整った顔だち。体の随所に擦過傷ややけどの跡さえなければ、十二分に魅力的な女性と間違えるかもしれない。加えて、ボクサーパンツを脱がなければの話だが。

そうして、机の上に置いたノートを見つめる。鍵をかけられるノート。自分だけが読めるような、自分にしか吐き出せない思いを書くノート。

杉村は何と言っていたか。「これは、みんながもらうノート。鳳凜の学生の証しみたいなもの」

夕はしばしそれを見つめると、ボストンバッグの底に手をつ突っ込む。そこから隠し入れてあったライターを取り出し、親指に力を込める。薄暗い部屋を小さな火が照らし出し、全てを明らかにする。

その火の中にノートの端を突っ込んだ。

火が、ノートを炙り形を変えながら、踊る。

その灯りを見つめながら、夕は今日図書室でした会話を思い出す。

長いまつ毛。人形めいた面持ち。人を測る様な視線。

「——あの人は、殺されたのよ」あの女はそう言った。

そんなことは知っている。問題は、殺したのは誰か、だ。

「——そうよ。学内の生徒がやったのよ。でも、誰かは分からない。それでも学園は揉み消した。ここはそういう場所なのよ」女の唇が、歪む。

そうだ。誰も傷つかず、誰も困らず、何もなかった。そういうことにされる。鳳凜学園は、そういう場所だ。

「クソ野郎どもめ」

楽しい学園生活？素晴らしい青春？学ぶ機会？
偽善者め。お前たちの悪行を、俺は知っている。

火が手元に迫る中、その半分燃えカスになったノートを、ゴミ箱の中に投げ込む。

頭の中に残った女の声が、耳朵を打つ。

「——貴方が一体何をする気かは知らないけど、楽しみにしているわ」

好きにすればいいさ。

お前たちが何であれ、何者であれ、関係はない。俺のできることなど高が知れている。

死人はかえらない。だから、人間に出来るのは死人を増やし続けることだ。

深い闇の帳の中で、暫くその火は一人の少年の影法師を窓に投げかける。

そうしてやがて燃え尽きると、再び全ては闇の中に消えた。

第一話 了

第一話 赤と白（4）（後書き）

次話からようやくゾンビの登場となります。お待ちせしました。
が、その前に手記をちょっとだけやります。すいませんが、もうしばらくのご辛抱を。

手記2

都会に生きる若者に、音楽プレイヤーは欠かせないものだ。それは都会の雑踏やけたたましい騒音から耳を守ってやるというだけでない。自分が、自分だけの世界にその心を浸らせるために必要な、必須アイテムでもある。ただの耳せんとは訳が違う。自分の気持ちがよくなる音楽、テンションが上がり、気分を落ち着けてくれる振動をそのまま脳に伝えてくれる。

耳は自分の意思で閉じることが出来ない。だから、うまく付き合う必要がある。

イヤホンは瞼とか唇と同じくらい重要なものと、私は思っている。自分が自分であるために。

あの日も私は、そんな風にして自分の世界に入っていた。だから自分の目の前の光景に、なにも気づかなかった。

編隊を組んで飛んでいたヘリコプター。都内でやたらと走っているのを見かけた、自衛隊の車。車の事故の多発と、電車の遅滞。ひっきりなしに聞こえるサイレン。交通止め。鋭い眼光で無線を取り合っているながら、街の中を走る警官たち。

でも私はそんなものに目もくれずに、携帯電話で学外の友人たちにおくるメールを打ち込みながら、音楽ロック調の激しい洋楽を聞きながら電車を乗り継いで行た。私にとっては退屈な学園での生活の前、今ある最後の自由な時間が大事だった。それに、そうした厄介事は自分とは関係ないと思っていた。

だってそうじゃないか。

凄惨な事件がとか大変ゆゆしき事態だとか、いつだってテレビや新聞はかきたてるけれど、それだってしばらくすればみんなけろりとして何にもなかったかのように過ごしている。ウチの叔母なんか、そうだ。一日中テレビにかじりついて、「かわいそうにねえ」「なんてひどい」「こわいわねえ」なんてことを母と毎朝交わしている。そんなことを毎日毎日言っていて、おかしいだなんて思わないのだろうか。他人の悲劇や、誰かの凶行が、たったそれだけの言葉で済まされていいのか。機械的に事務的に反射的にそういつているだけじゃないのか。

これは、ほとんどのテレビにいえることだ。現実を一部分だけ切り取って、それでまじめ腐った顔をしてもっともらしい言葉を言う。でもそれは大抵、もっともらしいだけの言葉だ。何の重みも価値もない、だれかが思っているであろう言葉。誰かが言うであろう言葉を言っているだけだ。

最大公約数ってやつだ。見ている人が不快にならないよう、適当なことで場を濁す。

そうして大事だったはずのこともルーチン化してしまえば、どんな意味のある言葉だってその本当の価値を失ってしまう。

水槽だって、綺麗な水を保つにはをフィルターをまめに変えないといけない。

いや、というよりはティーパックだ。

使い古したティーパックは、薄くてまずくて、古くさいお茶しか出すことができないんじゃないだろうか。

だから私たちは、出されたマズイお茶に、みんな見向きもしなくなっていくんだ。お茶を出すのは、一応の礼儀だったり習慣だから一応する。でも、まずかったら誰も飲まない。そういうことだろ。

だから私たちはテレビが何か言っていることに見向きもしなくなるし、つけるのもうんざりしてくる。こういう風を感じているのは自分だけじゃないと思う。

頭のエライ人は若い人をバカだバカだというけれど、それくらいは分かるんだ。

でも、気づかなかったのは私だけの責任だろうか。

誰が思うんだ？いつも必要以上に騒ぎ立て、あおり立てるだけのニュースが、テレビが、みんな一斉に口をつぐんでしまうなんて。

本当に危険な出来事を前に、何も知らせようとしないなんて。

ほかに、深夜に起きた緊急速報。何かを言おうとして、突然消えたレポーター。映像の途切れた中継。

不自然なほどのCM入り。

彼らは自分たちが伝えるべき言葉を、喉の奥にひっこんだまま、ただただ嘘をつかない程度に事実を伝えるようにしていた。

後から聞いた話しによれば、政府が事態を本格的に認めたのは、海外でも同様の事例があったことが認められたからだって言うじゃないか。それでも政府は詳しいことを何も言おうとはせずに、とにかく自宅から出ないようにとしか言わなかったらしい。

大人たちがどうしようとしていたのかは知らない。こっそりと事態を収拾する可能性に賭けていたのかもしれないし、そうしなければもつと悪いことが起こると思って、あえてそうしたのかもしれない。それが彼らにとっては、最善の選択肢だったのかもしれない。彼らにとって。

それでも、思ってしまう。彼らの誰かが、声を上げてくれていたら、真実を叫ぶことができたのならば。

今の状況は少しでも変わっていたのだろうか。死ぬべきでなかった人間たちは、生きることが出来たんじゃないだろうか。

それともみんながパニックになってめちゃくちゃになって、今よりもっとひどくなっていたんだろうか。

どちらにせよ、今となってはテレビをつけても、砂嵐以外見えるものはない。くだらない話も、乾いた笑い声も、テレビからは聞こえない。

私たちに聞こえるのは、誰かの叫び声か、すすり泣く声。

あるいは亡者たちが時折発する、うめき声だけだ。

だから私は、今日もずっとイヤホンをしたまま眠りに就く。

少しでも、彼らの声が聞こえぬように。耳にこびりついた音を、忘れるために。

自分が、自分であるために。

—— 中田 汐織

手記3

人がゲロをはくのは、防衛行動なのだという。胃袋の中に入った異物ややばいものを取り込まないために、吐くという機能が人間には備わっているのだという。

そんな話を、今日聞いた。

ていうか、ゲロというのはなんだろう。日本語でいいのだろうか。語感としてはそのままのだけれど、カタカナ？でいいのだろうか。お好み焼き？何かもつと別の言い回しがあつた気がするけど、思い出せない。こういう風に紙に記す以上は、なるだけ丁寧な言葉で書きたいのだけど。

まあゲロってことで。とりあえず。

そんな話をわざわざするからには、誰かがゲロを吐いたという話をするわけで、私がその体験者だった。

今日私は吐いた。一生分吐いた。

あの光景を前に、匂いは吸いこんで、その後の作業も合わせて、滝のように吐いた。

食事もほとんどのを通らなかった。飲んだ水さえ、一時間もしないうちに土の上にまき散らしてしまった。

今でも目を閉じて、視界が闇に覆われると思い出す。思い出してしまう。

まるで映画館のなかのように、記憶のなかから圧倒的な迫力と臨場感を持って、あの光景が。

瞼の裏に、まるで当たり前のように映し出される。

何度眠ろうとしても、そうなるのだ。何度も、何度も。繰り返し、まるでフィルムがそこで回ることが

決まっていたかのように。

今文章を吐き出す、というのがこういうものなのかと初めて知った。現国の授業など、いつも退屈にしか思えなかった私だけど、今はちよつとまた見方が変わるのかもしれない。

この学園にきて、メールもろくに打てないというのは私にしてはわりとうれしかった。あんなちまちましたものをびこび打つのが好きだなんて、みんなどうかしている。しかも女子高生が使うメールの言語は、ひたすらに装飾華美で通常の三倍の手間がかかる。父親なんてメールには数字と漢字しか打ってこなかったというのに！女子高生のいかに不便なことか。想像できるだろうか。たまに実家の近所のファストフードなんかで高速でメールを打ちまくる女子高生なんか見ると、腱鞘炎になるんじゃないかと心配になる。

そんなわたしが、こんなに必死になって文字を書いているんだから不思議だ。

ため込んで、人に話して、それでもそれでも止まらない何かが自分のなかからあふれてくる。

こうやって言葉にして、ノートの上に文字の形で吐き出している。不思議だ。

こうやって言葉を吐き出して、自分の心を防御しているのかもしれない。なにから？恐怖だろうか。

けれども正直な話、あの光景をどう表現すべきか、どういえばいいのかさっぱりわからない。

これまで散々関係のない話ばかり書き連ねてきたのは、そのせいだ。どれだけあの時のことを語ろうとしても、言葉が見つからない。

ゲロを上手くいうことさえできないんだから、当たり前なのだけど。それでもわざわざこんなものを書いている以上、それを避けては通れない。

しいて言うなら、地獄だった。

陳腐で言い古されていて、言いたくもないけど、地獄なんだろう。けど。

そうなんだけれど、それだけで終わらせたくないだけの迫力があつたし、もっと、そう、リアルだった。

人が死ぬということ。人が人を殺すということ。人間の体の中身。暴力。

思い出したくもないけれど、忘れられない記憶。

眼の前で見た人間にしか分からないリアルだったと思う。いや、私よりももっとひどい経験をした人はたくさんいるのはわかっている。その後にもいろいろあつたし、私なんかが特別どうこうと言えた口ではない。

あの時の私はただ怯えて、怖がつて、おろおろしているばかりだった。だから、みんなが知らないことを知っているということはない。それでも、そう、こうして何か言葉にしようとしたことだけは確かだ。私にしかない言葉で、何とかしようとした。それが大事だと思う。開き直りか？

書きたいことがもっと有ったはずなのに、もっといろんなことを言いたかったはずなのに。なぜだか、すこしすつきりした気がする。私はもしかしたら、あのことを伝えたいんじゃないやなくて、あの光景をみた私自身のことを知ってほしかったのかもしれない。

誰かが言っていた気がする。会話の本質は会話の内容それ自体にはないと。

だからそんなわけで瞼も重くなってきた。そろそろペンを置くことにする。

どちらにせよ、あのバスから始まった地獄を、思い出したくはない。
寝ゲロはごめんだ。

思いだした。吐しゃ物だ。すつきりした。

——池田裕美

手記3（後書き）

また手記でした。

というわけで、ようやく次回からゾンビ登場です。
やっただ……。

第二話 攻撃的な死と再生（1）

脳に響く音を聞いて、橘夕は瞼たちばなゆうを開けた。

冬の朝。まだ温もりが残るベッドからのそりと起き上がり、まず服装の乱れを確認した。

寝間着には上下ともにだぼつとしたスウェットを着ているので、体の線は見えていない。とはいえ油断は禁物だ。姿見で自分の姿を確認していた矢先に、部屋のドアを控えめに叩く音がした。

「おはよう、夕さん。昨日はよく眠れた？」

案の定、ドアの向こうには副会長が来ていた。

「ええ。思っていたよりもずっと快適でした。それに、朝も……目覚まし時計はいらないって言っていたわけがよくわかりました」副会長は窓の外を見やりながら、笑う。

「すごい音だったでしょう。学園中に響くのよ」

耳を澄ませなくても、聞こえてきた。遠くから聞こえる鐘の音が。

学園の隅。そこにはぽつんと忘れさられたように礼拝堂が建てられている。

なんでも学園が立てられる以前からあったというその礼拝堂は、よくいえば歴史のある、悪く言えばぼろちい、隙間風が冷たい建物だった。

長椅子が等間隔で並べられ、日の光が集められたグラスが中を照らす。

いかにも人の良さそうな少女が、せっせと掃除をしているのが印象的だった。確か檜尾ひおといっただろうか。

彼女自身は一生徒なのだが、熱心なクリスチャンらしく自主的にせっせと拭き掃除に励んでいた。

「何か一人思い悩むことがあれば、どうぞ此处へ来てください。神は迷えるものの味方です」

そういつて穏やかな笑みをこちらに見せていた。

「そうなると鐘というのは、やはりシスターがついているんですか？ お寺みたいに？」

着換える時にまで入ってこられると面倒だったが、相手もそこまで踏み込んで来ないあたり、節度は心得ているらしい。三分ほどで着替えると、連れだって階段を降りた。

昨日副会長に紹介された他の学生と挨拶をかわしつつ、玄関からでる。

「いいえ。自動式よ。元々学長、理事長の旦那さんが鳴らすようにしていたらしいんだけど、お年を召してから機械に任せるようになったらしいわ。おかげで私たちは、休みの日にまで早起きを強制されるってわけ」

寝ぼけ眼をこすりながら、そう言うのだった。

食堂までは、歩いて五分ほど。

普段は寮、食堂とばらばらに分けられて食事をそれぞれするらしいのだが、休暇中は一か所で片づけられるらしい。

食堂につくと、配膳場所から料理の乗ったプレートを手についた。朝食の内容はパンにオムレツやハムがついたもの。それから空のカップが置いてある。

「基本的に鳳凜の朝食はパンとご飯が交互に出るわ。それとスープはご自由に。昨日の夕食と同じ奴だけだね。あ、足りなかったら食堂のおばさんに言ったら、パンおまけしてくれるわよ」

ミッション系ということで慎ましかない料理しか出ないのでは、という危惧は幸いにも外れた。夕はパンをもう一つ追加でもらいに、調理場に居るおばさんに声をかけた。

「あら、貴方……は転校生の子ね」

はいそうです、どうぞよろしく願います。昨日何度も繰り返した挨拶を返すと、タヌキ顔のおばさんは破顔した。

「かわいらしいわねえ。はい。これ、もう一個ね。朝は食べた方がいいわよ、ちゃんとね。いやそれにしても、うちの娘がこれくらいかわいかったら……」

「あ、すいません、横江さん。お腹がすいてしょうがないんで……」
あらそれはごめんねえ、と笑顔を崩さないオバさんの会話を必死に切り上げて、四人がけのテーブルに陣取った。

「横江さんは話し好きだから、食堂が混んでない時は気をつけてね」
はい、と夕は殊勝に頷いた。なるほど、学園生活は危険がいっぱいというわけだ。

「まあ、基本的に内の学校はみんないい人ばかりだから。キチンとした態度でいれば、悪いことにはならないからね」
そいつはどうだろうな。背中を向けた杉村に対して、夕は薄い笑みを浮かべた。

*

背が高いのが駄目だった。目つきが悪いのが駄目だった。性格が暗いのが駄目だった。

^{ありびの}存尾駅前のショッピングセンター。垢ぬけないブティックの前で、くすんだショーウィンドーに映る自分の姿を見て、^{ねもとみどり}根元碧はため息をついた。

登校日。彼女にとっては憂鬱以外の何物でもないその日が、とうとうきてしまった。

朝食も殆ど喉を通らず、昨日の夜も不安な想像で眠れることはなかった。

いったい、自分の何がいけないのか。

碧は思い返す。自分が如何にしてこれまでの人生で辛酸をなめるにいたったかを。

背が高かったから、人を出来るだけ真っ直ぐに見ようとして猫背になって、笑われた。

眼が生まれつき悪く、度があっていない眼鏡を買われたせいで、時折睨むような目つきになって、舌打ちされた。

「むかつく」という声を聞けば、相手手御どう接すればいいのか分からなくなった。

だからそんな自分がどうなるかは決まっていた。

嫌われ、疎まれ、誰からも無視される。だからここに逃げてきた。でも、それでよくなる保証なんてなかったと、どうして自分は気付かなかったのだろう。

うじうじと思い悩みながら、時計を確認する。

十五分ほどで駅前を一周してから、もう一度バス停まで戻ってきた。手持無沙汰のまま皆で集まる空間というのは、碧にとっては苦痛以外の何物でもなかったから、時間を潰していたのだ。

今度はバスが到着しているのを見て、ほっとする半面、落ち込んでいる自分がいた。

必死に誰とも眼を合わせないようにして、列に並ぶ。

離れ過ぎて注意を引かないように、近すぎて煙たがられないように。

「あ、ネクラさんじゃん。来てんだ」

声を掛けられて、心臓が止まりそうになる。

「もう来ないかと思ってた」

「ほんとほんと。偉いよねーわざわざ」

三人の女性とが、碧の周りを取り囲んできた。そうして、手で体を叩いてくる。

肩で押し合うだけの、ただの嫌がらせ。当たり前だ。まだ近くには先生がいる。

獲物をいたぶる猫のような眼を三人は向けながら好き勝手に話しかける。

「……ねえ。何か言ったらどうなの。ネクラさーん」

ネクラ。それが今の自分のあだ名だ。

逃げ込んだ先でも、結局同じことが繰り返されることになってしまった。

ちよつとしたことでもからかわれるようになり、それにまごついていると段々と怒りをぶつけられるようになる。友達だったはずの相手たちはいつの間にか彼女を侮蔑の目で見えるようになっていた。

少女たちはまるで悪質さを自慢し合うかのように、ちよつかいをかけては笑いの種にしている。

自分は玩具だった。

「こんにちは。すいません」

三人はドツと笑う。どうせ何かを言い返したり答えたりしても、ナマイキだの調子に乗っているだの言われるのが落ちだ。だったらこうやって最初から笑い物にされる方がいい。

三人はじゃれ合っている主張できる程度に碧の体にふれあつてくる。碧は必死にそれらを表情を変えることなく受け流し、荷物を預けて、先にバスへと乗り込んだ。

バスの真ん中あたりで、一つだけ開いている座席に滑り込む。

桃井たち三人組は碧の近くに陣取れないのを見て、にやりといやらしい笑みを浮かべて後ろの方へむかった。それを見て、碧はようやく人心地つくことができた。

まだだ。まだ私は大丈夫。

深呼吸しながら、必死に自分に言い聞かせる。そうしていざという時のためのお守りを、翠は手に取るため鞆の奥に手を伸ばす。昔本当のお父さんに買ってもらった小ぶりなナイフ。

だけど、それがなんだというのだ。そんなものがあっても何が変わるはずもない。どうせ自分には、何もできはしないのだ。

憂鬱な日々。手首にまいたリストバンドをさすりながら、できるだけ意識を殺しながら思う。

どうか出来るだけ早く、この日々が終わることを。

＊

まったく。なんて日だ。

あいかわゆうたろう

哀川勇太郎は、今日何度目かというため息を漏らした。

しかしそれは彼だけではない。同僚である鳳稟の教師はみな、同じ気持ちだろう。

バス、電車の遅延。各地での交通網のトラブルによって、登校のための予定はめちゃくちゃだった。

「どうやら、ずいぶん遅刻しそうですね」

隣の席の柿谷は、そう言って空手でならしたらしい頑強な肩をすくめる。

「こ、困りましたね。まだ何十人も残っている」

チャーターされたバスは三台ほどだったが、結局駅まで現れたのは二台だけだ。もう一台は、どうやら別のトラブルに巻き込まれたとかで、遅れてくるらしい。

そのため、やむなく来ている生徒の一部とバスだけでも先に学園へ向かうという形で、ついさっきようやく動き出したばかりだ。生徒を優先するため、教師陣は一部を除いてほとんどに駅で待ってもらう形となった。まあその連中に比べれば、いまこうして暖房のきいた車内にいる自分は幸運かもしれないが。

「仕方ありませんよ。交通網はどこかしこもこの調子です。急げというほうが無理です」

十時二十分。本来ならばとくに学園へ向かっているはずだが、すでに小一時間は遅れている。あとで理事長がどんな難癖をつけて説教を垂れようとしてくるのかを考えると、哀川はもう一度ため息をつかざるを得なかった。

大体、あんな山間に学校を建てるのがおかしいのだ。哀川は心の中で日頃の鬱憤を漏らす。そのせいで、わざわざ車で乗り付けなければいけないという不便を享受しなければならない。

そのおかげで教師の給金が弾まれるのは結構だが、独身で無趣味の自分には、どうせ使い道もない。隣の柿谷や立木のように妻子ある身なら、単身赴任だと納得もできようが。

そもそも、自分はそれほど教職とやらの興味があるわけでもない。女子生徒から人気があるわけでもない。自分の風采がさえないことは、自分が一番よく知っている。口下手だし、授業だって単調そのものだろう。

要は金だ。こんな不便なところ、仕事にあぶれるか街に居づらくなつたか、女生徒におかしな幻想を抱いた奴らくらいしか働きたいと思わないだろう。少なくとも哀川の周りにいる教師は皆そうだ。このバスに乗っている連中だって。

そこでふと立木のほうに目をやると、何やら穏やかではない雰囲気だ。騒ぎ出す車内にあって、通路を隔てた向こうで、哀川は立木と柿谷が教師たちが声をひそめて話し合うのに耳をすませた。

「原因はやはり、例の感染症の件ですかねえ」立木が、あごひげを撫でながら呟く。

「まさか。あれは北九州で食い止められたんでしょう？外国からの旅行者へのチェックだって万全だって聞いています、けど」

「そりゃあね。まあお上はそうだろうがね。世の中には建前っていうものがあるでしょうが」

「いやでもまあ、大丈夫ですよ。今のところ、そんな騒ぎにはなっていないし」

「ああ政府も今のところは何も言っていないですしね」

不安と期待の入りじまった勝手な憶測を話す二人を、哀川は内心で笑う。ふん、馬鹿丸出したな。

騒ぎになっていないほうがおかしいんだ。いつもちよつとしたことでも右へ左へと大騒ぎするマスコミ各社が、ここに至ってだんまりを決め込んで普段通りの報道を取り繕っている。それこそが今はやっている「感染症」の異様さを物語っている。

報道規制。そんな言葉が頭に浮かぶ。おそらくはそのせいだろう、

と思う反面それ以上のことを考えられない自分がいる。

哀川は複雑な思いで携帯から電子掲示板を覗く。そこでは様々な局所的なニュースや時事問題に対しての話題が取り上げられているが、いずらも無駄に煽りたてるだけか騒いでいるだけで、問題の本質に触れているような情報は殆どない。

気になったものと言えば、せいぜい、「中国からは既に大勢が逃げ出している」という情報があるだけだ。それならば感染症の規模がつかめないのも、その正体が漠として知れないのも納得はできる。

つまりは大国の事情だ。政治とやらが絡むと、世の中は途端に面倒くさくなる。社会化の教師としては、それくらいは常識だ。

だがそれだけでは、一体何をすべきか、どうすべきかの指針は全く立たない。皆が食料を買い込んだり、マスクを買い占めたりしているのも、なんだか間抜けに思えてくる。

まあいい。どうせ今度もあれこれ言っていたとしても、結局は大したことはないという落ちだろう。取り越し苦労ばかりするのは、御免だ。

哀川は都合何度目かというため息をつきながら、バスの外に流れる風景を見つめる。取り繕って華やかさを演出された駅前を抜けると、すぐさま地方らしい憂鬱で沈鬱な町並みが過ぎ去っていく。

「え？」

一瞬、哀川は視界に奇妙なものをとらえる。しかし風景とともに消え去ったそれが、なんなのか。一瞬考えて出した答えは、信じがたいものだった。

「どうかしましたか、哀川先生？」

隣で雑誌を見ていた佐志場が怪訝そうな顔をする。哀川は騒然としている車内を見回すが、同じような反応の人間はいない。見たのは自分だけか。

「い、いや、なんでも、ないです」

哀川が卑屈な笑みを浮かべてそういうと、柿谷は肩をすくめて再び雑誌に視線を落とした。

何を見たのかなんてまともな社会人ならいえるはずがないし、見間違いに決まっているだろう。

まさかな。

先ほど見つめた光景は、錯覚だった。哀川はそう思うことにした。倒れた人間の体に、何人もの人がかぶりついているように見えたその光景を。

*

「……それでね、会長は片付いたら直ぐ様また前みたいにごろんてしてね。ふふ、おかしかったわ。三年寝太郎ツて云うのは、ああいう人のことを言うのよね」

そう言つて楽しそうに笑う杉村に、夕もほほ笑みを作る。

夕と杉村は、図書館に居た。朝食の後で一度別れたのだが、つい先ほど杉村が本を返しに来てそのまま夕ト出くわし談笑している。

ちなみに今は霧生はいない。

そこでいくつか学内にいない有名人についての話を振ってみたところ、生徒会の会長の武勇伝を聞かされる羽目になってしまっていた。

「面白い方なんですネ」

「そうよ。ほんと、下についている人間としては仕事とか大変だし。腹が立つことも多いんだけど。……でも、ああいう人を、なんていうか、度量が広いとか、傑物とかいうんでしょうね」

そう言つて、杉村は遠い目をする。どうやら、生徒会長である赤塚とやらはよつぽどのカリスマを持ち合わせているらしい。三年生でありながら、その人気ぶりから生徒会長を二年連続で引き受けたというくらいなのだからには、それこそよほどだろう。

学内の成績はトップで、推薦で国内一、二位を争う大学への推薦も決まっている。

性格にこそ癖はあるが、基本的にモラルを重んじ情にも厚い。

「でも、どうしても馬の合わない相手っていうのはいるんじゃない

ですか。そんな人でも」

そんな風に水を向けると、うーん、と杉村は唸った。

「まあ、そうね。一部の教師からは嫌われてるし……あとは、そう、小林さんとも衝突していたかな」

「小林さん？あの、髪を後ろでくくった……」昨夜会話を交わした少女の顔を思い浮かべる。

「そうそう。あのサムライみたいなポニーテールの子。あの子も結構な問題児でね……」

それからしばらく小林についての話を聞いた後、夕がくしゃみをしたのをきっかけに、寮に戻ることにした。「みんな、朝方は寮から離れないのよ。校舎は寒いから」鼻水を吹きながら、夕も頷いた。

戻る道すがらで、エプロンをつけたおばさんに出くわした。

「ああ、貴方達。どこの寮の人？」

「ミカエル寮ですけど、どうかしましたか？」

「それなら、ちょっと生徒さんたちに伝えておいてほしいんだけど。ごめんなさいね、ちょっと昼御飯が遅れるかもって」

杉村は笑顔で答えた。

「はい、かまいませんよ。なにかあつたんですか？」

「いやね、横江さんと隅田さんがね、戻ってこないのよ」

「どうやら、買い出しに行った二人がまだ戻ってきていないらしい。」

おばさんは首をひねる。

「何かあつたのかしらね」

調理のおばさんたちは存尾市から通ってきているらしい。トラブルがあれば学校所定の番号まで連絡がいくはずなのだが、それもないという。

「何もなければいいんだけどねえ」

不安げな言葉を投げかけながら、おばさんは去って行った。

横江さん。知った顔だ。今朝がた会話を交わした、タヌキ顔のオバ

サンの顔を思い浮かべる。

……呑気に、道草を食っているだけじゃないのか。

*

バスは九十九折りの山間を走り、トンネルを抜けて、なだらかな斜面にさしかかった。

再会を喜ぶ気持も、お互いの近況報告も終わり、車内が少し静かになったころ。

「ちよつとあれ！」

向かう途中で一人が声を挙げた。

「ねえ……あの車、調理のおばさんたちのじゃないの？」

その声を皮切りに、車内は生徒たちの声で満たされた。

「車が、壊れている」「ウソでしょ、あれ」「え、マジなの」

少女たちがどよめきながら、左方の窓にへばりつく。碧も文庫本から視線を挙げて、肩越しにその様子を窺う。

なだらかな勾配の途中でやや右にカーブした道路。

そこから真っ直ぐ飛び出し、木の幹に鼻先を突っ込んでいる車が見えた。

ボンネットのひしゃげている様子から、根元はつぶれた紙パックを連想した。

運転ミスだろうか。

おそらく中に居る人は生きてはいまい。しかし所詮は他人事。生徒たちは眉をひそめて車を眺めつつ、好奇の視線をスクラップになったそれに注いでいる。自分とて例外ではない。

そのことに気付き、嫌悪感を抱いた碧は、視線を車内の前部に向ける。

前の方に居た教師たちが、額を突き合わせ話しあっている。そうして一人が運転手に向かって何かを告げると、そのままバスは速度を落とし、停止した。道の揺れが亡くなり、エンジンの振動だけが体

に響く。

再び運転手と話し合い、間もなく教師が此方を向いて「静かに！」と大声をあげた。

「えー、どうやら事故があつたようです。本車は一時停止して、これから我々で運転者の安全を確認してきます」

バスに備え付けられていたスピーカー越しに新任教師である上坂が、緊張が地に話したすと、生徒たちの話声も収まった。

「皆さんは、このまま座つたまま待つていてください。後ろのバスも止まりますので」

「あれ、うちの学校の人の車ですよね！」

「中の人は、死んでるんじゃないですか！」

車内が混然となりかけた時、隣にいた禿頭の男が、ハンドマイクをひったくる。

「お前ら！いいから落ち着け！」投げかけられる問いに、化学を担当する下野が怒鳴り声で答えた。

「とにかく、俺たちが現場を確認してくるから動くな！いいな！」

皆不満を顔ににじませつつ、沈黙する。ため息が、露骨でこそないが皆の口から洩れた。

「みなさん、人の命にかかわることですよ」

シスター早瀬が嗜めた。老眼鏡のずれを直しながら、車内に視線を走らせる。

鋭い眼光で射すくめられ、反論を返す人はいなかった。

「……ええ、とにかく、みんな落ち着いて。確認してくる」

上坂がそうしめくくり、男性教師陣は全員降りて行った。

*

まったくついていない。新年早々から知り合いが事故に出くわすなんて。

都合何度目かのため息をもらしながら、哀川は教師の一団について

いく。

相手が誰なのかは、車内からでも見当がついていた。車種やナンバー、こんなところを走っていたことからもおそらくは鳳凜の職員なのは間違いない。車自体は地元から来ているおばさんたちが兼用で使っているものだから持ち主は知らないが、少なくともその四人のうち一人以上があの手内に居るのは確かだろう。

警察にすべて任せてしまいたいが、少なくとも安否の確認はこの目でしなければならぬ。教師たちはため息を隠しながら、真面目腐った顔でバスを降りなければならなかった。

アスファルトから、雪が解け湿った地面の上に足を運ぶ。

道路が凍っていた様子もなさそうだし、見たところは、運転ミスといったところだろうか。

のろのろとした足取りで、一同は穂を進める。

「先生方、早く」

そう言つて先頭をはきはきと歩く立木は、早く動くことを促してくる。くそ、脳味噌筋肉のゴリラめ。中の惨状を想像する力があれば、とてもじゃないが足が軽くなるはずもないのが普通だろう。

立木は真つ先に車にまでたどり着いた。皆いやいやながら、小走りになって後を追う。

案の定、車内に視線を落とした立木は顔をこわばらせていた。想像力がないことと感受性がないということとは別らしい。唇を固く結んだその顔は、先ほどよりも幾分か血色が悪く見えた。

そうして少しばかり気が楽になった哀川は、生唾を飲み込みながら車内に視線を転じる。

「こいつは……駄目ですな」

そんなものは、言われなくてもわかる。

皆、車内の惨状にしばし言葉を失った。

本来衝突事故の場合は、シートベルトに固定されたおかげでしばし外傷が目立たないこともある。だが、今回はそれに当てはまらなかった。

大木にぶつかり行き場を失った運動エネルギーは、車のフロントガラスを破碎し、その破片を車内に飛び散らせるに至っていた。そしてその破片が降り注いだ人体が結果どうなるか。

「う……」

思わず哀川は手で口を押さえ、車に背を向けてしまった。だが既に血だらけの頭部は、自分の網膜の中に焼き付いてしまっているようだった。

「痛ましいですな……」下野が、つぶやく。

「ちよつと……これ」

しかし反対側から回り込んだ柿谷が、ぼそりと呟いた。

「ここ……もう一人、座っていたんじゃないですかね」

*

後部のバスからも、男性教師たちが社内の確認に出て行き、車内は再び雑然とした声で満たされる。

「あれ、生きてんのかな？」「爆発しないよね」「絶対やばいでしょ」

にわかにざわめきだす車内を、シスター早瀬が必死に鎮めようとする。

運転手は無線を手にとって、何か話している。おそらくは警察か、病院か。

碧はそんな様子を、冷やかな視線で見つめる。

「あ、立木が中をみたよ」

碧の意識は窓の向こうに引き戻された。

車内の弛緩した空気とは裏腹に、どこか緊張した背中近づいていく。

「足跡は、見える？」

「え、あれ、血の跡じゃないの？車内に居るじゃない、まだ」

「あーあっち！誰か、歩いてる。歩いてるって」

一人が指差すと、車内は一層騒然とした。信じられない、といった風の声があがる。だが少女たちの眼差しの先。

そこには確かに、林からふらふらと歩いてくる一人の影が見えたのだ。

*

同じように反対側に回った下野と哀川は、柿谷の説明を受けた。

「助手席のほうは、ガラスがなにか突き破って出たように見えませんか？それに、ほら」

「……ほんとだ。お茶が二つ入ってますね」

しかし、そうなると遺体はどこへ消えたのか。皆が怪訝な顔をする中で、下野が大声をあげた。

「あ！あそこ、隅田さん！大丈夫ですか！」

林の中で、ふらふらと歩いてくる影が見えたのだ。食堂で働いている、隅田だ。

うつむいているため表情は見えないが、確かにこちらに向かってきていた。

「大丈夫ですか！」「今、そっちに行きます」上坂と下野が駆けよっていった。

「ここから飛び出して、生きているとは……ありえない」柿谷がつぶやく。

「まあまあ。何かクッションになるようなものがあつたのかもしれないよ」立木が少しほっとしたような顔をしながら、車にもたれかかる。「一人だけでも生きていて、本当によかった」

どうも妙だな。違和感をぬぐえない哀川はそう思いながら、もう一度車内に視線を落とす。

すると、遺体の左肩に他とは異なる傷があることに気づく。ガラス片のように、その身を切ったのではない。まるで何か刃物で

えぐり取られたような傷だ。

悲鳴が上がったのは、その時だった。

下野にもたれかかるようにした隅田が、そのまま倒れこんだのだ。だが下野の絶叫は、尋常ではない。

なんだ。何が起こった。隅田の下で、もがき苦しむ下野の体からは、赤いものが噴き出しているのが見えた。血？

いったい、横江は何をしているのだ。いや、その答えは出ている。

噛みついてるんだ。

「上坂先生！」

傍らにいる上坂は、あっけにとられたような顔をしていたが、立木の声に、ようやく事態を把握したらしい。隅田を羽交い絞めにして、体を引きはがそうとする。

思わず一步後ずさる。そのせいで、哀川の眼は予想外のものを再び見る羽目になった。

つい先ほどまでうなだれていた、横江の死体。それがいつのまにか、じつと、立木のほうを向いていたのだ。

背筋が凍る思い。喉から何の声も出ない。立木は気付いていない。

「……あ、は」

横江だ。その時、哀川は彼女の名字を思い出した。

そして横江の遺体だったはずのものは、窓枠にかけられた立木の手を頭を向けて、口を開けた。

離れる。その言葉は哀川の口から発せられる事はなかった。

その代わりのように、哀川の傍らで、立木の絶叫が響いた。

第二話 攻撃的な死と再生（2）（前書き）

登場人物が突然増えてすいません。教師陣についてですが、お気づきの方とは思いますが名前が全員五十音順の a i で母音を統一しています。下記にも特徴を参照しておくので、参考になればと思います。あと全員男です。

哀川 卑屈。観察者。

柿谷 空手。さわやか。

立木 ごつい体育教師。

佐志場 無口。ひよろい。

上坂 新任教師。たよりない

下野 科学教師。やや短気。

第二話 攻撃的な死と再生（2）

信じられない光景を目の当たりにして、やや離れたバスの車内でも悲鳴は拳がっていた。

「嘘！ウソでしょ！」「何なの一体！」

ヒステリックな金切り声が四方から聞こえる中、根元碧はもみ合いねもとみどりになっている二人に向ける視線を逸らさない。

遠目からみてもはつきりと、押し倒され血を吹き出している下野の姿を捉えられていた。

「噛みついてる」

理解不能、の響きを持って誰ともなく唱えられたその言葉は、車内を一層の恐慌に駆り立てた。

上坂が必死に背中からオバさん——隅野という名だと、車内の誰かが言った——を引き剥がそうとする。だが隅野は尋常ではない勢いを以て下野に絡みつき、鮮血を顔に浴びながらも離れない。駆け寄った佐志場の力も借りて、ようやく下野の体が自由になった。しかし隅野は暴れるのをやめない。はがいじめにされたまま必死に体をよじり、口を開けて血をまき散らせる。上坂も佐志場も何か話しかけるようにしていたが、とうとう佐志場が力負けして振りほどかれた。

信じられない。仮にも男二人につかまって、まだあれだけ動けるのか。

惨劇は続く。今度は地べたに尻もちついてた佐志場に向かって隅野は飛びかかっていた。

慌てて後ずさるが、一步遅かった。立ち上がりざまに足首をつかまれ、そのまま佐志場は背中から地べたに打ち付けられていた。その太ももに隅野はまきつきながら、噛みつく。

佐志場が苦悶の声を挙げる。上坂は顔を青ざめさせながら、声を荒げる。他の教師は何をしているのか。その視線を辿れば、大破した

車の横に皆がいた。しかしその内の一人、立木の顔もまた苦痛に歪んでいるを見て、碧は息をのんだ。
彼もまた、噛まれていた。

*

くそつたれ。哀川は今日何度目かという悪態をつきながら、必死になつて頭を働かせている。

これは夢か。だが、それにしてはリアルすぎるし、痛すぎる。

そう思うのも無理からぬことだ。ついさっきまで物言わぬ死体だったはずの横江が、立木の腕に噛みついているのだから。これをどう理解しろというのか。

だが少なくとも、立木が自分の腕をつかんでいる以上は、立木が自由にならないと自分はここから逃げ出すこともできないのは確かだった。だが、腕にかみついている横江はというと、すっぱんのように立木の腕に歯を突き刺したままだ。引き剥がせない。

「えええい！」

とうとう柿谷がしびれを切らして、横江の頭めがけて拳を放った。顔を打ちすぎるが、しかしそれでも離そうとしない。

一体何が彼女をここまで暴力に駆り立てているのか、分からない。

だが、彼女が正気でないのは確かだった。痛みをまるで感じていないかのようにとろんとした目つきのまま、柿谷の拳を受けている。

三度、四度と繰り返し拳をぶつけて、ようやく立木の腕から口が離れた。

「うがあああああ！」

立木が唸り声をあげながら、上腕部を抑える。かまれた場所はシャツが裂け、生々しい傷痕が風にさらされていた。「ちくしょう、くそ！」立木の太い腕でなければ、噛み千切られていたのではと思わせるような深い傷だった。

その傷を作った張本人は、あーあー、と言葉にならない声を挙げながら、必死に此方をつかもうとしてくる。だがシートベルトに固定されているため、車の外にいる自分たちまで届かない。その様子を立木は呻きながら、憎悪を込めて睨みつける。

「柿谷先生！助けてください！」

そこでようやく哀川の耳は、助けを求める声を捉えた。

叫び声の元は、上坂だった。どうやらあっちもまだ襲われているらしい。

「い、今はとにかくここを離れましょう。立木先生は、先にバスで手当てを」

柿谷にそう言われて、哀川と立木は頷く。だが、あっちはどうする。視線でそう問いかけると、柿谷は大きく息を吸った。

「……僕がひきつけますから、その隙に佐志場さんをバスにつれてつてください」

そう言って柿谷は走りだし、肩からぶつかって隅野を弾き飛ばした。組み合わせよりは、あっちの方が早い。哀川は慌てて佐志場に駆け寄る。

「大丈夫ですか？」

「か、肩を貸してください。なんとか、大丈夫です」
足をかまれているが、佐志場の意識ははっきりしていた。

「こ、上坂先生達も、急いでバスに！」

上坂にそう声をかけると、あちらも慌てて下野に肩を貸して、立ち上がらせる。下野はひゅーひゅーと、死の気配を感じさせる声を挙げている。相当まずいかもしれない。

哀川もまた佐志場に肩を貸して、バスに向かって急いで歩きだした。くそ、重い。

「急ぎましょう」

柿谷が反対側からも肩を貸してくれた。背後を見ると、押し倒され

たらしい隅野が立ち上がりうとしているところだった。だが、この距離なら何とか逃げ切れる。そうしてほうほうのていで、三人はようやくバスに乗り込んだ。錯乱したばあさんどもとは、十分な距離があった。もう一つのバスに、二人の教師が乗り込んだのを見ながら、哀川は心の中で呟く。とにかく、もうこれで安全だ。安全なはずだ。痛みに呻く立木と佐志場を横目に、哀川はひそかにため息をついたのだった。

*

「早く、早く出して！」

おびただしい血液を流しながら、下野が上坂に抱えられて乗り込んできた。

座席二つ分を使って寝かせるようにしながら、上坂は必死に叫び声を上げる。

「いったい、何があったの!？」

「俺が知るわけないでしょう!向こうに聞いてください!」

早瀬の問いに、悲鳴のように上坂は答えた。林の方からは、上坂と下野を追いかけるように隅野はこちらに歩いてくる。死んだような無表情を張り付けたまま。

事故車の窓からは、もう一人も、這い出てきていた。

「くそ、血が止まらない……病院、早く救急車を」

備え付けてあった毛布で傷口を押さえつけ、上坂は下野の血を必死に止めようとする。瞬く間に毛布は真っ赤に染まっていく。

「は、早く出さないと!あいつらがくる!」上坂は叫び声をあげる。前の車が真っ直ぐ走り出した。

運転手も慌ててバスを走らせ始めた。

しかし、上坂はまた声を挙げる。

「まで！学園へいっても、この傷は深すぎる！ちゃんとした設備がないと」

「これだけの傷じゃあ、病院へ行っても間に合いません。早く、学園へ！」早瀬が反論する。彼女の修道服も真っ赤に染まっていた。

「下野先生を見捨てるんですか！」

「血が、血が止まらない！」

先ほどの明るい喧噪が嘘のように、車内は混乱で満たされていた。

早瀬と上坂が叫び声を上げるなかで、皆も動揺している。

そんな収拾のつかない空気を、一人の声が切り裂いた。

「先生！聞いてください！」

車の後方からの声。学生の一人から発せられた声によってだ。

「落ち着いてください。事情はわかりませんが、ここが危険なのは確かです。はやく、移動しましょう」

ややウェーブがかかった髪に、堀の深い顔立ち。彼女は、確か。

「しかし、どちらに」

助けを求めるような声で上坂は、そう問いかける。

「今のところ下野先生が一番重症に見えます。私たちは急いできた道を引き返して、病院へ向かいましょう！」

「しかし、それでも間に合うかどうかは」

「ですから、前のバスには学園に言って救急車を呼んでもらうんです。道すがらで救急車に出会えれば、助かる確率が上がるはずですよ。上坂と早瀬は一瞬彼女を驚いたような顔で見つめたが、直ぐに運転手の方へ向き直る。

二人とも、認めていた。それは確かに最悪に思える現状においての、最前に思える一手だと。

「運転手さん、前のバスに伝えてください」

「前にも、怪我人がいましたが……」

「こっちは死にかけてるんです。早く！」

実際そうだろう。血を流していたのは佐志場と立木だったが、二人

とも自力で歩いていた。

喉元から出血している下野はおそらく瀕死の重体だろう。

「わかりました！向こうも、従ってくれるみたいです。急ぎますよ」それからバスは再び唸り声をあげて、動き出す。大きくUターンして、これまで来た道を。

「また来てるわ！」悲鳴が再び上がる。碧が再びバスの外を見たときには、すでにその異形がはつきりと見て取れる近さにまで来ていた。体は傾き、全身から血を流している。身体を傾けたまま此方に歩き、

血みどろの顔で歩いてくるその姿を見て、根元は改めて口元を修めた。

幸いにも隅野ともう一人は、通り過ぎていくバスに追いつがる様な事はせずに、ただただ意思の見えない瞳で此方を見つめるだけだった。

ここにきてようやく、錯乱し襲い来る二人から逃げ出すことに成功したのだった。

「助かった……」

上坂が地面にへたり込みながら、そうつぶやく。皆が同じ思いだった。

車内に、弛緩した空気が流れる。

だが揺れるバスの車内の中を、先ほど声を挙げた少女が颯爽と歩いていく。

「みんな。もう大丈夫。落ち着いたら、するべきことを考えて頂戴。

——誰か、救急箱を持っている人は？」

腕まくりしながら、少女は声を張り上げる。その姿を見て、声を聞いて、少女たちは背筋が伸びる想いをしていた。少なくとも碧には、そう見えた。

彼女は、赤塚英子。鳳凜の生徒会長だった。

*

杉村明里にとつては、その日は少しかり浮き足立っている自分を自覚していた。

校内は学生がいないため、閑散としている。風は相変わらず冷たく、天気も鈍色だ。

だが彼女は鼻歌交じりに花壇まで歩いていった。

「いた。松浪さん。おはよう」

「ああ、杉ちゃん。お散歩？」

花壇には果たしていつものように、松浪曜子が座っていた。

「ええと、まあね」本当な彼女と話したいことがあったからだが、思わず明里はそう答えていた。

「あ、何か私に用事？食堂まで行く？」

「食堂はね、今はちょっと……」

そう言つて苦笑する明里に、松浪は怪訝な顔を見せる。

「ああ、ええと、それよりも転校生のことは、もう知ってるわよね」

「あ、うん。杉ちゃんが昨日案内してあげてた子でしょ。知ってる」やはり狭い世界の話だ。変わった出来事があれば、すぐに学園中に伝わっている。それが面白くもあり、息苦しくもある。

杉村は自分が昨日から感じた橘夕についての印象を踏まえたとうえで、何かあつたら力になつてあげてほしい旨を松浪に伝えた。

「ふふ、わかつたよ・ほんと、世話やきだよね杉ちゃんは」

「あら、ほとんど荒れ果てた花壇を、わざわざ一人で面倒を見てあげている人に言われたくはないわよ」

お互いにそう言つて笑いあふ。

同じクラスで模範的な優等生同士、二人はウマがあつた。

しかしその親密さには幾ばくか、秘密という要素が含まれているのは、当人だけが知っている秘密だ。

「そういえばさ、杉ちゃんどうするの。柿谷先生とは」

突然その秘密について切り出されて、杉村の胸はドキリとした。

「どうって……そりゃ、まあ、仲良くはするけれど」髪をいじりながら、そんな答えを絞り出す。

「ふうん……でも、本当にそれだけ？」

「……意地悪は言わないでよ」

顔を背けながらそうした態度に松波は破顔する。

普段おっとりしている彼女だが、困ったことにこと恋愛の話になると俄然鼻息を荒くしてくる。最初に彼女が柿谷に向ける熱い視線に気づいたのも、彼女だった。そのおかげで、明里は内心を打ち明ける相手ができたのだから、文句は言えないが。

「ていうか、告白とか……そういうのは、まだ全然考えてないから」

「ええ、駄目だよ」。柿谷先生人気あるんだし、他の人も」

「でも、迷惑になったら……」

もじもじしながら、明里は呟く。

「いいじゃない。学園生活を、このまま何もなく済ませるの？」

「……釣り合わないって、やっぱりさ」

「ふふ、私はいいと思うけどなあ」

何か自愛の目で明里を見つめてきていた。

「杉ちゃんてさ。しっかりしているようだけど、頑張りすぎちゃうところあるじゃない。だから、ああいう風に包容力のある男の人の方が、杉ちゃんには合っていると思うよ」

「そ、そうかな」

彼女の言うとおりだった。実際柿谷のしっかりしているところに惹かれていたのだと、自覚はあった。しかしだからと言って、恋仲になるとかそういったことになる、やはりついつい躊躇ってしまうのも確かだった。

「あー、もう、やっぱり、松浪さんには敵わないわね」

明里が逃げ出したのを、松浪は笑いながら見送る。

「気が変わったら、教えてねー。約束だよー」

笑いながら耳を押さえて、その場を後にする。

何とも煮え切らない態度の明里を、曜子はなんだかんだ言っつけしかけようとする。そのおかげでクリスマスにはちよつといい思いもしたのだがしかし、なかなか「生徒と教師」からは踏み出すことができない。

正直なことを言えば、松浪の元にもそのことを相談しようと思ったのだが、いざとなると羞恥心が勝って何も言えなかった。こればかりは、彼女を信用していないわけではなく、自分自身の中でどうにもならない問題だった。

「あーあ、ホントに……」

嫌になる、とまでは明里は言わなかった。恥ずかしいし胸が苦しいのは本当だが、しかしうれしいのも本当だからだった。胸の高鳴りを改めて意識した明里の足は、自然と校門の方へ向いた。

時刻をみると、もう十一時を回っている。本当ならば、すでに来ているはずだが、何かトラブルがあったのだろうか。

と、そこで門の向こうから此方にバスが向かって来ているのが見えた。

柿谷は乗っているだろうか。思わず、顔がほころびそうになる。しかし、明里は違和感を覚えた。

早すぎるのではないか。バスは一向に止まる気配を見せない。しかも一台だけだ。

轟音ともとれる音を立てながら、バスは校門へ向かってくる。

普段はおつとりと立ち上がり、守衛も門を開く守衛も、その勢いを見て顔色が変わっている。

「離れろ！」

建物内にいた守衛の一人が叫んでいた。あわてて左右の守衛が飛び

のいた門に、バスは容赦なくつつこんできた。
そうして鉄製の門と、衝突する。

バスが開きかけた門を押しのかけるようにして、学園内へと突入してきた。

門がひしゃげ、車内からも悲鳴が聞こえた。

バスが衝撃をこらえるように蛇行して走っていく。

バスに何があった、いや、何が起きている。

ただならぬ気配を感じながら、杉村はバスを追って広場へと急いだ。

*

ああああ。もはや形を成さない叫びが哀川の内心でうごめく中で、手足を振り回しているして立木の体を、哀川は必死に押さえつけていた。

どうしてこうなった。つい先ほどまでぴんぴんして、さんざん隅野達への悪罵を衝いていたかと思えば、突然立木は黙り込んだ。そうしてそのまま突然吐血し、バスの座席で暴れ出したのだ。

青筋を立てながら体を振り回し、そのまま運転席にまで突然つつこんでいった。

錯乱しているような状態の立木に、車内の全員の顔が青ざめていた。
「早く、中に入れてください！早く！」

柿谷の指示の通りに、バスは門を跳ね飛ばして、保健室に出来る限り近づいた、中央広場で止められた。

無茶な運転だった。しかし、今は一刻も早く立木をこのバスから降ろさなければならぬ。

哀川と柿谷は二人で慌てて立木の両肩をつかんで、タラップを降りた。騒ぎを聞きつけた人間たちが、バスの周囲に集まりだしていた。
「どうしたんですか、その傷は！」

理事長もやってきていた。だが、今は婆さんの相手をしている場合

じゃない。

「先生！万美先生！」

白衣をひるがえしながら、保険医も駆け付けてくれていた。

「怪我をしているんです、立木先生が、早く！」

すでに、先ほどのように暴れまわる気配はない。立木の紺色のスーツは、真っ赤に染まっている。青ざめた顔でだらりと口を半開きにしたまま、ふらふらと歩いている。

それをみて万美もキツと口を結んだ。

「一体、何があつたの！？」

「わ、わかりません！突然、山中で人がかみついてきて……」

「人が、何？何があつたの？」

柿谷はパニックになりながらも、万美に事情を説明しようとする

「わかりません！その、食堂のおばさんたちが、急におそってきて、噛まれたら、こんな風に」

「噛まれたら？この腕の傷は、人間に噛まれたせいだって？」

柿谷の動揺したらしく、万美は顔を見ていく。

「とにかく、病院と警察に連絡を……早く、急いで！」

理事長が指示を飛ばすと、何人かが職員室へと走って行った。

「傷は……ここだけ？ここだけなの？」

「はい。それだけです」

困惑する万美。やはりこれは普通ではない事態なのだ。おびえたような表情の哀川が言葉を探しているうちに、立木は突然がくりと倒れこみそうになる。

暴れなくなつて、力を抜いていた柿谷と哀川は、立木が地面に無造作に倒れ込むのを止められなかった。

息をのむような音とともに連れ添っていた学生たちは後ずさる。

「立木先生？先生！」

声をかけながら、哀川が痙攣するその体に触れる。

だがそれすらも勢いをなくし、とうとう立木は完全に動きを止めた。

皆が息をのむ中で、万美が駆け寄り脈を見た。

「死んでる……」

哑然とした表情で首を巡らせる。まるでどれかひとつにその答えが書いてあるように。しかし周囲の人間たちの顔に浮かんでいたのは恐怖だけだ。理解不能の出来事に対する、恐怖。それは自分が浮かべているものとそのまま同じものだった。

「死んだって……でも、さっきまで」

信じられない。殴り合ったわけでも、頭をぶつけたわけでもない。

腕をかまれたただけだ。頭のおかしい年寄りどもに。

それがいったいどうすれば、死ぬことにつながるというのか。

呻く教師人を前に、保険医は首を振った。

「脈がもうないのよ……とにかく、一旦保健室まで佐志場先生を連れて行きましょう。それから、ほかに怪我をしている人は？その血は？」努めて冷静な面持ちで、指示を出していく。

その場にいた生徒に声をかけて、動揺を治めていく。

「とにかく、落ち着いて。大丈夫だから。私たちは……」

そこから彼女がどんな力強い言葉を言っただけを冷静にさせて、安心させてくれようとしたのか、誰も知らない。

周りの人間がみたのは、ただ次の瞬間脈がないはずの人間の腕が伸びて、彼女ののど首をつかんだ光景だった。

*

杉村がバスを追って広場に近づいた時、悲鳴が聞こえてきた。

「なにがあったの!？」

「わからない、いきなり、暴れ出して……死んだはずなのに！」

半狂乱になった状態で少女が言い放ち、そのまま杉村の腕を振り切つて逃げに行った。

「みんな、建物のなかに！早く、扉を閉めなさい、早く！」

警備員さんがうろたえている少女たちをせき立てる。その熱気に押されて、少女たちは悲鳴を上げながら近くの建物へと入ろうとする。

守衛がようやく追いついてきた。

暴れる男を取り押さえる。そうした訓練を受けてきた警備員たちだが、警備員も戸惑いを隠せない。相手は見知らぬ侵入者ではない。見知った相手だからだ。

そうした戸惑いを衝くようにして、立木だったものは警備員に飛びかかった。

「副会長も！早く！」

誰かに掴まれる様にして、杉村は西校舎へとかけて行った。

*

松波曜子は、轟音を聞いた。

校門の方だ。何の音だろう。杉村が向かっていったことに、何かいやな予感を感じた曜子は、土を払いながら、校門が見える広場の方へ歩いていった。

そうして彼女は見た。惨劇が起こるのを。

悲鳴と怒号の中で、曜子は動けなかった。なにが起こってたのか？

突然、立木先生が万美先生に襲いかかったのが発端だった。そして首筋が噛み千切られるまでは、あつと言う間だった。万美は首筋からおびただしい血液を噴水のように飛び散らせながら、何かを言う

ように口をパクパクとさせたあと、首筋を押えながら地面に倒れ込んだ。

それをさしたる感動もなさそうに、立木は見つめていた。くちやり。くちやりと。音を立てながら、その顎が上下していた。それは何かを言おうとしたわけではない。

食っている。

誰かがそつつぶやいた。事態に頭が追いついた誰かが、そこでようやく悲鳴を上げた。

上げられて悲鳴は、女生徒達の声によって一瞬でかき消された。それからのはうるさい奴だとはかりにおっくうそうに体の向きを変えた。

その視線の先には、少女が一人。つい先ほどまで立木に付き添っていた女生徒だった。

彼女は逃げようとしたが、背中を向けた途端にのしかかられて動けなくなった。彼女は水の中をもがくようにして両手をかき乱したが、やがて首筋から噴き出る血がその勢いをなくしたところに、動かなくなった。

広場のブロックに赤い染みが広がっていく。

さらなる悲鳴が広場から上がり、皆が一斉に逃げ出していく。バスの中からも、窓から転がり落ちるように女生徒が逃げ出して行く。

逃げまどうどの顔にも、恐怖と混乱が浮かんでいた。

「建物の中へ！急いで！」

誰かが上げた声を聞いた。

そうだ、私もここから逃げ出さないと。

けれども曜子の足は、まるで張り付いたように、そこから動こうとはしなかった。

そして曜子の心もまた、まるで考えることを拒否しているかのようにそれを眺めていた。

そうして私はここに居る。血だらけで真っ赤に染まった、この広場に。

「大丈夫か！君、おい！」

守衛が駆けつけてきた。三人は驚きを露わにして、そしてまもなく恐怖を覚えたらしい。

壮年の男はどこか怯えた様な目つきをしながら、茫然と立ちつくす曜子の肩をつかんでいた。

「君、早く！避難して、避難！」

男の声が、どこか遠くに聞こえる。彼は必死に自分を動かそうと、背中から押しのけた。

「チーフ！来てください！」

「ええい、くそ！」

壮年の男は苦々しげな表情で、呼ばれた方へとかけて行った。おそらく、そちらをかたずけられると踏んだのだろう。

「なんてこった」

誰かがそうつぶやいていた。

いつの間にか、遺体はもう一つ増えていた。守衛の一人だろう。

立木にのしかかられている。

そしてその顔が、頬の肉が、噛み千切られているのを曜子は見た。

「先生、先生！落ち着いて、落ち着いて下さい！」

守衛たちは立木を囲みながら、必死に声をかける。

だが、立木は何も答えようとはしない。

後ろに廻れ！といって中年男に怒鳴り、じりじりと警棒を片手ににじり寄る。

「どうすんですか。どうすりゃいいんですか！」角刈りと中年の守衛が声を荒げる。

「とにかく、動きだ。動きを封じるんだ！」

だめ、噛みつかれる。言葉はのどの奥で何かにつつかえたように出てこなかった。

中年の守衛はそのまま駆け寄り、そのまま一瞬の隙を見て背後から羽交い締めにする。だめだ！

果たして予想を裏切ることなく、守衛は首に掛けた腕の肉を噛み千切られていた。

耳をつんざく悲鳴。

曜子は、男性がこんな声を上げるのを、初めてきいた。喉の奥を絞り過ぎて、つぶれてしまったような声。

角刈り男が悪態をつきながら、中年から立木を必死に引きはがそうとする。

だが、立木は信じられない膂力で、二人同時に振り払う。そうして倒れ込んだ角刈りの前に来ると、多い被さった。

「おい！しつかりしろ、二人とも！」

壮年の警備員も、立ち上がろうとした。

だが、それは足首をつかまれて阻止された。もう一人。バスからいつの間にか這い出ていた佐志場が、口を開けて守衛にかぶりついて、彼は再び倒れ込む羽目になった。

再び、悲鳴が上がる。苦痛に悶え、恐怖におびえる声が。

曜子はその光景を、まるで別世界の出来事のように茫然と見ていた。脳が眼の前の出来事を理解するのを拒否していたのだ。

曜子はただ、見ていた。

彼らが此方ににじり寄ってくるのを。

ただ、見ていた。

第二話 攻撃的な死と再生（2）（後書き）

大分混乱してきましたが、次の話で事態の捕捉や状況をまとめますので、しばしご辛抱を。

第二話 攻撃的な死と再生（3）

広場での混乱から逃げ出した生徒たちは、そこから手近な建物に逃げ込んだ。

結果として彼らは、東校舎、西校舎、それから教務棟。およそ三つの建物に別れることとなった。

学園は元々平らな土地に建てられたのではない。それぞれの建物が高低差も含めて、やや離れて建てられた。校舎間の移動は一苦労だ。渡り廊下こそ作られているが、雨の日などは押し合いへしあい不快な思いをする生徒の跡がたたない。

それくらいこの学園というのは不便で融通が利かないということであり――

つまり現状は、建物ごとに人々が分断しているのだ。

そこまで考えて、その中の一つ――東校舎に逃げ込んだ哀川勇太郎は、大きく息を吸い込んだ。

一体、どうしたものか。何が起こっている。どうすりゃいいんだ。幾つもの問いが雨の日のように心の水面を揺らし、消えていく。

だがそこから何かを考えようとすると、頭の中で何かもやがかかっているように、つかみどころがなくなつて、答えに至るまでに消えてしまう。

自分は何かを忘れているんじゃないか。

そんな気がしながらも、それが何なのかわからない。自分の爪を噛みながら、必死に思考を巡らす。

「うるさい！ 静かにしろ！」

哀川は玄関口で騒ぎたてる少女たちにそう怒鳴り、思考を落ち着けようとする。

そうして静まり返る建物の中で、少女たちが自分に向ける視線にようやく気付いた。

そうだ。俺は、今この生徒たちの面倒を見なければいけないのだ。よりにもよって、まともな大人が俺一人しかないのだから。

混乱が起きた時、哀川は出来るだけ人がいる方へと逃げ出していた。しかし考えなしに陥った人間たちのすること。現場から一番近いというだけで皆が此処へ駆け込んでいた。

思わず哀川は玄関口の向こうを見やる。一応防火壁は閉めてあるから玄関から侵入されることはないだろう。

柿谷は、教務棟の方へ警察の連絡のために走って行ってしまった。た。

そうして此処に居るのは、自分を除けば恐怖におびえているだけの子供ばかりだ。

皆息も荒く、眼には涙が浮かんでいる。嗚咽のような声もすでに聞こえている。

くそ、どうすべきなんだ。こういう時は。

教職者として自覚の欠けた大人。それが哀川勇太郎だった。

*

そんな哀川の内心の混乱などに構わず誰ともなく呟く。

「なんだったの、一体」

それは全員が思っている言葉で、誰も答えられない言葉だった。

「あれ、先生だったよね。先生が、襲ってきたんだよね」

「嘘、でも普通じゃなかった。あんなの……」

再び喧騒が戻ってくる。皆取り乱し、混乱している。泣きたいのはこっちだよ、ちくしょう。

警備の連中は、一体何をしているのか。混乱している脳味噌をかきむしりたい欲求に駆られながら、哀川は必死に深呼吸する。

だが哀川はそこで、誰も守衛たちに状況を伝えていないのではないのか、という可能性に思い至った。錯乱し、襲いかかってくるあの状態の人間が、噛みついてくるということ。

そうだ、あの時みんな逃げ出した。それから、入れ違いになってやってきたんじゃないか、彼らは。

では、彼らはどうしたのか？立木を殴り倒し、拘束することが出来たのか？ただことではないあの状態で、あれだけの狂ったような相手を、殆ど昼寝しているだけのあの役立たずの中年どもに、取り押さえることが出来たのか。

いや、それよりもたかだか一人が暴れていただけなのに、なぜ誰も「もう安全だ」と呼びに来ないのか。

混乱する思考の中で、哀川は最悪の事態の想像が、自分の中で膨らんでくるのを感じた。

「と、とにかくお前たちはここにいるんだ。決して、玄関口を開けるなよ！いいな！」

そう言いつけられ呆気にとられている生徒を置いて、哀川は急いで廊下をけて行く。

そうして北側にあるそして渡り廊下に出た。あたりに人の気配はない。自分の足が震えているのを感じながら、哀川はそこから広場の様子が見える位置まで歩く。

廊下も中腹に至った場所。そこから見えた光景は果たして、想像を超えていた惨状を呈していた。

広場には果たして、血まみれの人体が幾つも重なり合っていた。だがそれはどちらも死んでいるというわけではない。

人が、人を食っている。腕の肉にかぶりつく立木。血液をだらしな

がら、だくだくと血液を吐き出す警備員。のしかかれてうなじを
噛み破られながら、痙攣する男。

そんな地獄絵図でしか見たことのない凄惨な光景だった。

鬼。地獄にしかない鬼の姿を、哀川の眼は確かに捉えていた。

そしてその鬼が、此方に顔を向けた。

「——!!!」

声にならない声を吐き出しながら、彼は教務棟へ向かった。

まずは、安全を確保すべきだ。——自分自身の。

*

渡り廊下から出て、そのまま走り去って行った哀川を、茫然と杉村
らあかり明里は見ていた。

置いて行かれた。その事実を、一体何名の人間が自覚していたのか
はわからない。だが少なくとも、明里は哀川が殆ど何の指示も出さ
ず、この場を修めることもせずに逃げ出したことは、そういうこと
だとみていた。

卑怯な男。どなり散らしたい欲求が湧きあがりながらも、生来の生
真面目さがそれを許さなかった。そんなことをしている場合ではな
いのだ、と。

「ドアを、ドアを閉めなさい！」

思わずそう近くに居た子に命令する。少女も慌てて指示に従い、ド
アを施錠する。この寒さだ、窓は一応全部閉めてある。

周りを見れば、バスから降りてきた一年生が殆どだ。そのいずれも
が体を縮こまらせて、その眼に恐怖を浮かべている。誰もが助けを
求めるように、周りの人間と身を寄せ合っている。

杉村は息を大きく吸って、声を張り上げた。

「みんな落ち着いて！一旦、状況を整理しましょう。バスに乗っていた人は、何があったのかをはなしてちょうだい。いいわね！」

そうして何人かが訥々と話しだし、ようやく杉村以下学園にもともといた生徒たちも、その経緯を把握したのだった。

「その……おかしくなった食堂のおばさんたちに襲われて、立木先生、も？」

はい、と佐藤と名乗った生徒は頷いた。

「おかしいんです。その、腕をかまれたたっていつても、血は止まっていたし、最初は大丈夫そうだったんです。なのに、段々すごく苦しそうになって……」

突然吐血しだして、もがきだしたのだという。それを必死に押さえようとした他の教師達を振り回すようにして、錯乱したのだという。バスが蛇行し、門を押し退けて学内に入ってきたのもその時の騒動が原因だったらしい。

「それで、学園についたら脈拍が止まった？」

はい、と自信なさげに答える少女を見た後に、明里は他の面々の顔を見渡す。

皆同じようにどこか不安げではあるが、小さく頷きを返していた。

「信じられないかもしれませんが、その、万美先生が言っていた、ホントに……」

「……なるほど」

大勢の人間が同時に見間違え、勘違いするというのは考えられない。ましてや万美は保険医だ。誤診で人が死んだなどというわけがない。万美。死んだ、と彼女たちが言っているが、まだ明里には現実感がなかった。人が倒れたり血を出しているのこそ見えたものの、彼女の位置からは丁度斜めの車体が壁になっていて、あまりその惨状は見えなかった。

だがそのおかげで、まだ比較的自分は冷静なのかもしれない。そんな風に考えを巡らせながらも、明里の頭はまだ答えを導き出せ

ずにいた。

即ち、現状は一体何なのか、という問いに対しての答えだ。

「あの！」

何人か廊下の隅で固まっていた少女たちが、ひそひそ話を止めて手を挙げた。皆の注意が集まり、少女は居心地が悪そうに声のトーンを下げて話した。

「あの……あれって、ニュースでやってた——」

それは、明瞭に意識の中で結び付く、現状を説明する言葉の一つだった。

「突然、人が、人を襲うようになる、例の病気……じゃないかって」

*

「あれが、例の病気だっていうの!？」

理事長は髪をかきむしりながら、柿谷にそう詰め寄っていた。

女のヒステリーは手に負えない。年をとればとるほどに。哀川はそんな新しい事実を胸に刻みながら、必死に心臓の鼓動を落ち着けていた。

渡り廊下を全力疾走で走り、教務棟へと駆けこんだ哀川は、事態の説明を求める教職員達に囲まれながら、職員室の扉を開けた。

しかし心休まる暇はなかった。中では先ほどまで生徒たちが上げていた悲鳴と同じトーンで理事長が柿谷相手にわめきちらしていた。

「そうとしか説明できないんじゃないでしょうか」

職員室に集まった教師たちは騒然としている。柿谷と哀川以外の教師にしてみれば、まさに突然の出来事なのだから当然だろう。

そうだ。感染病。突発性の、錯乱を引き起こすという例のあれ。

なぜそれに思い至らなかったのか。哀川は神経質そうに頭をかきながら、そう思った。

「哀川先生。ご無事でしたか」教頭が隙を見て、そう言った。注目

が自分に集まる。

「ちょうどよかったわ。あなたも、立木先生の錯乱を見たんでしょう。」

「か、彼の言うとおりだと思います。私も、今、そう思いました。あれは、その……普通じゃない」

「しかし、感染は完全に封じ込めたと政府が」

出たよ、「テレビが新聞が」間抜けめ。目の前で何が起きているのか、見えなかったのかよ。

「人間があんな風に人を襲うなんて、それ以外に考えられませんよ」

「どちらにせよ、彼らには話を通じるような知性はないみたいですしね」なんでも警備員が声をかけていたことを、教頭が小声で解説してくれた。

「ほかに何か情報は？」

「腕力が普通じゃありませんよ。さつきも見たでしょう。警備の人が二人が仮でも取り押さえられなかった。あの病気は……感染者は、危険です」

「どうすべき、だと？」柿谷のその声音から何かを感じ取ったらしい理事長が、問い直す。

「我々全員で、打って出るべきではないでしょうか」

職員室に居る人間が息をのんだ。つまり、感染者に対して武力行使で何とかしようということだ。

だが実際、警察が来るまで、一時間はかかるのだ。それまで全員で隠れるというのは、果たして可能だろうか。

「そんな……自分たちで……」教頭は絶句している。他の教師もだ。「相手は人を殺しているんです。自分たちの身を守るために、これは正常な権利ですよ」

柿谷は理事長に詰め寄る。あれだけ異常な事態を目の当たりにしてきたのだ。当然といえば当然だ。

「理事長……！」

だが、正しいことが常に為されるとは限らない。

「彼らは、その、例の病気の、患者なのよね」

理事長が、誰ともなく呟く。

「でも、それなら……彼らは、その、病人、だということですね」

ああ。そうだ。自分たちは、こういう風にしかできない

哀川は俯いて泥で汚れた自分のつま先を見つめていた。

*

「感染病って……感染病って、何よ」

「いえ、なにかよくわからないけど、なにかそういうのがひっそりはやってるとかで……やばい、みたいなの」

「まさか。ありえない。あんなやばい病気が有るんなら、ぜったいもうニュースになってるはずでしょ。あんなの、テレビとか新聞でも聞いたことないわよ」

「本当に、どうにもならないから、伏せられていたんじゃない？」
感染病。そのキーワードをもとに、にわか話声が上がり始めた。

少女たちの間でもその意見は物議をかもしたが、それに対してはつきりと肯定できる人間も否定できる人間もいなかった。

「とにかく、落ち着きましょう。答えを教えてくれる人がいない問題は、今は置いておいて。必要なのは、今どうすべきか、ということだけじゃないですか」

実際、杉村の記憶の限りでも、去年の暮れぐらいから何度か感染病の話はテレビで出ていた。

だが最近は何も聞かなかったりしたはずだと思う。杉村が学園にくる前に見たテレビでは芸能人の不倫だとかお泊りデート、それからDV事件や火事のニュースなどしか記憶にない。

「でも、もしも感染が本当だったら……」

最悪、の声音を以て巡らされようとした帰結は、悲鳴にかき消された。

ガラスが割れる鈍い音。続いて、それに驚いた声が上がる。

いや、違う。廊下のガラスのうちの一つが割られて、中に何かが入り込んでいた。

再び悲鳴が上がり、少女たちが右往左往する。体をぶつけられるその中で、明里はその正体をしっかりと見た。

立木だ。いや、あるいは立木だったものだ。

右腕からの傷以外には、外傷らしい外傷は見あたらない。いや、左ひじから先が、力なく揺れている。折れているのかもしれない。あとは胸元に吐来だしたらしい血痕の後が見える。

そうして何よりも特徴的な、生き物としての気配を感じさせない眼。それがはつきりと玄関にたむろっている女生徒たちを向いていた。

突如校舎の中に侵入してきたその感染者を前にして、生徒たちは浮足立っていた。

誰だよ、校舎の中に居れば安全だなんて思ったやつは。錯乱している当人から眼を放したまま、周囲に警戒もしようとしなかった奴は。「上よ！上！二階に上がって、防火壁を閉じるのよ！」

明里があげた声に従って、人の流れが階段の方へ向かいだす。自分もその流れに乗ろうとしたが、明里は足を止めてしまった。廊下を此方へ向かってくる立木の前に、少女が一人はいつくばっているのが見えたからだ。

「手を貸してあげて！」

杉村の声とは裏腹に、皆目を逸らして階段の方へ向かっていた。くそ。杉村は駆け寄る。

「早く！あなたも、急いで！がんばって！」

ふるえる女性との肩をつかみながら、必死に立ち上がらせようとする。

だめだ、重い。目に涙を浮かべた少女はひしりとこちらの腕をつかんで、離さない。

急がないと。視線を後ろにやる。

よるよると普段の半歩程度の歩幅で、ゆっくりと歩いてきた立木だが、その速度が上がってきた。のろのろと歩く二人に、狙いを定めたかのように。

その血まみれの顔を見てへたり込みそうになる足を必死に動かしながら、明里は必死に階段を目指す。

すでに一階には自分たちだけだ。少女の爪が痛いくらいに腕に突き刺さるのを感じながら、明里は声を挙げる。

「誰か！誰……」

杉村が仰ぎ見た階段の踊り場の直ぐ眼の前に、巨大な影が飛んだ。

浜形路子。階段を飛び降りて来た彼女は、小柄な少女を軽々と抱え上げた。

浜形は杉村をみてコクリと頷き、お姫様だっこしたまま階段を駆け上がった。

そうして二人は二階へと逃げ込み、閉じられていた防火壁の向こうへたどり着くことができた。

「閉めますよ！」

鉄製のドアが閉じられ、階段が完全に見えなくなった。

静まり返った廊下で、皆が耳を澄ます。階段を上る足音に誰もが息を殺していた。

高まる緊張感。上ってくるのか。いや、鉄の壁を破ることはさすがにできないだろう。だが、いや、どうなるのか。

「こちら鳳凜学園理事長です。非常放送をお伝えします。皆さん、落ち着いて聞いてください」

しかしその時、不意に教室に備えられているスピーカーから声が流れ出した。

*

「現在、学校にて非常事態が起きました。現在、錯乱した立木先生ほか、学内を徘徊しています。学生のみなさんは建物の中に入り、決して外には出ないように！繰り返しします」

理事長ほか職員のほとんどは、したり顔で頷いている。

「とにかく、みなさん落ち着いて。決して今いる安全な場所を動かないでください。彼らは錯乱しているだけです。消して手を出さないでください！決して、手を出さないように」

錯乱。ただそれだけで片づけられれば、どんなにいいか。

だがそれ以前に、血まみれの職員二人を見ている身の上としては、それが希望的観測でしかないことは容易にわかることだった。あれは、そんなもので片づけられるような状態ではない。

「まずいですよね」

柿谷が呟いた。だが、哀川はその顔をまともに見れなかった。

彼に同意することで陥る状況、責任、行動に何一つとして賛同する勇気がなかったからだ。

その様子にしぶれを切らしたのか、柿谷は放送を終えた理事長に、再び詰め寄った。

「このまま本当に待っているだけでいいんですか？せめて生徒たちだけでも、」

「いけません。もしも錯乱している先生方を傷つけたら、どうするんですか」

「理事長！しかし、すでにここから見える限りでも六人はやられて

るんですよ」

「だめよ！決して、だめ。彼らは、病気なのよ」

「病気ですって！理事長も、みたでしょう。首を半分なくしたまま……。そんな相手なんですよ！」

教師の必死の訴えに、しかし頑として理事長は首を縦には振らない。「どっちにせよ、彼らに對し手出しは許しません。病院と警察には、先ほど連絡しました。大丈夫です。このまま、待ちましょう」

「しかし……このままじゃあ、生徒たちも危険かもしれません」

「え、ええ。そうです。東校舎の方では、まだまだ大勢の生徒が助けを待って……」

「なんですって？　そういえば、貴方さっき東校舎にいたって言うていましたね」

「まずい。哀川はしどろもどろになりながら取り繕うとしたが、どだい無理な話だった。」

「……東校舎の方へ、行ってきます」

柿谷がそう言うて立ち上がるとする。ぎろりと此方を睨みつけながら。くそ、なんで俺ばかりこんな目に。

「それは、まずいかもしれません……」

しかし、職員室から出ようとしたところで、廊下の窓の外から広場を見ていた一人——菜丹丘がそう呟いた。

「……どういう意味です」柿谷が立ち止まり尋ねた。

「……建物から、出ない方がいいってことですよ」

教員たちは窓に駆け寄り、その言葉の意味を知った。

*

放送を聴いた東校舎の二階にいる生徒達は、ため息を漏らした。放送では少なくとも、具体的な解決策が何一つとして提示されていないのに気づいていたからだ。

決して手を出さずに、穴熊を決め込め。

それはつまり、自分たちは何もしないということを暗に示していることに他ならない。

だが、現状建物の中も完全に安全とは言えない。それを思い出した明里は、真っ先にもうひとつある階段を塞がないといけないことを思い出した。

「それなら、もうしめてきました。三階の階段と、奥の方の一階の階段の防火壁が閉まっているんで、入りこまれることはないと思います」

橘たちばな夕ゆづだった。彼女も、東校舎にいたらしい。

彼女は杉村が指示を飛ばす前に、すでに二つある階段の防火壁をそれぞれ閉じてくれたのだという。

「一階まで下りたの？ そんな、危険なこと……」

「開けたままにする方が危険です」

そう言い返されて、それ以上の答えを思いつかなかった杉村は言葉を失った。

「明里！」

廊下の奥から、聞きなれた声が飛んできた。

「聡子。どうしたの？」 鳴海聡子。なるみさとし理科室にいたわけか。

「……ちょっと来てほしいのさ。あー、みんなは二階に残って、奴らが来ないか見張ってて」

そう言って、まだ使える方の三階への階段へ向かう。明里は自分以外に何人かをひきつれて、三階に上った。その中に橘もいたのだが、彼女は三階へ上ると理科室とは反対の方向へ行こうとした。

「どこに行くつもり？」

「家庭科室に」

一体何を、という問いかけを察して橘は答えた。

「料理でもしてきます」

橘はそう言って走って行ってしまった。明里はぼかんとしたまま、

「廊下を走るな」という注意をすべきかぼんやりと考えてそれを見ていた。

理科室は、三階の一番奥にあった。校舎の突き当りであり、その窓からは、明里にはよく見えなかったバスの向こう側——つまり、立木の凶行の現場が、はっきりと見て取れた。

「悲鳴が上がって、何があつたのかは一通り見てたんだが。……今、大分まずいことになっているかもしれない」

聡子が眼鏡を押さえながら、呻いた。

明里も促されるままに、恐る恐る窓からその現場を見下ろした。

上から見ると、はっきりと分った。広場に止められたバス。その回りに重なっている遺体。

血だらけの体。千切れた足。ねじ切られた手首。もぎとれそうな首。

窓の外の光景を見せられて、明里が目を逸らすのも、無理はなかった。

「聡子……」こんなものを見せて、何が言いたいのか。

「いいから。よく見て」

眼鏡の向こうからの鋭い視線に押されて、再び明里は窓の外に視線を落とす。

「嘘でしょ……」

「そんな……」

一緒に上ってきていた少女たちが、啞然としていた。それは、信じたくない光景だった。

錯乱した立木達に、喰い殺された警備員たち——彼らが、ゆっくりと、その体を起こしていったのだから。

第二話 攻撃的な死と再生（4）（前書き）

遅れてすいません。第三話の方との兼ね合いを考えていて……。
ようやくまともなアクションシーンがあります。お楽しみください。

第二話 攻撃的な死と再生（4）

「何が起こってるのか分からなくって、最初はぼんやり見てたんだけど……」

聡子がとつとつと話します。

「立木が警備の人たちと格闘しているのを、見てたよ。組みふせて噛みついて。まともに見てられなかっただわさ。あの人たちは、まちがいに……死んでた」

眼下の光景は子供が見るにはショックに過ぎる。明里が連れてきた女生徒達も、声を震わせていた。

「あいつ等になるんだ……あいつ等に食われたら、仲間になるんだ……」

熱に浮かされたように、隣にいた少女がそうつぶやく。

思わず、聡子に向かって問いかける。

「錯乱しているのとは、別だと思うの？」

「さっき放送で、錯乱状態だなんて言ってたが、とてもそうは思えないね。さっきまでピクリともしなかった人が、突然理性をなくして歩き回る。ああいうのを、私なら別の表現を使うね。いわゆるゾンビってやつだわさ」

ゾンビ。普段は聞きなれない耳触りの悪い言葉。モンスターや吸血鬼と同じような、けれども幽霊やお化けよりは遠い言葉。

「あれは、死んでいるの？」

「人間が「生きている状態」を定義する条件はいくつある。心臓が動いているか脳が動いているか。意識を持っているか知性を持っているか。社会の中で居場所を持っているか、戸籍を持っているか」

「……聞きたいのはそんなことじゃない」

「同じだわさ。目の前にいるあれに対して私たちが考えるべきは、連中は容赦なく私たちを押し倒し、自分たちの仲間にしようとしてくるってこと。……あんな風に、なるかどうかってこと」

思わず、聡子の方へ鋭い視線を送るが、その顔が思ったよりも深刻なのをみて思いとどまった。

彼女もまた怒り、怯え、しかしそれでも立ち向かおうとしている。この不条理な現実に。

だからこそ明里には安易に怒りや恐れの中に逃げ込むことを許そうとはしていない。それが彼女にはわかった。

「原因は……どうすれば、対処できる？」

考えるべきは具体的な対処方法。

ようやく冷静になったか、と聡子は唇を曲げて答えてくれた。

「まあ、見ての通りだわさ。さつき、感染の話がでていたが……基本的には、連中に噛まれたりした人間がかかる、とみていいだろう。最初、バスの中で暴れた二人の教師は生きてたんでしょう」

「ええ。それで、バスの中で容体が急変したらしくって……」

「到着と同時に、発病した、か。それからいったん仮死状態になり……まあ、動き出した、と」

仮死状態、と言ってから聡子が首をひねっているのは、今の状態の脈を測っていないからだろうか。

「それが、例の感染症だとして……あの状態の人間を、感染者、としておくよ。その感染者に人体の重要部位を、そこにいる警備の人間やあそこの生徒が、食いちぎられた。これは間違いなく、死んでただわさ。それが今あやつて、同じような状態で動き回っている」「つまり……一旦、どちらも死んだような状態になった後、あんなる、と？」

「そう。連中は、一度死ぬ。それから、自分がやられたのと同じように、人を襲うようになる。それが……件の地上最悪の感染症の正体だわさ」

だとしたら。明里は生唾を飲み込んだ。事態は教師たちが思っている以上に、悪い方に進んでいる。

死者が生者を襲い、生者もまた死者となる。

そして襲われたものは自らの運命を恨むように、同じ末路を生者に求める。

そうしてやがて全ての人間は死者となり、永遠に地上をさまよう。

窓の外。歩き出した死者たちを見つめるすぎむらあかり杉村明里の頭の中に現れたのは、そんなイメージだった。

そんな場所を、普通の人間は何ていうか。決まっている。

地獄だ。

*

「噛まれたら、アウトっていうこと？」

聡子は窓の外に一瞬視線を落としてから、うなずいた。

「過程に推測に予想に……今のところ安全なことなんて殆どないと言えないけど、とにかくかまれるのはマズイ。今は連中と接触しないこと。それしかないだわさ」

「まあ今のところは、安全なんじゃないの。籠城しさえすれば……」

だが、明里の目が気になるものを捉えた。

「ちょっとまって。あそこ、バスからはいだしてるのは……」

そこには確かに、窓からゆっくりとシロクマのようにけだるげにでてくる少女がいた。最初それこそ顔がきれい二見えたが、次第にその上半身が見えてくるに従って、その娘の腹部がこっそりとえぐりとられているのがわかった。

「待つて。……あの子は、いつ、噛まれたの？」

「最初に暴れてのは、立木だけなのかさ？」

理科室にいる少女たちに二人続けて問いかける。その内の一人の少女が首を横に振った

「いえ。ちょうど悲鳴が上がった頃に、佐志場先生も暴れ出して…
…近くにいた生徒が、かまれてました」

「それで、バスの中もパニックになって、みんな窓から飛び降りて
たんです」

そうだ、自分も見えていた。あれは入口のところで悲鳴が上がったから、急いで逃げ出したのかと思っていた。だが、違ったということか。

それはつまり、潜在的な感染者の存在をそのまま意味する。

「なんでそんな、大事なことを……！！！」

怒鳴り散らしそうになるのを明里は必死にこらえる。

くそ、なんだこの手際の悪さは。どいつもこいつも。

明里は一握りの酸素を怒りとともに肺の奥に送り込んでから、できるだけ平坦な声で言った

「ということは、車内で同じようにかまれた学生が、いるかもしれないってことなの？」

それこそ最悪の展開だった。噛まれたまま、校舎に逃げ込んでしまった人間。もしそんな人物がいるとしたら。ようやくそこまで想像が至ったのか、少女たちも目に見えてうるたえ始める。そうして顔を見合わせながら「そこまでは……」と、不安げに言葉を濁した。

「誰も、誰も噛まれてはいないわよね！」

誰ともなく声をあげる。皆おびえたような顔つきで、互いを見やりあう。

無理もない。もし感染していたのなら、それをどうすればいいのか。そこから先を考えるのは、苦痛が伴うだろうから。

しかしそのうちの一人に視線が自然と集まっていく。

少女は顔を蒼くしながら、俯いている。誰とも視線を合わせようとしない。他の女生徒は一步距離をとる。

明里は少女の全身に視線を走らせる。手と靴に土がついている。た

だし、外傷らしい物は見あたらない。

「心当たりが、あるのね」

明里がそういうと、ようやく唇をきつく結びながら、面を上げた。

「あ、あの……佐藤みよ、っていう子が、バスから降りる時に、腕を……」

「その子は、どこにいるの!？」

肩をつかむ。少女の口が、ひどくゆっくりと動いた。

*

階段を飛び降りて、廊下を駆ける。少女たちにその子の名前を聞きながら走ると、まもなく明里を呼びにきた少女とすれ違った。

「副会長……」

導かれるままに、人が集まっている一室へたどり着く。

少女たちは明里がかけてくるのを見て、道をあけた。

空き教室のため、机は後ろでそろえられている。そのため、教室はいつもより広く感じられる。

だが、その広い床には一面の血だまりができていた。

そこから血痕が累々と続き、教室の後部にまで続いている。

「ねえ……みよちゃん……」

その奥。机によって押し詰められた教室後部に、一人の少女の後ろ姿見えた。

明里が歩を進めて中にはいる。血の上を踏みつけないように、慎重に。

そして教室の奥まで行って、状況を把握した。

少女が机の足の間に逃げ込むようにして、倒れ込んでいた。

自分の状態を察して、この部屋まで逃げ込んだのだらう。今のところ、少女は完全に動きを止めている。

そうしてそれに寄り添うようにして、別の少女がいる。彼女には外傷は見当たらない。

少女の死を悼んでいるのか、悲しんでいるのか。どちらにせよその顔が涙でぬれているのに違いはなかった。

だが聡子の推測が正しければ、それさえも危険なことに代わりはない。明里は教室のドアの片方が施錠されているのを確認してから、再び少女を見た。

「ち、違うんですこれは。みよちゃんは……」

一人の少女が、少女の遺体をかばうように手を広げる。

だが、周囲の眼差しは冷たく、乾いていた。

「これ、さっきの先生達と同じだ」

誰かがぼそりと呟いた。少女たちは半歩体を下げる。

動かないのは、みよと呼ばれた少女と、その眼前にいる女生徒だけだ。

「離れなさい。危ないから」

明里は出来るだけやさしい声色で少女に語りかける。だが緊張でこわばった舌でそれが成功したのかは、怪しかった。少なくとも死んだ少女の友人らしい女生徒は、動こうとはしなかった。

「違う、違うんです。みよちゃんは、みよちゃんは……」

「とにかく、ここからでて、話を聞かせて。彼女は……」

少女の遺体が、ピクリと動いた。

「……!!!!」

机の下に入り込んでいた頭部が動き、机を揺らしながら起こされていく。

髪で顔は見えない。ただぼたぼたと顎先から伝わっていく血の滴が、ゆかに染みを作っていく。

机の足から抜け出し、少女は——少女だったものは、へたり込ん

だのような体勢になる。

時が止まったようだった。少なくとも明里の足は竦んで動けなくなっていたし、他の女生徒もそうだった。

「み、みよちゃん？」

ただ少女に寄り添っていた女生徒だけが、膝をついたままその顔に手を伸ばそうとする。

まるでそれが契機だったかのように、その女子生徒は——死んでいるはずの彼女は、ゆっくりと顔をあげた。

そしてみよちゃんと呼ばれた少女がその口を開けて——

「駄目！」

少女が体をひっぱられたのと、その手に向かって噛かれようとしたのは、ほぼのこと同時だった。

*

とっさの判断で少女を引き寄せたのは、結果としては最善だった。飛びかかってきた少女が、地面に芋虫のように這うのを見て、明里は思った。

無造作にたらされた前髪の間から覗いた視線には、理性の光は残っていないかった。虚ろで、意思の見えない眼。正常な人間が宿しようがない光が、その中に湛えられていた。

「いや……いやああアあ……！」

抱きかかえられた少女が、叫ぶ。

間違いない。

彼女は感染している。

「あ……ああ!?……」

恐怖で声が出ない。助けを求めようにも、周囲の人間も呆然として
いる。

その変貌を改めて目の当たりにして、驚かないはずがない。

「ひっ」

少女が必死に体をよじりながら、みよちゃんと呼ばれた少女から離
れようとする。

「これが……感染……」

誰かの呟きが、脳の奥に届く。

自分は今、正体不明の感染者となった相手と対峙しているのだ。

だが、背後に下がろうとしたその足が、がくんとする。

血だまりでぬれた床に滑った。感染者と距離が一メートルもない状
態で。

痛む尻を撫でる余裕もなく、必死にはいつくばったまま明里は下
ろうとする。

その間にもゆらりと感染者は立ち上がり、どこか首が据わっていな
いかのような様子で、こちらを向いた。

少女が唸り声をあげながら、再び口を開けた。唾液と血液を垂らし
ながら、綺麗に生えそろった歯が血でぬめる。

咄嗟に近くにあった机の足をつかむ。そうして机を少女の体の上に
倒れこませるようにして、間に挟む。

衝撃。

机に正面からぶつかってきた感染者は、しかし全くひるむことなく
面を起こした。

自らぶつかってきた机への衝撃せいか、目玉が真っ赤になって陥没
している。

「あああああ！！！」

明里の体からするりと抜け出し、少女は逃げ出そうとする。

駄目だ。背中を見せた少女めがけて、感染者は猛犬を思わせる勢いで飛びかかってきた。

思わず明里は前に出て、相手を押さえようとする。

だがそれは叶わなかった。

すさまじい腕力だった。

明里はそのまま押し倒される様にして、感染者に組みふせられる。

獲物を前にした野生そのままに、口元から明里の胸元へ、唾液と血液をまき散らしながら牙をむく。

血みどろになった歯を口からこぼしながらこちらを見据える。

それは逃れられない死のイメージそのままに、明里を捉えて離そうとしなかった。

明里の脳裏が、絶望で覆われる。

食われる。

喰われる。

クワレル。

徐々に迫ってくる牙が、明里の首筋につき立てられようとした瞬間。

「どけ」

少女達の壁が一瞬途切れて、一つの影が飛び出してきたのは、そんなときだった。

*

それが何なのか、明里が視認する前に、不意に体にのしかかってい

た重圧が消えた。

過呼吸気味だった肺に必死に酸素を送り込みながら、明里は事態の把握に努める。

闖入者がのしかかってきた感染者を蹴りあげくれた。その綺麗に伸びた足から胸へと視線を走らせ、その少女の正体を見る。

「……」

たちはなゆつ

少女——橘夕は明里に一瞥をくれると、手に持っていたそれを、腰だめに構えた。

槍。両手で構えられたそれは、モップの柄に包丁を括りつけただけのもの。

ちやちなつくり。だが間違いなく、殺傷能力を有した簡易的な武器だった。

橘は、よろよと立ちあがる少女に一気に駆け寄り、腹部にそれを突き刺した。

「うおおおおお!!!」

容赦などない。烈火のごとく気迫を挙げながら、そのまま相手を窓際まで押しつける。そうして体が圧力から逃れられないようにしてから、再び柄に力を込めて、刃先をねじる上げる。

「——!!!」

だくだくと飛び散る血流は、見ているものに激痛を想起させるのに十分だった。外野の少女達から、悲鳴のような声が挙がる。

だがやられた当人は身をよじりながらも、未だその動きを止める様子を見せはしなかった。臓器が傷つけられているのは間違いない。

常人であれば意識を保つことさえ難しいであろう激痛が襲う状況で、それでも体をよじる。

血みどろの少女のそれは苦痛から逃れるためというよりは、むしろ動けない状態を解消するためといったように、どこか緩慢な動作で体の向きを変えていく。

そうして斜めに橘を捉えた状態で、彼女に向かって手を伸ばそうとする。

横腹に刺さっているせいで手は橋に届かない。だが橋が刃先の角度を細かく調整しているのを見ても、予断を許さないのは間違いない。しかしそれよりも問題なのは、感染者がモップの柄をつかんだことだ。

果たしてどうするつもりかと思いきや、柄がミシリと嫌な音をたたてた。

柄にひびが入っていた。少女の細腕からは信じられない力で、へし折られる。

感染した人間の腕力は、尋常ではない。それを理解している明里は、事態が悪い方向に向かっていることを理解した。そして状況を打破する何かを探して、周囲を見回す。そしてそれを捉えた。

「その赤いの！渡して！」

声を挙げた先、傍観していた少女達もようやく硬直から解けて、あわあわと明里が指さしたそれを持ち上げる。

じれったい。明里は血だらけになった制服そのままに立ち上がり、少女に駆け寄る。そうして少女からその赤い円筒形の者をひったくるようにして、胸元に抱える。

「頭を下げて！」

安全ピンを抜きながら、二人の近くに明里は駆け戻った。

此方の動きを理解した橋が頭を下げ眼を閉じた瞬間、消火器のノズルから白い薬剤が発射される。

。だが顔面めがけて吐き出される圧力には流石に抗えないらしく、のけぞる様な形で窓にもたれかかった。

今のうちに離れて、と言おうとした杉村は、眼の前で何かが割れる音を聞いた。片目を開けて、感染者の方へ目を遣る。

「ああああ！！！」

橋が、相手の腰にしがみついていた。自殺行為だ！

だがそれは勘違いだった。噴射液の勢いが減ってきたのを見計らったかのように、橋は腰を浮かして、相手の体を持ち上げた。

まさか、と思う間もない。橋は少女の体を開いた窓枠にひっかける。

そうして感染者の足が空めがけて伸ばされ、そのままその体重を逆さまに向かうようにした。

そうして、白い煙が飛び交う中で、感染者は、窓から落ちて行った。

時が止まったかのように、明里には思えた。

橘が息を荒くしながら、へたり込む。

少女達はおびえながら、体を寄せ合う。

ただ、目の前で起こったという光景と、耳に確かに飛び込んできた鈍い音が、その不在を明らかにしていた。

最初に動き出したのは、やはり明里だった。
一步一步を、確かめるように歩きだし、冬の風が飛び込む窓へと近づく。

地面に頭から打ちつけられれば、ただで済むはずがない
しかし、という不吉な枕詞をのどの奥に抱えながら、おそろおそろ
明かりは窓の外を見下ろした。

はたしてそこにあつたのは――

脳天から大地にたたきつけられ、脳髓と血液をぶちまけながら地面
を赤く染めた、少女の物言わぬ遺体だった。

*

死。

眼の前で繰り広げられた間違いのない事象に対し、明里の頭の中がぐるぐると回る。

今更なにを、と醒めた目で明かりは少女を見つめる。先ほどのしかかられて、蹴りを放ったのは誰だ。誰のおかげで、自分は命を取り留めた。

でも、殺した。だからなんだ。でも、人殺しだ。だからなんだってんだ。

この羊みたいな連中のように、黙ってみていりゃよかったのか。

そんな凶暴な思考が鎌首をもたげてくるのを、頭を回して振り払う。落ち着け、私。

「怪我は？」

すでに立ち上がり、服装を直していた橘が、そう尋ねる。先ほどの取っ組み合いで見せた激情は嘘のように消え去り、冷静沈着な少女の顔がそこにあった。

なんでもなかったかのように。そんなはずはない。だが、それでも彼女はその顔でいられた。

一瞬明里は彼女の胸にすがりつき、泣き出したい感情に駆られた。だが、それを今するべきではないとい

う決断を、これまで作られてきた彼女自身はした。大丈夫、と手を挙げながら明里は答えるにとどめた。

彼女はあたりを見回しながら、何かを言おうとした。

おそらくはその場の空気を取り繕う何かを。

しかしその思考は、再び耳に飛び込んできた音に、かき消された。

「非常口から、誰かが！」

廊下の奥で、誰かが叫ぶ。

明里は思わず橘の方へ視線をやる。彼女は教室の後ろの掃除口ツカヘと向かっていた。そこからモップを取り出し、此方に放つてき

た。明里がそれを受け取ったのを確認すると、物言わぬ羊の群れの方へ無機質な視線を送った。

「手を貸してくれる人、いますか」

*

三人のモップを構えた少女たちをつき添えて、明里は橘と廊下の端まで来た。

「杉ちゃん、無事だったか」

上の階から聡子と浜形も来てくれた。浜形はわざわざ抱えてきたのか、ロッカーから四本ほど橘のと同じ作りの槍を取り出した。

「ありがとう。貴方の……分は？」

武器を受け取った明里がそう尋ねると、浜形はそのまま抱えているロッカーの腹をバンバンと叩いた。

「どうやら、これが彼女の武器らしい。」

なんとも頼もしい人間がいてくれたものだ。明里は苦笑しながら、廊下の端まで向かった。

非常口の前に開けた空間を作りながら、少女たちが身を縮こまらせている。

見張っていてくれたのか、同じように箒を構えている少女が、震える声で云った。

「な、なにかとなり声も聞こえたん、気がしたんですけど」

ドアが激しく殴打されている。ノブが何度も荒々しく回され、ガチャガチャと悲鳴を上げる。

明里たちは息を殺し、橘と目配せする。彼女はスッと一步を踏み出し、半身を引くようにしながら左手をドアノブに伸ばした。浜形はロッカーを、それ以外の少女が槍を構えているのを見て、橘は頷いた。そうしてドアノブを回し、開いた。

「待つて!!」

中に飛び込んできた少女が、叫んだ。

前髪をヘアピンで留めた、幼くかわいらしい女生徒。

明里たちはため息をつきながら、武器を下ろす。

だが少女は安堵した風を見せなかった。

息も絶え絶えに、彼女は――木仲きなかえみ絵美は少女達を見上げて、声を上げた。

「助けて下さい! ひよちゃんを……友達を」

第二話 攻撃的な死と再生(5)

話は一時間前にさかのぼる。

「あーやっぱパンはコッペパンに限るなあ。いいだろ。ほーら、いいだろ」

うぜえ、と笑いながら顔を背ける大森響とおもひひびき きなかえみ 木中絵美を前にして、小林日和良は遅めの朝食をとっていた。

朝食の時間は、朝の鐘が鳴ってからの三十分。本来ならそれ以降に来た生徒の朝食は抜きというところだが、なんだかんだと機を見ては手伝いをしているために心象のいい日和良は、食堂のおばさんから特別にお目こぼしをもらっていた。こうしてあまりモノのパンなどをもらって、腹を膨らませているわけである。

「ったく、よくぞまあ一人だけぐーすか寝てられるもんだよ」

「わが眠りを妨げることのできるものなど、いはしないのだ」

そういつて、日和良は上機嫌に笑う。

「それで、今日も声掛けてみるの？他の人に」

「キワモノ狙いで云ったら、あとは霧生とか、バスで来る桃井とかかな」

うーむ、と三人は唸る。いずれも難敵なことは間違いない。

「でもさ、昨日はひよちゃんの予想がおおはずれだったね。学校に來ているのはわけありだっていうの」

「う……」

思わず、絵美の口からそんな疑問が飛び出していた。

「みんな普通に学校でやることあったから、来てただけじゃねーか。おおはずれだったな」

「う……」

響も続く。二人の言っていることが真実だと思い知らされている日和良は、途端に無口になる。

「……まあ、それでも一応の成果はあったことだし、良しでしょう」

じゃないの。千里の道も一歩から。友達百人も、友達一人だけから」

「なんかさびしいなあ」

そんなことをうだうだと話しながら、平和な時間を三人は過ごしていた。

「相変わらず、ろくでもないこと考えているみたいじゃないですの」
いつの間にか食堂の入り口にいた一人の女生徒が、そんな声を飛ばしてくるまでは。

顔を確認するまでもなかった。なぐもふみか名雲文香。県内にその名をとどろかす政治家の一人娘である。

成績優秀品行方正眉目秀麗。何か優れた才能を持つてはいるが、人格に問題があるのがデフォルトと言われている鳳凜の学生の中では、逆に異彩を放っている秀才型の生徒である。

彼女に関しては親の過保護が行き過ぎて、この学校まで連れてこられたというのが一番説得力のある理由とされている。

二番目の理由は、彼女の容姿と話しぶりだ。

「聞きましたわよ。なんでも内の生徒に誰かれ構わず話しかけては、仲良くなるうとしたらしいじゃないですの」

「ですの」口調に金髪の縦ロールというのは、ちょっと普通の学校では浮いてしまうのではないかというのがその主な支持理由で、絵美もこれを支持していた。ある意味クリスティーナ以上にキャラがたった人物だ。

とはいえ違和感はあるても、不快感はない。外見と性格にギャップがないという意味では、これ以上のファッションはあり得ないのは確かだった。

そんな彼女を傍から見分にはいいのだが、問題は彼女がクラス委員長として、なにかと自分たちを目の敵にしていることだ。

学内の風紀を乱している、というのがその理由らしい。

「あらあら。なにかしら？ひょっとして、嫉妬？自分に声がかから

なかったから。ごめんね、金髪は一人でいいのよ」

とくに日和良とは犬猿の仲と言っても過言ではない。日和良も相手が嫌がることを、確実につく。文香も金髪ではあるが、クォーターであるせいかやや色は薄い。案の定、文香の眼を釣り上げる角度が上がった。

「そんなことは言っていないせんわ！貴方が突然そんなことをしたした理由を、聞きたいと言っているのよ！」

とんだ物言いだと、絵美も思った。呆氣にとられたような三人だったが、「おい、ひよ」ちよいちよい、と響が日和良の肩を叩いて何かをささやいた。なんだろう。ろくでもないことだけはわかるけど。果たして絵美の予想は違わず、日和良は突然真顔になった後、にまりと顔を弛緩させて文香に話しかけ始めた。

「ねえ、ふみふみ……もう、こんな争いはやめにしましょう」

「ふ、ふみふみ……」と突然の変貌に文香は戸惑う。基本アドリブ効かないあたり、本当に日和良とは相性が悪い。

「私たち、昔はこんな風にいがみ合っていなかったじゃない。いろいろ喧嘩したこともあった。憎み合うこともあった。けれども、そんなことは昔のことにしましょうよ」

「あなた……わたくしにした数々の仕打ちを、お忘れになったの！」と、文香が声を張り上げる。食堂内の視線を一手に集めるのを感じ

る中で、日和良はあくまで穏やかに話しかける。
「もう。私の何がそんなに気に食わないのよん。かわいいあだ名だつてつけてあげたじゃない」

「『くも』だからって、ピンクスパイダーとか、いったいどこの口ツクバンドですよ！」

「昔私が持ってたおかしも、ただでプレゼントしてあげたじゃない。おいしかったでしょ？」

「賞味期限が切れていて、一週間もおなかを壊しましたわ！」

「あんたの真面目さを見込んで、生徒会の役員にも推したりもしたのよ、実は」

「立候補していないのに一人だけ選挙結果の発表にちょこんと乗せられて、いじめ以外の何者でもありませんわ！」

「ふ、文ちゃん。それ……くらいで……」

と、付き添っていた大沼夏紀おおぬまなつひがなだめる。どことなくぬぼーとした彼女だが、いざという時には場を押さえってくれる。どことなく絵美が共感を覚える相手だったりする。

「……」彼女の言葉を聞いて、文香は我を取り戻したらしく、一旦矛を収めた。

しかし、一度大きく息を吸うと「わかっていきますのよ」と言う。

「あなたは仲間を集めてるんでしょう。これから何かをしでかすための。お見通しですわ、その程度の浅知恵。でも残念ね。なにを企んでも、どうせ無駄ですわ」

そう居丈高に言い放つ。

厄介なのは、こういうところだ。単純なところもあるが、決して彼女は愚昧ではない。

以前に彼女ら三人——HDDがしかした脱走騒動の際にも、文香はいち早く動き出した。彼女の発見がなかったら、あのまま逃げ切れたのではないか、というのが三人の共通見解だった。

こちらが表情を変えないことに何らかの確証を得たのか、嚙んで含めるように文香は続ける。

「あなたがなにをしようとしても、私は絶対に許しません。同じクラスの間人間として、素行不良の生徒を何度でも先生のところへつれていきます」

「ひどい言い様ね」かろうじて日和良に言い返せたのは、それだけだった。それさえ時間と焦りを込めて返したため、相手を勢いづかせるだけだった。

「ふん。自分のこれまでの行動を考えてごらんなさい」

それは自分がこれまで勝利した結果であるとも言いたげな、不遜な言葉だった。

「友達探しさえ邪魔されるなんてね。困ったものだわ」

「……でも安心して。あなたと友達になりたいなんて、絶対に思わないから。ストーカーチクリ魔」

「何とでもおっしゃりなさい。この脱走失敗女」

そうして両者火花を散らしたが、文香は鼻をならして踵を返した。そのままようやくこの居心地の悪い時間が終わると息をついた途端、再び声が飛んできた。

「ああ、そうですわ。木中絵美さん」

突然名前を出されて、絵美は動揺した。訝しげな視線を日和良と響が贈る中で、文香は振り返る。

「あなたも、つきあう相手を考えた方がいいわよ。貴方までそんな人と一緒になるべきじゃないわ。貴方だって、わかっているでしょう。自分の立場を。それに、自分の能力を。貴方くらいの頭や、体力じゃあ。絶対に……」

文香の言葉はそこで途切れた。

水をかけられて、そのまま話してられる人間はいないだろう。

「ごめん、手が滑った」

テーブルに置いてあったコップの水を、日和良がかけたのだ。

周囲がどよめく中で、二人はぞっとするほど落ち着いていた。

「何をしますの」

「見たらわかるでしょ。手を滑らせたの。それだけよ、それだけ」

「あなた、こちらがおとなしくしていれば調子に乗って……」

「調子に乗ってんのはあんたでしょ。喧嘩売る相手を選びなさいよ」
きっかけは水だったが、行き着く場所は泥沼だった。

両者立ち会ってにらみ合い、近づく。

そうしてお互いつかみ合い、押し倒しあいながら体を叩きあう。

日和良と名雲、双方の取り巻きが必死に止めようとしたが、教師がくるまで事態は収まらなかった。

「おまえら、いい加減にしろ！」

泣きじゃくる文香と日和良に説教をかますと、判決はすぐに決まった。

暴力はいけない。先に手を出したほうが悪い。
つまり、重い罰を科されるべきは小林日和良である、と。

そして日和良に課されたペナルティは――。

*

いつの間にかうたた寝をしていた日和良が目を覚めたのは、大勢の悲鳴が重なって聞こえてきた時のことだった。

礼拝堂の奥。その半分地面に埋まったような懲罰室で、日和良は横になっていた。

元は隠し部屋だともいわれていたその部屋は、日の光も外の様子も届かない、まさしく牢屋そのものの部屋だった。ゴキブリなどの害虫こそいないものの、薄暗く湿った室内に長時間入れられる事は苦痛でしかない。そのため鳳凜の学生の中でも最も恐れられるべき罰の一つであった。

もともと、それなりに肝の据わっている日和良のような生徒にとっ
ては、昼寝する場所ではないのだが、今回に限っては違った。

遠くから聞こえてきた甲高い叫び声は、尋常ではない事態を伝えてくる。

何か起こっている。不安と焦りが体中に伝播し、心臓の鼓動ばかりが速まる。

「誰か！？誰か、いないの？」

大声をあげて、ドアを乱暴に叩く。

しかし蝶番でとじられた扉は開くことはないし、廊下に出る扉も動く気配はない。耳を澄まして、答えるものもない。おそらく自

分を閉じ込めた教師は礼拝堂を去ったのだろう。つまり自分は今建物に一人きりということか。

日和良はいったんあきらめて、再び地面に座り込む。それから腕にはめた時計を確認する。今の時間なら、もうバスが到着しているはずだ。そちらで何かあったのだろうか？

「……」

しかし、そこから先は推測以外出来ることはない。

絵美と響。彼女たちは、無事だろうか。

日和良はくすんだ天井を眺めながら、ぼんやりと友人の無事を祈った。

*

「礼拝堂へ行く？あなただけで？」

はい、と少女は頷いた。

話を通じる相手が飛び込んできたのにほっとしたのもつかの間、彼女はとんでもないことを言い出していた。

「ええ。さっき言った通りです。今、あそこにはひよちゃん……小林日和良が、一人でとじこめられているんです。はやく、助けに行かないと」

そのために、力を貸してほしいと、彼女は告げたのだ。

「助けてほしい」駆けこんできた少女——木中絵美は、開口一番そう叫んだ。

生きている相手と把握した一同はとりあえず直ぐ様非常口を閉めて直ぐ隣にあった空き教室の中へ彼女を連れて一息ついた。そうして彼女が来た目的について、話を聞いているわけである。

小林日和良が、礼拝堂に一人取り残されている。すぎむらあかり杉村明里はその事実を聞いて、生唾を飲み込んだ。

だが、それに対して取り組む前に彼女は自分たちの安全に関する情

報を確認した。

木中はなんでも、運動場の方から来たのだという。

「体育館の方にみんな集まったっていつてたわね？無事なの？」

「はい。みんな慌てていましたけど、バスケ部の人とか陸上の人が集まっていたんで、まとまっていました」

「どうやらあちらの方が、まだ安全らしい。確かにあちらは皆知りだし、統率も取りやすい。建物の中に逃げ込むのはやかつたという。それに建物としての特徴上、窓が少ないことからみても、立てこもるにはここより安全だろう。離れている分、パニックも少ないだろうし。」

「ちなみに、外の様子はどんな感じ？広場にいる感染者は、今三人ほだけど」

バスから這い出た女生徒らしい感染者が二人。あとは、佐志場が一人。彼は足をやられたという話の通り、背中を曲げて足を引きずったまま、教務棟の方をうろうろしている。

あとは西校舎の方の裏手に何人が回ったり、雑木林の方へ向かったりと感染者の行動はばらばらだ。

だが、だからこそ危うい。迂闊に出歩くことは避けねばならない。

「はい。来る途中で、一人だけ……警備員の人が、その……」

体育館の方にも向かっている感染者はいるらしい。しかしそれでも全個体の位置まで把握することはできそうになかった。

「それで、木中さんはどうしてこっちの校舎まで？」

礼拝堂に行くにしても、小林がいるのは懲罰室だ。掛けられた鍵を手に入れなければ、助け出すこともかなわない。だから一旦教務棟へいく、というのはわかるのだが、どうして東校舎の方まで来たのかが不明瞭だった。

「はい。行くまでの道で、血が点々と続いていて……気配がしたもので。職員室に行くのに、渡り廊下を使えないかなって……」

「？一階は、入り込まれちゃって使えないわよ」

「いえ。屋根を伝っていけば……」

なるほど。屋根越しに教務とうへ行こうというわけか。確かにそこなら、感染者に襲われる心配はないだろう。しかし明里は、洪面を作って首を振った。

「だめよ、あっちの方が危ないわ。昔それをやった生徒が、半分もいかに怪我をしてたもの」

運動部にも所属している活発な生徒のちよつとした悪ふざけだった。しかし雪をため込まないように角度がつけられている渡り廊下の屋根は、雪も人も滑り落とす。軽いねんざで済んだのは、不幸中の幸いといったところか。

「とにかく、外にでるのは危ないわ。……今は、ここに残った方がいい」

明里は、木中の手を握った。

残念だが、そうすべきだと彼女の理性は告げていた。

*

「先生も、言っていたでしょう。今は、外に出てはいけないって」

「でも。ひよちゃんは、一人取り残されてるんですよ。危険もろくに知らずに」

涙さえ浮かべながら、そう訴えてくる木中。だが、明里としては首を振ることしかできない。

「でも、礼拝堂までは距離があるわ。連中が人を襲う習性を持っている以上、たとえ手段がなくてもわざわざあっちまでいくことはないでしょう」

ねえ、と水を向けると、聡子も同意を示してくれた。

「確かに。今のところ、奴らは基本的に私らの周りをぐるぐる回っているだけに思えるね。味方によっては、向こうの方が安全かもしれないだわさ」

「まあ、持久戦といっても、今のところ連中の知能はチンパンジーよりしたくらいだしね。梯子をたてて、それを上ってくるみたいな

ことはなさそうだしね」

少しおどけながら、明里は言った。

「……でも」

それでも、木中の顔はすぐれなかった。

「でも、先生のところには一度連絡を走らせた方がいいかもしれないし」

「だめよ。それでもだめ。今のところは、先生達だってどうすればいいのか混乱してるのよ。だから、とにかく建物から出るなって指示を出しているの。とにかく、下手な動きをするべきじゃないわ。せんせいたちだって、警察には連絡しているはず。とにかく、それを待ちましよう。」

学園には非常時のための衛星電話などで、各施設へのホットラインが設けられている。何らかのトラブルに見舞われた場合は、一時間で駆けつけてくるようになっている。

警察。そう、彼らさえ来てくれれば。

正直な話、既に明里は教職員に失望していた。現在の状況を鑑みれば、とてもじゃないがもう無条件に信用などではししない。

だから少なくとも外部からの助けが来るまでは、出来る限り安全策をとっていくべきだと、彼女は信じていた。

「あなたが心配するのわかるわ。だけど、ね？今は、こらえてみようだい。小林さんだったら、きっと大丈夫よ」

明里はそう言っ、木中の肩をつかむ。

彼女は眉値を寄せる。だから、明里は最後のカードを切ることにした。

「それに……言いづらいことだけれど、あいつらの注意を引きたくないわ……」

その言葉に多くの学生の視線が、明里に寄せられた。

だが誰も責めるような視線を送るものは殆どいなかった。

そう。それが本音だ。不必要な危険を自ら招くことは、避けたい。自分たちの生命にかかわることなら、なおさらのことだ。

「……」

木中が、何かを言おうとする。それはきつと納得の言葉だと、明里は直観した。
だが。

「私は、反対です」
たちはなゆう
橘夕が、そう言った。

*

感染者——死んだ少女の名前は佐藤みよ、というらしい。今彼女は物言わぬ痛いとなって、校舎裏の地面に赤い華を咲かせている。彼女の友人だったという少女は表情をなくしてへたり込んでいた。無理もないだろう。自分が助かったことを喜ぶべきか、悲しんでいいのか、それとも始末した人間を恨むべきか。
答えなどないのだから。

他の生徒たちも重症だった。なんせ眼の前で人が死ぬのを見たのだ。皆どこか憔悴したような顔で、事態の推移を見守っている。

誰もが傷つき、疲れていた。明里とて例外ではなかった。

だが、事態の渦中にいた当人——橘夕に関しては、それは当てはまらなかった。

仮にも人一人を殺める羽目になったのだ。その心中は推し量るしかないが、少なくとも外面に変化はない。

彼女に関して、明里は年の割に落ち着いている少女、という印象を塗りがえなければならぬ。

いかなる事態にも動じない少女だ、と。

自ら率先して棄権に飛び込み、冷静な判断で問題に対処する。間違はなくこの状況においては頼りにすべき仲間である。

そして現状。感染者の恐ろしさを目の当たりにしている私と彼女は、彼らの危険性をもっとも知っている人間だろう。

そんな共感^{シンパシイ}を覚えていた明里は、彼女と意見が割れたことに戸惑う。「橘さん。気持ちはわかるけど、迂闊に動くのは今のところは賛成できないわ。彼女が危険だとも限らないし、それに、あいつら……感染者がどういう風に動くとか、どんな行動をとるかなんかも全然わからないのよ。そんな相手を前にして……」

「いえ。少なくとも、奴らは不死身の化け物なんかじゃないのは確かです」

そういつて、彼女は人差し指で頭頂部をつつく。

「さっきの感染者をみたでしょう。今のところ連中が動くのを止めてくれたのは、あれだけです。つまり、頭を叩きつぶせば連中も死ぬ」

さらりと吐き出された死ぬという言葉に、明里は顔が青くなるのを感じた。

「あなた、殺すだなんて、そんなこと」

「正当防衛ですよ。あれを殺しても、罪になりますか」

素朴な疑問。何気ない風で問われたその言葉に、明里は返答に詰まった。

「もう死んでいる相手なら、始末しても仕方がない。そうですね」
そう言い放たれても、誰も何も言い返せなかった。

しかし、「そんなことはいいいんです」と手を振る。

肩に担いだ槍を手にながら、言う。

「それから、分かっていることはもう一つあるんです」

彼女はそのまま槍で教室の天井の隅の部分をつついた。

「音です」

それは、教室に供えられていた放送用のスピーカーだった。

「さっき、校舎に入りこまれた時、二階に逃げたタイミングでスピーカーがなっていましたよね。あの時、自分は一階にいました。上にかつぎ込まれた時、こっちからも適当なものを感染者にぶつけよう

としたんですが……そのまえに、校内放送がなつたんです。奴は途端に、階段から離れて、スピーカーの方へ向かった」

そうだ。二階に上って防火壁を閉じた後、奴は来なかった。それを不思議だと自分も思っていた。

「そのあとの放送で外の方を確認していましたが、やはりそうでした。奴らのうちの動けるのは、外に備え付けられている自分の近くのスピーカーに向けて歩き出しました。勿論、獲物を目の前に捕捉してしまえば音が何だろうが関係なくなるみたいですが、奴らにとって耳は重要な器官であることに間違いありません」

橘からつけられた、発見された新しい事実。その言葉に、皆がどうもめた。

「そうだ、やられた学生も……真っ先に悲鳴を上げたから、立木が……」

何人かがつぶやく。どうやら、橘の推論の裏付けとなる証言がでてきたらしい。

これにはさすがに明里も舌を巻いた。

彼女から時折発せられた、抜き身の刀のような鋭い空気。その正体が、分かった気がした。

観察した事実から、淡々と推論を組み立てる。皆がパニックになっている間に、すでに武器を探し出し、作り出している。その冷静さもさることながら、相手が何者なのかという観察も常に怠っていない。

果たして並の人間に、できることだろうか。

明里はすこし背筋に冷たいものを覚えながら、橘の話に耳を傾ける。しかし、その事実がどう、彼女の決断につながるのか？

「だから、なおさらひよさんは危ないと思います。もうすぐ、十二時だ」

皆が一斉に壁に掛かった時計をみた。
時刻は十一時の四十分を指している。

「連中が音に引き寄せられるのなら、間違いなく反応するでしょうね」

そうだ。鳳凜には、学園を代表する建物がある――

「あの音。学園中に響く鐘の音に」

そうだ。

十二時の鐘。一分間ずっと、鳴り響く。

「だから」

そうなれば、おそらくは、すべての感染者が。

「――もうすぐ殺到しますよ。奴ら、礼拝堂に向かって」

第二話 了

手記 4

囚人のジレンマという言葉がある。

簡約すれば、協力すれば皆が利益をそれなりに得られる。けれども裏切った人間がいれば、その人だけがすごく利益を得られるというものだ。

ただし裏切られた方や、ある一定の数以上が裏切ったり場合には全員に、不利益が生じる。

これを、複数犯での罪状を認め、犯行を認めるか否かという立場の囚人達にたとえられるから、社会心理学というのでは囚人のジレンマというらしい。兄が教えてくれた。

あるいは、社会的ジレンマとも。地球環境の問題がそうだ。温暖化を解決するためには、世界中のがCO₂を削減しなければいけないけれどもそれは経済的な制約にもつながるから、皆が喜んで賛同するわけではない。お互いに課したルールを破りあって、好き勝手に二酸化炭素を出し合う。こっちの方が、私たちの世代にはピンとくる。社会全体が抱えた問題。ゼロサムゲーム。

こういう風に話してくれたのは、立木先生だった。

授業中に雑談して、得意げに囚人のジレンマを語っていた私に、お節介にも頭をはたくついでに講釈を垂れてくれたのだ。

あの時はびっくりした。

後で聞いたら、見た目ゴリラみたいな人だと思っていたのに、意外と本を読んでいるということだった。

「暇だからな」180cmの巨体にこつこつした顔でそう言った先生が、ちよつと恥ずかしそうに見えたのは、自分でも似合わないからだと分かっていたのだと思う。そういうキャラじゃないって。

私がこの話を思い出したのは、つい先ほどのことだから、ずいぶん

と忘れていたのだと思う。

感染者。先生がああいう風になった時、そんなことは微塵も思い出さなかったのに。

図書館にある役に立ちそうな本を調べていた時、ふと思い出したのだ。

あの時のことを。

感染者たちの力は、圧倒的だった。特に、先生と警備員の人たちが感染した時は、誰も自分たちでどうこう出来るなんて思いもよらなかったと思う。

体格。腕力。重さ。どれをとっても、女子供ばかりの私たちが、敵うと考えられるはずもない。普通そうだろう。

あの時、そういうことを考えられたのは特別な人たちだけだ。いや。そんなことを言いたいんじゃない。

ノルウエーだったかグリーンランドだったか忘れたけど、そこでも確かとんでもない虐殺があった。

五十人以上の人が、たった一人の武装した男の人によって殺されてしまったのだ。

みんなは「怖いね」と言っていたけど、私は内心で腑に落ちないことがあった。

なぜなら、何十人もが協力しさえすれば、その人を捕まえることは不可能ではなかったはずなのだ。武器があると言っても、所詮は一人なのだ。何発か撃たれる覚悟でつつこんでいけば、それほど死ぬはずがない。そう思っていた。

これが、社会的ジレンマだ。皆で協力すれば、犠牲も最小限にできたはずなのに。

皆が一步を踏み出せば、もっと大勢の人間が助かり、死ぬことはなかったのに。

どうにかできる問題だったのに。

私たちは羊だった。

恐怖と無思慮によってただの一步も踏み出すことを忘れてしまうような、迷える子羊にすぎなかった。

感染者は、私たちの大半にそのことを思い知らせてくれた。

理不尽な暴力と凄惨な光景に、私たちは竦み上がってしまっていた。あの場で動けることが出来た人は、自分の頭で考えることを知っている人達だけだった。

私はあてはまらなかった。ただただ場の雰囲気や皆がやっていること、注目していることに追隨していくだけで、自分一人では何一つとして出来なかった。

二階に逃げ出した後「非常階段をみはろう」と美心ちゃんが言い出したのだって、しぶしぶついていったくらいだった。

そのあとガタガタと音が鳴り出した時、私は思わず駆け出してしまっていた。副会長を呼んでくる、なんて言って、美心ちゃんをおいて。

けれど本当は逃げ出したかっただけだ。それを美心ちゃんは分かっていた。それでも丁度副会長に出会って戻ってきた時は、笑って許してくれた。美心ちゃんは強い子だと思う。

私は、駄目だ。小林さんを助けるために木中さんが知恵を絞っている時も、何も言うことはできなかった。美心ちゃんは、きちんと意見を言っていた。その後はどう動くのかも、生徒全員を集めるのにも一役買っていた。

臆病で、馬鹿な人間。美心ちゃんは私がそういう人間だって、教えてくれたのだ。見せつけてくれたのだ。

私は子供だった。誰かの足跡を追い、背中に隠れて、踏みならされた道に行くことを許された子供だった。

けれども、大人たちが居ない時。荒れ果てた大地を、照りつける太陽を浴び、道なき道を歩き続けるにはどうすればいいのか。

そのことを、誰も教えてくれなかった。

—— 柏木優菜

第三話 鐘がために誰がなく(1) (前書き)

人物紹介

たちはなゆづ

橘夕：冷静沈着な転校生。ゾンビ化した人間にも動じず、暴力をふるうことも厭わない。

すぎむらあかり

杉村明里：世話焼きの生徒会副会長。パニックになった皆をまとめる。

なるみさとこ

鳴海聡子：科学者タイプの変人。杉村の友人。

きななかえみ

木中絵美：おっとり小動物系少女。小林日和良の友人。

はまがたまちこ

浜型路子：長身巨体の寡黙な少女。何を考えているのかわからないが、危機的状態にあつて、杉村と橘には協力的。

こはらでしむゆい

小林日和良：脱走系勝ち気少女。礼拝堂に捕らえられている。

あいかわゆうたろう

哀川勇太郎：教師。小心者で皮肉屋だが、悪運と観察力に秀でている。

第三話 鐘がために誰がなく(1)

ミカエル寮の一階。その談話室に集まった一同は、異様な雰囲気
のまれていた。

皆が互いの体をつかむか、調度品に寄りかかるようにして自分の身
をこわばせている。

口元は引き締められ、その眼は部屋の中央に座る少女に注がれてい
た。

「……それで、私はずっと見ていたのずっと」

少女はただ一人、話をしていた。

彼女自身——まつなみようこ松浪曜子が、体験した、惨劇の話を。

*

「何をしているのか、私の位置からは見えなかった。でも、ゆっく
りと広場のブロックに染みが広がってた。

守衛のおじさんは、陸に上がった金魚みたいに口をパクパクさせて
いた。右手は首にまわされた手をはがそうと、左手は水の中を掻く
ように宙を切ってた。

一際大きな声が上がったの。首筋にかぶりついていた佐志場先生が、
顔を挙げたわ。首筋の皮と、筋みたいなものを口にしながら。それ
がぶちぶちって、まるでゴム紐みたいに伸びて……」

淡々と話す曜子。その姿を、クリスティーナ・稲葉いなばは複雑な表情で
それを見つめていた。

曜子が語る惨劇の時間。

クリスは教務棟の一階にいた。来る新学期の予習のために、教科書

を片手に幾つかの質問をしにいつていたのだ。

悲鳴が聞こえてきたのは、その帰りだった。逃げまどう少女たちを見やりながらも、その原因を探るべく近づいたのは、生来の無謀な好奇心のせいというほかない。

その中で、放心状態の少女に気付けたのは、僥倖だったと言えるだろう。

「まっつん！」

赤い絨毯のように広がる血の海と、その中に横たわる幾人もの体。声をあげた瞬間、凶行の立役者らしい立木がクリスにその視線を転じた。凶暴な光を宿した視線を。

攻撃的でありながら、虚無的にも思えるそのまなざしに、クリスは体が震えるのを感じた。

だがそんな惨状にも我を忘れずにいられたのは、その中を守るべき対象である曜子がいたからだ。

彼女を守らなければならないという義務感が、クリスを最善の方法へ突き動かした。

それからは糸が切れた人形のようになった曜子の手を取り、自分たちの寮まで走って逃げてきた。近くにあった建物の入口はすでに閉められかけていたのと、出来るだけ彼女が落ち着ける場所へ連れていくべきだという判断から、クリスは建物を外回りに、寮まで戻ってきていた。

「……お腹をかまれた人はね、管みたいなものが出ていた。きれいだった。色がね、ピンク色で、真っ赤な血があふれてくる中で、綺麗で、そう、まるで血のプールで洗ったばかりみたいで」

茫然自失の状態の曜子に、寮の皆は驚いていた。最初こそ困惑でしかなかった少女たちも、まもなく聞こえてきた放送によって混乱に至り、曜子からの詳しい話を聞くに従って、今は恐怖が浮んでいた。

彼女たちもようやく事態を把握してきたらしい。
話を聞く彼女らの顔に、最初会った余裕はなかった。

「私は、見ているだけだったの。警備の人たちが死んでいくのも、食べられちゃうのも……」

食べ、た……うわあああああああ！！！！」

話を続けられたのは、そこまでだった。そこでそれまでため込んでいた感情の渦が一気に吐き出された。

髪の毛をかき乱しながら、眼の前に何かがいるかのように彼女は体を振り乱れる。

クリスはそんな彼女を必死に抱きしめながら、背中をさすってやる。

「大丈夫。大丈夫やから」

震える体を抑え込み、やがて収まるのを待つてから、クリスは真剣な表情で一同に告げる。

「とりあえず、私らが話せることはそれだけ。……言っとくけど、本当のことやで。全部」

放送を聞いた時は半信半疑だった皆も松浪に、圧倒されていた。

だがその中で一人。ソファに体を預けていた少女が立ち上がり、松浪に歩み寄る。

「……どうもありがとう。松浪さん。つらかったわね」

そう言って彼女の顔に手を伸ばすのは、霧生詠きりゆうよみだった。

*

霧生はそつと松浪のぐじゃぐじゃになった顔に手を伸ばすと、手にしたハンカチでその涙と鼻水を拭き取ってやる。

その光景を、皆が戸惑いの目で見つめていた。霧生詠のその姿が、まるで子供を寝かしつける母のように慈愛を感じさせるものだったからだ。

「これでみんな、状況は理解したわね」

しかし喉から放たれたのは、先ほどの声とは打って変わった、つめたい声音だった。

「——私たちは、これまでにない危険な状況にいるということを」
冷酷な事実を、彼女は明確にした。

寮の中で戸惑っている学生達を、纏め上げたのは意外なことにも霧生だった。

いち早く松浪とクリスの尋常でない様子を理解し、気だるい朝の間を満喫していた寮生たちをロビーに呼び集めた。そうして半信半疑だった空気を引き締めるのに一役を買ってくれたのだ。

「ここまで彼女の話を聞いて、まだ信じられないという人はいる？
いたら手を挙げて頂戴」

最年長とはいえ、普段の彼女の性格を見れば、協調性とは程遠いという印象をクリス自身は抱いていた。しかし眼の前で話を進めて行くのは、間違いなく頼れる最年長者だった。

「よろしい。とにかく、相手は立木先生だとか、知っている人だということとは頭の片隅に置いた方がいいわね。何が来ても、決して寮の中には招き入れないこと。この方針に何か問題は？」

既に戸締り等のチェックは済ませてあった。後は玄関口だけだ。

「とにかく、私たちはこの建物の……」

ガラスが割れる音に、霧生の声は途切れさせられた。それから聞こえてきた短い悲鳴に、誰もが言葉を失った。

「何。今の音……？」

皆が顔を見合わせる中で、霧生は壁の向こうを睨みつけていた。そ

の時に呟いた言葉を、クリスだけは聞いていた。

「ばか……」

音の発信源。それは隣の寮の方からだった。

*

学園は、死で包囲されていた。

山奥にひっそりと建てられた隔離施設のような学園。人の手が届かないそこは、人の助けが揚げに入らない場所でもあった。

今そこは、人に襲いかかる食人鬼達が跋扈する場所となっていた。むろん、逃げ出すための隙間はある。だが、迂闊に相手に出だしをすることができない現状だ。

もちろん、学園内に危険人物が現れたときというのマニュアルはあった。それに対応する方針も。

しかし未知の感染症にかかった既知の人間が、突然園内で殺戮を始めるなどという事態は常に想定外だ。

その危険人物が複数であり、彼らがまともな知性を持っていないとしたら。

それは最悪の事態に限りなく近い状況だろう。

しかもその中で、一人孤立した生徒がいたとしたら。

「小林さんは、間違いなく危険でしょうね」

眼の前で披露された橘夕の推論は、驚くべきものだった。

杉村明里は生唾を飲み込みながら、彼女の話を総合する。

感染者は、音に反応して動く。そしてもうすぐ鐘が鳴るから、礼拝堂で一同が会する。しかしその建物の中には、一人取り残された生徒がいる。彼女が危ない。

しかし、と何か明里は違和感を感じていた。喉の奥に小骨が刺さっているような、違和感。

「待つだわさ。その論法には間違いがある」

その疑問に答えたのは、鳴海聡子だった。

「たとい音がしたとしても、別の音をよそでならしえればどうにかなる問題じゃないのさ、そんなのは。確かに一分間も鐘が鳴っていたら、連中も殆どが向こうに集まりだすのはわかるけど……」

そうだ、確かに。音に反応する、だから鐘が鳴る礼拝堂は危険だ、と断言してしまうのは間違いだ。

そう考えたところで、反論に同意する自分がかすかに喜んでいることにも明里は気づいていた。

「そうよ、先生が言っていたでしょう。決して外に出るなって。それに、あいつ等が礼拝堂の中に行くとも限らないでしょ。絶対そうだって」

「小林さんは、一人ぼっちで怖いかもしれないけど……今は私たちより安全だと思う」

別の女生徒達も、そう口添えしてきた。

そうだ。私たちは、そうあってほしいんだ。明里は思わず自分の足元に視線を落とした。

なぜならば、小林を危険だと認めることは、その先……自分たちがどうすべきか、を考えることにもつながってしまうからだ。

だが橘はそんなこちらの葛藤などお構いなしに、容赦なく自身の意見が続ける。

「そうですね。紛らわしい言い方をしたのは謝ります。けど学園中に響くような音で、なおかつ長いスパン注意をひきつけられるのは、あれくらいのものでしょうか。あちらの方へ向かっている何人かは、下手をすれば礼拝堂の中に入るかもしれない」

反論は想定していたのだろう。かもしれない、を強調する橘。

「しかしそもそも、普段の生活で、果たして殺人鬼どもがなにをしてくるか、自分たちを見逃してくれるかどうかなんていうリスクを

天秤にかけたことはありませんか？」

それを言われて、聡子も黙り込むしかない。

問題は危険の有無なのだ。これだけ状況が不透明な以上は、「安全」「危険」の二分法で、事態を簡単に断定することは出来ない。

もしもの話だ。と、明里も考えてしまう。

もしも連中があゝの建物の中に獲物がいると知ったなら。ドアは木製で、半分外れかかったようなぼろ。侵入を阻むには心もとない。蝶番だってさびが浮いていて、ドアを開けるたびにギシギシとなる。そうそう開けることは難しくないだろう。いや、だが、それでもわざわざ建物の奥にまで入り込んで地下に下りてくるということは、ありうるだろうか。あゝの建物を家捜しするほどの知恵が連中にあるのか？

「ところであそこには今、小林さん以外は誰もいないんですよね？」
不意に橋が軽いトーンで確認してきた。

「うん。多分今は」木中絵美が答える。

「つまり、小林さんは状況を知らないまま一人取り残されてるんですよね」

呟くようにそう言い、ふと反論した少女の一人に視線を向けた。

「あなたなら、どうしますか」

「どうって……」

「そんな悩む必要はないんです。責めてるわけでも。思いついたまま、答えてください」

「そりゃ、状況も何もわからないのに誰か来たんなら……ええと」
そこではっとしたような顔になる。

「……大声をあげて、何があつたのか、尋ねようとする」
橋が頷く。彼女が言わんとしていることが理解できて、皆がざわめく。

そうだ。普通ならそうするはずだ。

何かが起こっている、というのは分かっている、危害を加える人間がいる、ということにまで彼女の想像が及ぶだろうか。否。積

極的に情報を得るための行動に出るはずだ。

それが自ら死を招くことになるとは、知らずに。

「さて、もう一度聞きますが」夕のそれは、宣告だった。「小林さんが安全だといい張れる人は？」

*

「やっぱり私、ひよちゃんの所に行ってきます！」駆け出そうとした絵美の肩を、明里は反射的に掴む。

「だめよ！先生の指示に従って、それに……あなた一人の勝手を許すわけにはいかないわ」

「そんなの、関係ないでしょう！」

肩に掛けられた腕をはねのけようと木中も掴み、二人にらみ合う形になる。

木中といえば、普段は三人組の中でも抑え役の少女だ。その彼女の激しい一面を見て、明里も動揺する。だが、迂闊に事を起こせばさらなる惨事につながる。明里にはそんな予感があった。

現実にあの病気……あの状態の人間と組み合った自分ならわかる。連中は、本当に危険だ。あの凶暴性から発される力は、組みつく人間を容易に死に至らしめる。自分が助かったのは、あくまで幸運でしかないということとは、彼女自身強く感じていた。

だからこそ。だからこそ、掴んだ肩を握る力を緩める気はなかった。「……二人とも、落ち着いてください。それよりも、もっといい解決案があります」

二人の視線がぶつかり合う中に、包丁の切っ先が差し込まれる。

「どうせなら、連中を全員で片づけてしまえばいい。今なら私たちは、数で連中より有利です。そうすれば、犠牲は最低限で済む」くるりと刃先を回転させながら、橘は平然とそう言つてのけた。

おどろくべき提案だろう。それが一介の女学生から出された提案と

しては。しかもつとおどろくべきは、それを聞いて納得してしまった自分がいることだった。

生身のままあの暴れ来る力の奔流を浴びた身としては、その意見は果てしなく現実味を伴って感じられたからだ。

だが。それはあくまで自分にとつての話なのだ。

周りの少女たちが動揺しているのは、火を見るより明らかだった。その顔に恐怖の色を浮かべていない者はいない。彼女らに、はたして武器を持たせたとしても、何ができるだろうか。

「だめよ。彼らは一応、人間なのよ。それに、こっちは女がほとんどで……とにかく、それは無理よ」

その選択肢は、選べない。たとえ正当防衛だとしても、選ぶべきではない。

明里の良心、モラル、常識、理性……そうした諸々が統合されて、そう決断を下した。

そう否定した明里を橘はしばらく無表情で見つめていたが、「わかりました」とだけいつて槍を肩にひっつけた。彼女もうすうす感づいてはいたらしい。この少女たちに戦闘能力などないということに数で勝っていても、精神的に勝てる気がしない。それは二人にとつては同意事項だった。

「だとしたら、別の案がやはり有効になりますね」

だしぬけに、そんな言葉が夕の口から飛び出してきた。明里は思わずそれに飛びつく。

「別の案？」

「誰も殺さず、誰も傷つかず。それが今求められている選択肢ですよっ？」

「え、ええ。そうよ。あるの？そんな都合のいい案が」

「ひよちゃん……助かるんですか？」

橘は一同の視線を真っ向から受け止めて、頷いた。

「あります。私たちがここに閉じ込められているっていうのなら――

「――それを利用するだけです」

*

非常口に立つて、木中絵美は大きく深呼吸をした。恐怖と緊張で、体が強張っているのだ。

それを見とめた鳴海が、背中をばしと叩いてきた。

「それじゃあ、気をつけてね。小林のばかにも、よろしくだわさ」
固い笑顔でそう言われて、絵美もぎこちない笑顔を返す。そうだ、こんなところで立ち止まっではいけない。槍を握る手に力を込める。私は一人じゃないのだから。そう思いながら、隣に立つ二人の少女を見つめる。

職員室に向かうメンバーとしては、自分の他には橘夕と、178cmの長身を誇る浜形路子が同行してくれることとなった。二人とも自ら志願してくれたのだ。

橘夕――今日初めて会話することになって転入生のアイデア。突拍子もないように思えるそれは、ある意味一番理にかなっているということ、杉村や鳴海、他の学生達も納得してくれた。

無論、不満がある者もいただろう。だが全力で却下する程のものではないのだろう。大半は黙って首肯してくれた。

なんせこの作戦においてもっとも危険なのは、この三人なのだから。

日和良を助け出し、全員の無事を確保する。そのための第一段階として、三人は職員室まで向かわなければならぬ。

腕時計に目をやる。そろそろ時間だ。

「おい！こつちよ！」「こつちにきなさい！」

来た。耳に飛び込んだのは、予想通りの音。校舎のちょうど反対側で、杉村他の学生が、音を出して連中の注意を引きつけようとしてくれているのだ。

広場にいる連中の反応は存外素早く、そちらに動き出してくれた。

「……とにかく、連中と取っ組み合ったらアウトだわさ。正直、音だけでどうにかごまかせる相手だとも思えないし、気をつけて」
鳴海に肩を叩かれて、こくこくと何度も絵美は頷いた。大丈夫だ。頑張れ、私。

そんな絵美にはお構いなく、ポーカーフェイスを保っている二人は、窓から隠していた体を起こした。

「行きますよ」橘が非常口のドアを開けた。

*

非常口から出て、三人は会談を駆け下りた。

作戦通り、あたりに人気はない。少しだけ胸の重しがとれたような感覚を覚えながら、絵美は二人の間を小走りに走る。

遠周りではあるが、渡り廊下を大きく迂回するようにして、一度体育倉庫へ向かう。これは、まず逃げ遅れて隠れた人間がいなかどうかを確認するためだ。

「誰か、いないか！」

周囲に感染者の気配がないのを確認してから、声を上げた。

しかし反応がないこと確認すると、三人はすぐさまそこを後にする。移動にはそれなりの注意を払った。連中には見つからないように、出来るだけ此方に向いていないタイミングや見えない角度からの移動を心がけて、刺激することを避けた。

その結果、三人は感染者と遭遇することなく無事教務棟にまでたどり着くことが出来た。

それから非常階段まで歩く。浮き足立っているといっても、さすがに大人だ。こちらに襲いかかってくる感染者の姿は見えただろうし、一階はすでに封鎖されているだろう。そう判断すれば、一番入りやすいのはここだった。斜めに向かい合う形になっているため

非常階段を駆け上がり、絵美は大急ぎで二階のドアを叩こうとして、聞こえてきたうめき声にぎよっとする。

「た、橘さん！」

絵美は上ずった声を挙げてしまう。

階段の上、高所に、感染者の一体が陣取っていた。

「……そううまくはいかないか」

階段には果たして、警備員の一人がいた。ちょうど階段の三階のあたりにいるのをみれば、どうやら階段を上る知能はあるらしい。近くで見るその威容に絵美は息をのんだ。

片腕は肘のあたり千切れかけて、腕の内部が露出している。おそろく噛み千切られたのだろう、いつとれてもおかしくないようにぶらぶらと揺れている。だが恐ろしいのはその顔だ。上唇がはぎ取られ、真っ赤な歯茎が常時のぞいている。そうして滴る血を見せつけるようにして、此方に向かってくる。

「先生！誰か！あけて、あけてください」

焦る思いと共にドアを必死に叩く。だが、反応はない。迷っているのか、それとも誰もいないのか。いずれにせよ、感染者が迫っているのは確かだった。もう少しで、相手の間合いに入る。

いつそ下がるべきか。絵美は逡巡する。

体重、体格共に此方よりはるかに大きい。そのうえで高さを伴っているのしかかられれば。そこまでの想像で、絵美は身震いしそうになる。悪い予想は当たった。ほとんど階段から踏み外すような形で、相手は飛びかかってきた。

「失礼！」

橘が此方の体を抱きよせるようにして、相手との衝突を交わさせてくれた。感染者はたたらを踏むようにして、階段の手すりにその顎をしたたか打ちつける。手すりに抱きつく形になった。

「浜形さん！」

「……！」

言われるが早いか、下段にいた浜形が階段を駆け上がり、感染者の体を蹴りあげた。そのままずると相手は重心を手すりの向こうに移動させる。

やったか。

その一瞬、感染者は絵美と眼があった。そうして突如信じられない勢いで手を伸ばし、此方の袖口を掴んできた。

*

まずい。一瞬で絵美の頭から血の気が失せた。このままだと、一緒に引きずり降とされる。

引き寄せられる感覚。しかし抱きとめていた橘が、腕を振り上げたかと思うと、その感覚が消え失せた。ボトリ、と後には絵美をつかんでいる腕だけが残り、踏み段に落ちた。

感染者の腕を叩き斬り、自らの命を救ったそれが何なのか、絵美は見とめる。

「……護身用です」ぶっきらぼうに、橘は呟く。

信じられない大きさの湾曲したそのナイフ。それを呆気にとられたように絵美と浜形は見つめる。

橘はそそくさとナイフの血を落として、太ももにつけてあった鞘におさめた。こんなものを持ち歩いているこの娘は、いったい何者なのか？

「おい。大丈夫か！」ようやく、ドアの向こうから声が聞こえてきた。

「早く、あけてください！早く！」絵美も思わずドアに拳を叩きつける。一瞬湧きあがった疑念は即座に霧散した。とにかく、安全な場所に行きたかった。

「ま、待ってろよ。大丈夫だ！」

どこか声を絞ったような音がドアの向こうから発せられ、まもなく鍵が開けられる音がした。

ほつと息をつくと同時に、絵美は自分が言つべきことを思い出した。
「ありがとう、橘さん」
ぎこちなく笑う彼女に、どういたしまして、と答える橘の声は、何処か恥ずかしそうだった。

*

「あなた達は、なんてことをしているんですか!？」
職員室に入つて最初に掛けられた言葉は、叱責の言葉だった。
「放送が聞こえなかったんですか!外は危険だと、決して校舎から出ないように言つたでしょう!どういふつもりですか!」

室内は騒然としていた。

とにかく、職員室まで来い。
建物の中に大慌てで滑り込んだ三人は、へたり込む間もなく教師の二人にその声をかけられた。
廊下には結構な数の学生が逃げ込んでいた。すでに一階に逃げ込んでいた生徒は二階に避難していたらしい。幾つかの教室が開けられて、皆体を寄せ合い震えていた。何をしに来たのか。皆は無事なのか。そんな疑問をはらんだ視線を受けながら、三階まで上がる。そうして開け放たれたドアから睨みつける理事長の下に、三人ははせ参じたのだった。

「そうですね。すいせん。もっとも、きちんと責任を持って監督してくれる人間がいない割には、よくやった方だと思います」
そう言つて、橘はぎろりと室内を見渡す。皆視線を逸らした。
「私が言いたいのは、そんなことじゃ……」
「くだらない話は、やめておきましょう。時間がないんです」
それでもなお噛みつきこうとする理事長を、橘はぴしゃりと跳ねのけ

た。大人顔負けの度胸とは、よくいったものだった。

橘は教職員達を見まわしながら、尋ねる。

「誰か怪我は？」

「していない」柿谷の顔が、訝しげになる。「それが何か？」

「いえ、連中に噛まれると、同じ症状を発症する可能性があるみたいです」

「やはり、そう思うか。そうじゃないかと……まあ、大丈夫だよ、こっちは」

一瞬教員たちが意味ありげな目配せをしたのを不審に思ったが、橘はそれで納得していた。

「わかりました」

絵美は一瞬あちらの校舎で実際に感染者が出たことを伝えるべきか逡巡したが、浜形の強い視線が突き刺さっているのを感じて止めた。生徒に死者が出たという話は、迂闊にしない方がいい。それが来る前に皆で為された合意だったからだ。

「警察のほうに連絡は」

「いれてある。しかし、来るまではまだかかる。だから、それまではとにかく我慢をして……」

絵美は禿頭の教頭に語りかけた。

「礼拝堂に一人取り残されてるんです」

それから、小林日和良がどういった経緯で礼拝堂に取り残される様になったのかを伝えた。

途中で生活指導の教師を睨みつけると、彼もその事実を認めた。

「ええ。まあ。それは、あの時が一番適切な処置でした」

教頭は神妙な顔で話を聞いていたが、助けを求めるように理事長を見つめた。

「そう。それなら安全でしょう。彼らは今のところ、あそこまで向かっていないわ。人がいる建物の周りをうろろろしているだけだもの」

「先生達は、あの人たちがただ錯乱している、と思っっているんですか？本当に？」

絵美の口から思わずそんな疑問が飛び出していた。

しかしそんな問いかけにも、理事長は鉄面皮のまま、さらりと応答して見せる。

「ええそうよ。噂の病気……病人である彼らに対して、危害を此方から加えることは許しません」

嘘っぱちだ。絵美は他の大人たちの顔を見て、それが建前でしかないことを理解した。

そして同時に、彼らに任せておけないという思いを一層強くした。

「連中は、音に反応する習性がある。気付いていましたか」

不意に橘がそう言ってきた。理事長は困惑顔だったが、しかし教師の何人かは、ああ、と何かひらめくような顔をした。

「そう言われると、確かに。そうとしか思えない場面が……」

「ならもうすぐ鐘が鳴ったら、どうなるかお分かりですね」

「……まさか」

教員たちが色めき立つ。それくらいの想像力はあるはずだ。

「し、しかし……そうか、いや確かに。だがその場合は……」

柿谷がそう答えようとするのを、橘は手で制した。

「言いたいのはそれじゃありません。これはチャンスなんです」

橘が力強くそう言い放つ。そうだ。たたみかけるなら、今だ。

「校内にいる感染者たちが、一か所に集まる。それも、学園の敷地の片隅に。これを利用しない手はないでしょう」

「ま、まさか彼らに対して暴力を使う気なの！そんなことは決して……」

余計な口を挟もうとする理事長を制しようと絵美が口を開いたタイ

ミングで、バシンという音が部屋に響く。
浜形が、机を叩いたらしい。黙っている、とでも言いたげに顎をしやくる。

「……いつの世も、危ない連中をどうするかは決まっています。そんな連中は牢獄に閉じこめてしまえばいい」

再び話しだした橘が、不敵な顔で告げた。

「——奴らが礼拝堂に集まっているうちに、脱出するんです。生徒と、教職員全員で」

学園をまるごと感染者の檻にしてしまう。
それが橘夕の提示する、「作戦」だった。

第三話 鐘がために誰がなく(1) (後書き)

また夕ちゃんのドヤ顔で次回に続きます。

第三話 鐘がために誰がなく(2)

感染者は、音に引き寄せられる。だからこそ礼拝堂は危険な場所となる。日和良が危ない。
だが、それ以外は？

「学園中の感染者が集まっている間は、私たちは安全になります。その間に此処から脱出し、閉鎖すれば、安全は確約される」

橘の発想はある意味最も適切なものだった。立てこもっていることが安全とは言っても、それは怯えながらの安全だし、助けが来るのを待たなければならぬ。

だが、連中を閉じ込めさえすれば、安全が確保されるだけでなく、安心もまた確保される。

「すでに話はつけてあります。杉村生徒会副会長や、鳴海さんが他の建物にいる学生をまとめてくれています」

彼女らには体育館や食堂にいる生徒、そして寮にいる学生達を連れて脱出する段取りをつけてもらうという役割を担ってもらっていた。他の学生達にも顔が利く彼女達だからこそまかせられる役だ。

「そして同じ時間に、私たちは礼拝堂から小林さんを脱出させます」

「警察が来ても、直ぐには対処できるとお思いですか？」

実際、警備員たちも最低数しか詰めていなかったとはいえ、あの状態の人間の力には並々ならぬものがある。

その点は理事長も認めざるを得ないのか、反論してこない。

「しかし、一度礼拝堂まで行けば、簡単には戻れないんじゃないか？それこそ連中の間を突っ切れるのか？」柿谷がこちらの話に乗っ

てきた。彼を向いて、橘は話した。

「ちょうど、広場から少し出た、あのぽつんと立っているスピーカー。あれを後で壊してもらいます。そうすれば、何度も音を鳴らしてもらえば、あそこ以外のスピーカーに感染者も集まるはずです。そこを通って、体育倉庫へ隠れます。あとは連中が通り過ぎた後で、外に出て皆と合流します」

先ほど建物のチェックしたのもそのためだ。案の定、ボールなどによって割られないよう、格子でガラスを補強されていたため、戸締りさえ気をつければ容易には入れないはずだ。

つまり、最悪取り残された場合でも助けが来るまで立てこもっていればいい。

「今から五分後に、放送をお願いします。内容は、先ほど自分が話したことで結構ですので。それから三分おきに、同じ内容を繰り返ししてください。そのときに、ここまで戻ってきますから」

「待ちなさい。勝手な行動は許しません」

理事長が、再び立ちはだかった。

「そ、そうだ危険だ。君たちにまで何かあったら……」

教師たちも、それに追隨してきた。

こんな時だけ聖職者づらか。日和良なら、なんて言っただろう。「反吐がでる」だろうか。

「いやです。代わりに、先生達がくれますか？」

絵美の一声に、教師たちは一様に視線をさまよわせる。それが彼らの内心を雄弁に物語っていた。

「貴方達は……！！」

絵美は思わず思いのたけをぶつけようとする。奇妙な音が聞こえてきたのは、その時だった。

*

うつつうつつ。

突然、地の底から唸るような声が聞こえてきた。
橋と浜形は、即座に身を固くする。

「いや大丈夫だ」教頭が手を広げる。「心配ない」

だが教職員達は皆何処か苦々しげな顔になるだけで、特別奇異には思っていないらしい。

「見せてあげなさい」理事長に言われると、柿谷が職員室の奥に向かい歩きだした。心情の読みとれない、複雑な表情だった。

三人は戸惑いながらも、後続く。

「入りなさい」招かれた室内には、信じがたいものが転がっていた。最初絵美はそれを死体だと思っていた。

だが、それは絵美たちが部屋の中に入った途端に動き出した。

「これは、一体……」

部屋の扉の隣に立てかけてある刺又。本来ならば暴漢を取り押さえるための道具だ。血糊が所々に付着したところを見ると、これを使って捕まえたということらしい。

「なにを、してるんですか」

男は拘束されていた。口元には縄を噛ませられ、手足をホースらしきもので縛られ、動けなくさせられている。

「見ればわかるでしょう。拘束してるんです」

「だから、いったいなんのつもりで！」

絵美の言ったことを、いかにも心外だとばかりに理事長は彼女をねめつける。

「彼らの症状がどんなものであるにせよ、彼らは病人なのです。危害を加えずに状態を見るには、こうするしかなかったの。ねえ」

守衛にそう語りかけるが、相手は首をよじらせるのみだ。

絵美は信じられない思いで理事長の顔を見た。

普段漂わせている威厳はない。そこにあるのは狂気。理事長は狂っ

ていた。彼女にとっての日常、常識を常に当てはめて、そこから一歩も動こうとはしていない。

「そんな、話だなんて……」 絵美は絶句しながら、大人たちを見つめる。

彼らは、誰も目を合わせようとはしなかった。彼らには、何が言いたいのか分かつているのだ。

おそらくそれが無理であろうことは承知していたのだろう。それでもやらざるを得なかったということだ。

それはそうだ。人を殺せ、と言われるよりも、人を殺すな、といわれる方が楽だ。

人を助ける。傷つけない。そんな甘美な言葉に乗せられているだけだ。それが嘘だとわかっていても。

責任。義務。モラル。法。そう言ったものにがんじがらめになった彼らに、非常な決断など下せるはずがなかった。

あるのはただ盲目的な順法精神と、常識という自らを繋ぐだけの鎖。広場での惨劇。殺戮。そして眼の前にいる男の凶行。

そんなものをみて、いったいどうしてそんな風に考えられるのか。絵美には理解できなかった。

「うつつうつつ！」

橋が近づく。守衛は一層の興奮を見せて、体をよじらせる。

しかし橋はその顔を踏みつけるように壁に押しつけ、首筋に手を伸ばした。

「手遅れですよ。脈もない。こいつらは、そういうルールの外側に居るんです」

「素人が口を出すことではありません。良いから、その方から離れなさい！」

一喝。過度なまでに感情的な叫びを、橋にぶつけてくる。

権力を振り回すだけの愚かな女。こんな奴に……。

「とにかく、わかりましたね。彼らに手出しをすることは許しませ

ん。私は……」

不意に、浜形が動いた。その巨体に似合わぬ俊敏な動きで橘が腰に差していたナイフを抜き取ると、理事長を羽交い絞めにしていた。

「ひっ」

「動くな」

刃の切っ先を喉元に突きつけると、浜形はどすの利いた声を職員室に響かせた。

理事長は腰を抜かしそうになりながら、浜形のナイフを見つめる。

「な、なにをしているんです！あなたは！」

「馬鹿な真似はやめろ！」

職員も色めきだち、皆腰を浮かす。

「お互い様だろ」

しかし浜形は冷静にそう述べた。初めて聞いた彼女の声を、思ったよりも高かった。

「ひ、ひいいい！」

切っ先が喉元を薄く切り、刃を血が伝っていく。

「さっさと礼拝堂のカギをよこせ」

「し、従いなさい」

相手は本気だ。それを理解した職員たちは慌てて言うとおりにした。そうして硬直していた絵美と橘を、一瞥をくれる。

「言葉は無意味だ。行け」

彼女は短くそう言い放つと、顎で出口をしゃくる。

橘は職員から鍵をひつたくと、浜形の持っていた槍を手にした。

「とにかく、放送をお願いします。これ以上死人を出したくなければ」

「あなたたち！こんなことが許さ、れると思っているの！？」

わめく理事長を無視して、他の教員に視線を走らせる。

「よろしく願います！それから、ありがとう！」

どちらにせよ、彼らの力が必要だ。絵美は精一杯の誠意をこめて一礼する。最後の一言は、浜形に向けたものだった。彼女はいつもの

ように口を結んだまま、こくと頷いた。

「行こう」

それからきびすを返すと、二人は職員室を飛び出した。

しかし絵美はふいに思う。思ってしまった。

——だが果たして、私たちが狂っていないとも言えるのか。

人だったものを、殺すことに何のためらいもなくなった自分たちは。

*

それから二人は非常階段を駆け下りる。

「あっ……」

絵美が漏らした声の原因を、橘は見た。

先ほど突き落とした警備員の遺体が、なくなっていた。

「死体が動くのは、最近じゃあ珍しくないっていうのも皮肉なものですね」

平時なら面白い冗談だったかもしれない。今はただ、絵美には蒼い顔で頷くことしかできなかった。

そのまま二人は無言のまま周囲に視線を走らせ、安全を確保しつつ礼拝堂に向かった。

今はほとんど使われていない古井戸のある小屋を抜けて、木々の向こうにようやく礼拝堂をとらえた。

「もうちよつとだね」

「……」

しかし、橘は答えなかった。しかし彼女とおなじ場所を見てその理由を理解した。校舎の向こうから、こちらに向かつてくる影をとらえたからだ。

「つけてきやがった」舌打ちとともに発せられた粗暴なつぶやきに、

絵美は一瞬ぎよつとする。が、それを頼もしさにとらえなおして、彼女の袖を引いた。

「とにかく急いで……」

「あー」

何者かの声。二人は一瞬で体をかがませ、木の陰に伏せた。

感染者。思ったよりも近い。このままいけば、遭遇するところだった。

たった一体だけなら、片付けることが出来なくもない。

「……隠れて」

だが問題は、それ以外の連中に気付かれた場合だ。とにかくばれないように、ここはやり過ぎさなければ。二人は息をつめながら、相手が立ち去るのを待つ。

ぱき。絵美は一瞬色を失う。枯れ枝を踏みつけてしまった。へし折れる音が、あたりに響く。

感染者は案の定、体をゆっくりと反転させ、此方に顔を向けてきた。二人は慌てて顔をひっこめた。

気付かないで。お願い。願ってもむなく、足音が一步一步、近づいてくる。

「……」橘が、槍を両手でつかみ直した。絵美も震えを止めるように、バットを握り込む。

しかし、一瞬甲高い音があたりに響く。

「あー、あー。こちらは、鳳凜職員一同。今みんなは感染者立ち似囲まれていると思います。彼らは音に反応することがわかりました。そのため、皆が姿を隠している間は、十二時の鐘に引き寄せられると思われます」

放送だ。どうやら、此方の作戦に一応のつてくれらしい。
土を踏む音が止まり、何かを考えるように沈黙が訪れる。

「……えー、そのため、これから皆さんには、感染者が一カ所に集まっている間に、学園の壁の外まで脱出してもらいたいと思います。できるだけ、音を立てることなく、皆でパニックになることなく、外にでてください。まず、建物にいる人間を全員一カ所に集めて……」

そうして間もなく足音は、此方から離れて行った。絵美はほっと一息つき、橘は槍をそっと下ろす。

念のため少し移動して見渡しのいい場所まで来ると、やはり連中はスピーカーの立っている場所に集まっていた。

「成功、かな」

「これからですよ」

橘が土を落としながら、言う。

「とにかく、いきましよう。もう十五分を切りました」

*

戦前からある建築物。かつては鳳凜のシンボルともいわれた建物だった。

元々は学長であつた現理事長の夫が熱心なクリスチャンだったらしいのだが、彼が亡くなってからは廃れる一方らしい。

理事長も元はクリスチャンだったらしいが、死後判明した旦那の寄付金によって宗派替えしたらしい。冷遇はその意趣返しと言ふことだ。

現在は以前から務めているシスターが一人で取り仕切り、その屋台骨を支えている。その甥っ子でもある檜尾の手伝いもあって、週に一度はありがたいお話をそれぞれのクラスごとに聞かせてもらって

いる。

鐘は三階部分にあった。丁度教会の屋根の先端部分だ。あれが鳴り響けば。絵美は喉を鳴らす。

「外から逃げ出すのは、無理そうですね」橘が呟いた。彼女は、その後ろ側を見ていたらしい。

確かに鉄条網の掛けられているのを見ても、あちらから逃げ出すことはできそうにない。猪や猿を入れないため、というふれこみだったが、どう考えても中にいる人間を出さないための仕掛けだろう。悪趣味なことだ。

「開けるね」

あと十分。

絵美が断りを入れてから、ゆっくりと力を入れて扉を開く。ぎぎぎ、と音を立てながら扉が開いていくのを、背後を見つめている。先ほどの感染者を警戒しているのだろう。

行儀よく並べられた長いすの間を抜けて、託宣台に向かう。

「こつち」

そこから裏に入り、わたり廊下の突き当たりにある扉を開く。中はちよつとした小部屋だ。シスターが普段使っている調度品をしり目に、そのさらに奥の扉を開いた。

「ひよちゃん！聞こえる！」

「絵美！絵美なの！」

すぐさま闇の向こうから返事が返ってきた。

二人は顔を見合わせて、地下へ向かう階段を下りた。

とはいっても十五段ほどの階段だ。ほんの小さな隠し部屋。

その奥の石畳の部屋に、日和良がいた。

「絵美！どうしたの、わざわざ！」

「大変なの。今、感染が……」一体どこから説明したものか。

「今、錯乱した先生や生徒が学園で暴れているんです。もうすぐ、こつちに来るかもしれない」

「ええつと、それは、どういう、ことよ？」

まだ状況がつかみ切れていない日和良は、のんきに聞いた。

橘は錠前に鍵を差し込み、手早く施錠を解いた。「ここから急いで逃げ出すってことです」

三人は階段を駆け上がり、再び一階まで出た。

「ねえ、二人だけなの。ほかのみんなは、先生たちはどうなってるの？」

「詳しい説明は後でね。それから、錯乱した人を見ても、なにも言わないでね。私にはなにも答えられないし、向こうも答えてくれないから」

その態度が尋常でないことを察したらしく、日和良もさすがに口を結んでうなずいた。

「くそ」

窓から外を見た橘が毒づく。「一人、来てますね」

女生徒の一人が、此方に近づいてきていた。

「やだ、あれ、怪我をして……」

「ひょちゃん！あれが感染者なの。とにかく、今は……私たちを信じて、したがって！」

動揺する日和良の両手を握り締め、そう説得する。日和良もしぶしぶという形で頷いてくれた。

「……わかった。絵美を信用するわ」

内心の葛藤を見せずに、日和良はそう答えてくれた。

「とにかく、今は待ちましよう。次の放送が、あるまで」

橘が時計を見た。十二時まで、あと五分。

*

「まったく！信じられないわ！」

理事長が都合何度目かの悪態について、哀川は目を合わせないように必死に自分の足のつま先を見つめていた。

理事長にはもう余裕はない。普段の張り付けたような笑顔ははがれ

て、独善的でヒステリックな本性がよく見えている。ざまあやがれ。どちらにせよ、この状況がクソなことに変わりはないがな、と哀川は一人ごちる。子供に言いように指図されなきゃ動けないなんて、どれだけ俺たちは無能なんだ？

しかしそれにしたって、何もしないよりはましかもしれない。

「浜形。もういい。どうせ、俺達も乗るしかないんだ」

だが職員一同も、今は何か腹を決めたような顔で、脱出の準備をしている。下の階にいる学生たちにも情報を伝え、残される人間がないよう確認したり、大きめの画用紙で他の校舎の人間に準備を促している。浜形はというと、そそくさと下の階の学生達のところへまぎれてしまった。後でどうなることやら。

「そういえば、理事長。武器に関してなんですが」

「いつたい、何かしら」教頭が話しかけても、不機嫌さを隠そうともしない。

「いえ。前学園長が、確か……」

そこでふと哀川は、応接室にナイフがおいてあったのを思い出した。スイスだかで買っていたそれなりに値の張る一品だった。応接室に入りたいとも思わなかったが、誰かを連れていくとなるには空気が荒みすぎていた。

だから哀川は一人、ひっそりと応接室に足を踏み入れた。できる限りゾンビ野郎の顔を見ないようにしながら。ばたばたともかく音が聞こえてくるのを集中力を動員して無視しながら、哀川は棚の中を探る。確か、このあたりに……。あった。

刃渡りは十五センチほど。柄の部分に花の装飾がなされたナイフだ。模造品ではないのは、指の腹で刃先を感じてわかった。

もつとも、こんなもので死体もどきの相手をできるとは思いもしないが。気休めは必要だ。

そうして思わず棚にもたれ掛かったとき、展示だなからトロフィーが落ちた。まずい。しかしトロフィーはほんと床に安っぽい音を響かせるのみだった。

驚かせやがって。安堵のため息をつきながら、哀川はトロフィーに手を伸ばす。机を動かし、拾い上げる。しかしそこで、近づいた再び警備員が興奮しだした。哀川はぎょつとしてしまった。

だが次第に、自分が不愉快な思いをさせられていることに、哀川は理不尽を感じだした。相手がかつちり拘束されているのをみて、顔を蹴りつける。ざまあみろ。

しかしその衝撃で、相手の口元の縄がゆるんだ。呻き声が大きくなる。哀川の眼の前で、ボロリと何かがこぼれ落ちた。

しかし縄自体はゆるんだだけで、おちはしなかった。一人で締め直す必要はなさそうだ。ほっと胸をなで下ろしながら、哀川は地面に落ちた「何か」を見つめる。それは、人の指先だった。

*

一体なぜ、いつ、だれの指先だ――。

哀川の背中を、嫌な汗が流れおちる。

非常口でうだうだしている時、こいつは確か大口を開けていた。そうだ。それから刺又で押さえつけ、柿谷が組みふせてから、それからまずこいつの口を塞いだ。

一体、誰が？

あの時、そうだ、縄を噛ませようとしたのは――

「遠坂先生。ちょっと、大丈夫ですかー。これからですよ」

哀川の眼は、応接室のブラインドから、窓の外を眺める遠坂の姿を捉えた。そして、それに近づく近藤が。

そうだ、窓の外の監視をずっとしていたのは、どうしてだ？ わざわざみんなから離れて、一人なぜこそそしていた？

「だ、だめだ！」

皆がぎよつとした顔で、此方に振り向く。しかし皆の視線は訝しげだ。だが、不思議そうに振り向く近藤の後ろで、遠坂だけは別のものを見ていた。自分の真つ赤に塗れた牙を、いままさに突き立てようという相手の首筋に。

*

「おかしいですね」橘が、玉の汗を額に浮かべながら呟いた。嫌な汗がわきを伝っている。制服もどろや血がべとりについてしまった。シャワーも浴びたい。

立ち止まって待っていると、とりとめのない思考があふれてくる。絵美はそんな雑念を振り払いながら、必死に考える。

放送がない。三分おきに今後の行動について述べた放送が流されるはずだが、もう一分以上たっている。

「ここからだ、聞こえないということとは？」

扉をかすかに開いて、外の様子をうかがう。

「いや、少しは聞こえてくるよ。あっちのほうにあるスピーカーが……」

話声は、甲高いハウリング音にかき消された。

「……あ……え……」

日和良が顔をしかめる。橘は眼を見開きながら、耳を澄ます。それからまもなく、雑音に混じって、何か聞こえてきた。

「……たあ……すけ！……て！助けてくれえ！」

その悲鳴がはつきりと聞こえてきた瞬間、三人は作戦が失敗したこ

とを悟った。

*

「鐘を止める！」

橘が叫ぶ。

スイッチは二階にある。三人は、ミシミシと悲鳴を上げる段差を駆けて、上層へ向かう。

「きゃっ！」

瞬間、階段の板が割れて、絵美のがその中に足をとられてしまう。

「絵美！？」「日和良が倒れそうな絵美を支える。

「何をしているんです、急いで！」橘が檄を飛ばす中で、三人は急ぐ。

「どこですか、スイッチは！」

「そ、そこ！そこにある奴！」

「何をもたもたしているんです！」

「あかないのよ、このカバ……鍵、鍵がかかっている……」あわてて、鍵を取り出す。

しかし、どの鍵か迷う。「ど、どれ？」「そのこの端の……一番ちいさい奴」

「早く。早く！」

ギチギチという音が鳴る。駆動音。

その瞬間、時計の針が、動く音がした。
十二時。

その一瞬だけ、三人の時は止まったようだった。全員が首を巡らし、窓の向こうを睨みつける。

「クソつたれめ」

誰がそれを呟いたのか。それは誰にもわからない。
全員が同じ心情であり、なおかつその後の轟音にかき消されてしま
ったからだ。

鐘が、鳴り響く。

学園中に。

絶望の音が、鳴り響く。

第三話 鐘がために誰がなく(3)

鐘の音が、鳴り響く。学園中で。

それはもちろん、体育館にいる面々のもとにも聞こえてきていた。

「みんな！落ち着いて！落ち着いて！」

杉村明里は、体育館に集まった面々の動揺を抑えるのに必死だった。「とにかく、今は迂闊に外にでないこと。いいわね！」

舞台上から、明里は声を張り上げる。だがなかなか少女たちのざわめきは収まらない。

必死になだめながら、窓の外に不安な視線を向ける。

橘達はだいじょうぶだろうか。

とはいえ、三人なら。あちらにある体育倉庫に隠れる時間も十分にあるはずだ。

だが、もともと門の扉を、車を使って塞ぐ予定だった。そちらはどうする？そもそも、教師達がいらない以上は、車で移動できない。果たして、外にでていいのか？

「ああくそ、無事でいてよ……」

杉村は祈るようにつぶやきながら、感染者達が歩いていくのを見ていた。彼らの向かう先に、礼拝堂があると知りながら。

*

ガブリエル寮のロビー。

テーブルはひっくり返し、電灯は砕け、時計や置物は床に散乱していた。

荒れ果てていた部屋は、さしずめ中で小規模な嵐が起こった後のようだ。

だが現実は今と凄惨だった。

誰もがカーテンで覆われ壁にもたれ掛かっていたそれに視線を向けようとはしない。先ほどもでさんざん暴れ回っていた一体だ。

ガブリエル寮に侵入した一体。それは居眠りしている生徒の一人の部屋に侵入し、その命を奪った。

大慌てで対処したものの、しかし間もなくやられたもう一人が起きだしてきて、戦場はロビーに移った。

そうして皆で死に物狂いになって攻め立て、殺した。頭を碎いて。室内にいる全員の手は、すでに死に染まっていた。

皆がどこか疲れはてたような声で、地べたに座り込んでいる。

「どうしたらいい？」誰かがつぶやく。

先ほどもまでの放送で、ここから一刻も逃げ出せると思ってた。腕がひどくだるい。

自分達が始末した、それらは、時間とともに存在感だけを増していく。

そうしてあの放送だ。脱出を先導すべき教職員達が、やられてしまった。

こうなってしまうては、どうすればいいのか。お手上げた。

皆が経たり込むのも無理はない。ただただ全体の状況を話されるだけで、学園内のことはそんなにわかってはいないのだから。

状況もほとんどわからない。だが、危険だけは理解していた。隣の寮の人間も、皆が集まっていた。

先生達が、やられた。やられている。助けに行くべきなのか？だが、外は危険だと彼ら自身が言っていた。どうすればいい。どうすべきなんだ？

そんなことをはっきりと言い切れる人間など、どこにいる。

クリスは瞼を閉じて、ただただ呼吸し続ける。

*

しばらく、三人は耳を押さえていた。

びりびりと、鮮烈に鳴り響く鐘から伝わる振動を全身にぶつけられ、絵美はしばし身動きが取れなくなってしまった。

そうしてがんと音が頭の中で鳴り響く中で、肩を叩かれているのにやがて気づいた。日和良だ。

日和良が叫んでいる。転校生もだ。だが、何を言っているのかは聞こえない。

しかし窓から向こうを指差しているのを理解して、絵美も大きく頷いた。

「出るぞ」そうだ、ここから一刻も早く脱出しなければ。腕を回す日和良に従い、絵美は急いで下に降りていった。

距離をとると、音は少しましになった。だが、逃げ出す前に外の様子を見なければ。真っ先に一階に飛び降りた絵美は、窓に飛びついて外を見る。雑木林に遮られて、向こうはよく見えない。だが、今のところ人影はない。

振り向き、日和良と橘に頷く。日和良も階段を飛び降りて、礼拝堂のドアから飛び出ようとする。

しかし、振り向いたそこでちょうど入り口の小階段の真下に、血痕がついているのが見えた。しまった。絵美は総毛立つ。

「だめ！」

同時に、ドアが開かれた。外側から。

そこに立っていたのは紛れもなく、先ほどから二人をつけていた、隻腕の感染者だった。

それを見とめたと同時に、感染者は驚愕の表情を浮かべた日和良に迫った。

右肩に手がのばされる。のしかかるつもりだ。

しかし日和良は咄嗟に後ろに飛びずさる。

感染者の手は空を切り、そのままたらを踏むような形になり、そのままあっさり床に倒れ込む。腕がないせいで、バランスが取れないのかもしれない。

「ど、どうしたらいいの!？」

日和良は焦りをふくんだ声で、長椅子を挟んで、うつ伏せになった感染者から目を離す。

「こ、これを！」絵美が駆け他その先にあったのは、倉庫から持ってきたバットだ。そうして拾い上げると、それを日和良に渡した。瞬間、感染者が弾かれたように日和良に跳びかかる。

「ひ……」

日和良は首筋にとっさに腕を差し込み、相手の顔を押しのけた。先ほどまでのろのろと歩いていたのと同じ人物だと信じられないほどの剣幕で、何度も感染者はかみつこうとしてきた。

「くそ、こいつ。こいつ！」

絵美は立てかけてあった槍をつかみ、相手の頭を突き刺そうとする。だが、日和良ともみ合いになってひどくぶれるためねらいがつけられない。そのため、とっさに足に包丁を突き刺した。

丁度臍のあたりが切れたのだろう。がくん、と片足から一機に崩れる。咄嗟に日和良は相手を蹴りあげ、

その拘束から逃れる。相手の歯を床に散らばらせながら、相手の上半身をのけぞる。

そうして、今度はおもいつきりふりかぶる。体を竜巻みたいにねじらせる。

しかし瞬間、日和良の体に延ばされていた手が、絵美の足に伸びた。血の気が引いた。まだやる気だ。

思いがけない反撃に焦った絵美は、転倒してしまう。尻から落下したが、痛みが足からはしった。激痛。

相手と、眼が合う。まるで百年来の敵に出会ったかのように、その

眼は憎悪に燃えているように、その時の絵美には見えた。

「その手ををを、離せえええええ！」

気合いの声を挙げながら、日和良はその力を説き放つ。

鳴り響いたのは、鈍い音。ぐき、ともぼき、とも様々なものが砕け、へし折れ、つぶれた音。半分開かれたドアから守衛は再び押し出され、小階段から転げ落ち、地面にたたきつけられる。

二人とも、へとへとだった。鐘の音は、いつの間にか止んでいた。荒い息使いだけが、堂内に響く。

「あ……あああ」

だが、相手はそれでもなお立ち上がる。が、ちょうどその寸前で再び崩れ落ちた。ぼきり、という音とともに。

そのまま相手は両足を動かすことなく、ただただ上半身をじたばたとさせるのみだ。

とどめを刺すか。日和良は一瞬絵美と視線を交わしてから、扉を押しの外に出ようとする。

「タイムアップだ」

橘が日和良の肩を掴み、そこでようやく絵美は感染者の向こうを見ることが出来た。

雑木林からは、すでに新たに二体の感染者が来ていた。

橘は勢いよく、ドアを閉じた。

*

「まさか、私らが袋の鼠になるなんてね」

誰に聞こえるともなしに言ったであろう言葉だったが、日和良の咳きは三人の間に重い沈黙を落とした。

三人は、あれから堂内にそのまま立てこもることを選んだ。

もちろん、礼拝堂は基本的に煉瓦づくりでできてはいる物の、ドアは木製で、ガラスも多い。立てこもる場所としては不向きだ。

それでも大慌てで柵の中身などを掻き捨て、ドアの前に置いたり窓を塞げば、まだましに思えた。少なくとも耳に注意を向けない限りは。

裏手の部屋や懲罰室に逃げ込むか、という案が出されたが、どちらも逃げ場所が亡くなるということで却下された。その半面、入り込む場所が多いが堂内ならまだ走りまわる余裕もあるし、階上から階段を塞げば、また暫くは持ちこたえられる。

しかしその判断も、今は正しかったのか定かではない。

やがて、窓の外を注意深く探っていた橘が、二人の元へ戻ってきた。「残念ですが……」静かに告げた。「完全に囲まれたようです」

絵美は視線をその後ろに向ける。

ガラスにいつのまにか血の手形が張り付いた。べとりと。ガラスの向こうに、人だったモノがいた。

凶暴な視線が向けられた瞬間、二人は思わず長椅子の間に伏せる。

集まってきた感染者たちは礼拝堂に押し入ることはせずに、あくまで周辺にたむろっていた。どこか一か所から侵入してきた時には、どこか別の場所から逃げるといふ選択がとりずらくなっているのを三人は感じていた。

「まったく、ホント信じられないわね」日和良が泣きごとを漏らす。

「あれが例の……感染症、新種の狂犬病って奴？」

「おそろくは。そんなところでしょ」

日和良もすでに理解しているようだった。あれは、錯乱している人なんてものじゃない。アレは、もう生き物というものと違う。生き物は、あんな風に自分の苦痛に鈍感にはなれない。

全く別の何かだと。

「このままここに閉じこもっていられそう？」

聞こえるうめき声が、ふえ始めたているのに絵美は気づいた。二人

も多分気付いている。橘は視線を外に向けてから、首を振った。

「上からでる方法は？　どうか」絵美も意見を出した。

「たぶん無理ね」窓からみた高さを思い出しながら言った。「骨が折れるわね。そのまんまの意味で」

橘は鼻で笑った。絵美も苦笑する。

「いつそ、鐘の中に隠れるって言うのはどう？」

「酸素が確保できるんなら、悪いアイデアじゃないでしょう」

加えて、鐘の留め具ははずす手段をすぐに見つけることができれば、
だろう。とにかく、籠城するには厳しい。でも、笑えるのはいいこ
とだと思う。

だが、そんな声を嗅ぎつけたかのように窓の外から唸り声が聞こえ
てきた。三人は思わず身を固くする。

今は相手を刺激しないことがなにより大事だ。そのことを思い知ら
された三人は必死にかがみ込み、外から見られないようにその身を
縮めた。

「助け、こないのかなあ」

「期待はしない方が良いでしょうね」

橘の言葉に、絵美も頷いた。それから自分たちの計画を説明し、本
来なら体育倉庫に立てこもるはずだったことを話した。そして現在
それがとん挫してしまったことを。

それから日和良は暫く顔を伏せてから、橘に訝しげな顔を向けた。

「……ねえ、なんで橘さんはわざわざ来てくれたの？」

「作戦を考えたのは、自分ですから」

橘はかすれた声でそう答えた。

「それだけ？　本当に？　わざわざ危険を冒して？」

「自分で決めたことですから」そう言っただけで肩をすくめる。

どうやら、やはり橘と日和良の間に特別な関係はなかったらしい。
もしかしたら、と思っていたのだが、つまりは本当に彼女は赤の他
人を助けるためにここまで来てくれたということだ。

とんだお人好しだ。

「どっちにしても、不測の事態が起こったとき二どうするかまで、シミュレートしていなかった自分の問題ですよ」

「ううん、でも、橘さんはすごいよ」絵美は、精一杯の力でほほえむ。「ありがとうね」

「そうそう。まあ、此処までやってくれたらもう十分よ。あなたは、いざとなったら一人でも逃げてくれたらいい。絵美は私が担いでいくわ」

「待って！そんなの……大丈夫だよ。ちょっと捻挫したくらい」日和良が青じんでいる場所をつつくと、とたんに絵美は顔をゆがめた。

「強がりすぎよ」

先ほどの転倒。その時に、自分は足をひねっていた。転び方が悪かったのだ。

いつもそうだった。仲間内では、いつも自分が運動面で足を引っ張る。絵美は自分の個性を呪った。

「でも、ひよちゃんまで、なんて……」

「あんた、誰のためにここまで来てくれたの？ていうか、友達でしょ。そこらへんは、いいっこなし」

そう言つて、日和良は二人に快活な笑顔を見せる。

「と、いうわけだから。友達じゃない、んでしょ。私と、アナタは適当に隙をみて、行ってくれたらいいわ」

互いに面識のない少女。橘夕。なぜだか知らないけど、わざわざこんなところにまで来てくれた。どれだけ感謝すればいいのか、絵美には見当もつかない。でも、ここまでだ。彼女までこれ以上危険にさらすのは、確かにお門違いだろう。

「……気に食わないな」だが、当の本人だけはそう思わなかったらしい。

「え？」

「そういう安っぽい友情物語は、気に食わないと言っているんです

よ」

言い放たれた理屈になっていない、むき出しの感情に一瞬日和良は面喰う。

「じゃあ、お願いよ。私たちのじゃまをしないで」

「断る。頼みを聞く筋合いもない。……あなた達は勘違いをしている」

先ほどまでよりも、室内の温度が下がる様な冷たい視線を、橘は二人に向けた。

「もう一度言います。私は、自分がそうすべきだと思ったことを信じているだけです。他人の指図は受けないし、聞きたくもない頼みを聞くつもりもない」

軽蔑するかのような目で、冷たく言い放つ。

けれども、そんな姿に一層絵美は橘への信頼を覚える。

あくまで自分が選んだことを強調するその姿は、自分の責任をあくまで自分で引き受けるという覚悟にほかならない。

それは、昨日見た人形じみた印象とはそれは別の姿だった。冷たい雰囲気の中にも、どこか不器用にでもひたむきに自体に取り組みうとしている。絵美はそれを少し信頼することにした。

「まったく……好きにきなさい」

そう言っただけ息をつく日和良の顔は、少しだけうれしそうだった。状況は良くなっていない。けれども、心の中の何かがスツとしたのは確かだった。

*

「てか十中八九、その感染者が原因じゃないの。死亡フラグがビンビンね……」

職員棟で一体何があったのか。そんな日和良の呟きに思い当たる節があった絵美は、自分たちが見たことを話した。

「ていうか、あの理事長も……どうかしてるわね」

「うん……」

それ以外に感想などないのだろう。彼女はそれから天を仰いで、ため息をついた。

みんなそうだ。絵美だって、理事長の行為には言葉もない。

「でも」

不意に自分の口から洩れた言葉に、絵美は驚く。でも？何が言いたいんだ、私は。

「私は、もっと……他の先生達がそれに従ってる方が、怖かった」

そう。そうだ。自然とこぼれおちた言葉に、絵美は腑に落ちた。

自分の中にあつたもやもや。吐き出したい、何かの正体に。

「みんな、分かってたと思うの。間違っているはずだって。そうすべきじゃないんじゃないかって。目とか態度で分かったもん。不本意なのが。それでも、従った。理事長が言う、人道的な対応とかに」

最初の言葉がきっかけだった。そこからは、流れるように口が言葉を紡いでいた。

絵美の中でよどんでいた、様々な思いをのせて。

「……人の命がかかっているとか、皆が危険にさらされているとか。いろんなものが天秤に掛けられたはずなのに。それでも、どうしてもそっちを選んだんだろう。どうしても、誰も違うつて言えなかったんだろう。私はそれが、……怖いよ」

三人の間に、沈黙が落ちる。

日和良はしばらく明後日の方向を見ていた。橘は聞こえないような体で、窓の外の様子を窺っている。

そうして間もなく、日和良はそつと言葉をかきいだくように吐き出し始めた。

「……でもたぶん、それって、いつも見てきた私たちの先生の姿と同じだと思う」

それは絵美にも予想外の言葉だった。

*

橘は、面白そうに二人の会話を聞いている。

「だって、そうは思わない？ 結局みんなが何をしたか、何をしなかったかを考えたら、話は単純じゃない。皆がしなかったのは、自分で決めること。つまり、責任をとるようなことをしたがいなかったってことじゃない？ 大人って、みんな責任をとりたがらないものでしょう」

責任。彼女の口から発せられた、自然でありながら重い言葉に、絵美は一瞬困惑する。

「この学園だって、そうでしょう。子供のすることに責任がとれないって、何をしでかすかわからない子供を、人の目にさらしたくないって。そう言う風に、臭いものに蓋をするのが、大人じゃない」
日和良は、遠い目を見せた。

「……わかってるでしょ。私たちには。良心のこと。子供のためだとか、将来のためだとか言ってるけど、本当は自分達の手を放れて勝手なことをされるのが怖いだけなんだって。だから、ひもをつけて檻に入れて、何もしないように管理しようとする」

両親の話をされて、絵美の胸に痛むものがあつた。厳しいけれど、愛情の深い両親。

そう思っていた時期もあつた。でも、それが自分たちの体面を考えただけのことなんじゃないかって疑い始めたのはいつからだったか。「先生達だってそうでしょ。絶対に体罰なんてしないし、後でおかしないやもんをつけられたり、不公平が生まれないようにあんまり生徒と触れ合ったりしなかった。規律や決まり事を作って、距離を置いていた。でもそれって、自分たちもまた何か子供に対しての責任を放棄しているだけじゃない。責任から逃げようとしているだけでしょ」

絵美は思い出す。悲鳴が聞こえてきた時のこと。逃げまどう人々。死んでも、歩き回る何か。そうして、怯えきつた顔の大人たち。

「私たちが教え込まれていることはね。結局、何かをしるってことじゃない。何かをするなっただけなのよ。そして、同じことを先生達も身につけて行っちゃってしまっていた」

何をどうすればいいのか。私たちには何もわからなかった。ただただみんな逃げまどい不安におびえ、足を震わせ体を寄せ合うだけだった。

「だから、みんな、怖いよ。何かを押しつけられたり、背負うことが。だから、そうやって……結局、何もしない。先送りする。選択しないことを、選択する。」

それが……私たちの……周りにいた、大人なんだ」

彼女にしかない絶望と、誰もが抱く失望。見えない闇の奥、こんがらがった思考の糸。そうしたもののが混ぜ合わされた、日和良にしか吐き出せない言葉。

「……まあ、何も見ていない私が全部言うのもなんか違う気がするけどね。ごめん、やっぱり話し半分にしておいて」

そう言っただけで顔をかく。たまに真面目な顔で真面目な話をする、彼女はよくこういう顔をする。やはり彼女も、何かを恐れているのかもしれない。

「でも、みんな無事だといいいけれど」

そんな風にしめくくると、日和良は笑った。「絵美は優しいね」

そうだろうか。血に濡れた床に視線を落としながら、絵美は苦笑した。

*

そんな沈黙も、長くは続かなかった。

「……ねえ。提案があるんだけど」日和良が、声をひそめながら言った。

「何をする気ですか？」橘はかすれ気味の声で、そう答えた。

「助けを呼びましょう——あの鐘を、もう一度鳴らして」

堂内に、沈黙が一瞬満ちた。

「馬鹿な！自殺行為だ」

予想外の言葉に、橘の言葉も荒げられた。

突然の提案。面喰ったのは、橘だけではない。絵美も同じだった。

「いいえ、本気よ。今問題なのは、私たちが此処に取り残されていることを皆が知らないことよ。絵美を抱えては、私たちだけじゃあ逃げれないのに。だったら、たとえ感染者たちが侵入してくるとしても、助けは呼ばないといけない。どうせ時間の問題よ。やるんなら、こつちからやったほうがいいわ」

彼女は一体何を言っているのか。絵美が混乱する一方で、橘は冷静に反論を加える。

「なんとか今こうして隠れているから連中も入っては来ていませんが、今度刺激したらどうなるか分かったもんじゃない。それに奴らに堂内にこられたら……おしまいだ」

「そうよ、だから助けを呼ぶのよ。音を出して、ね」

「お陀仏して、奴らの仲間になつても他の皆を呼び寄せたいといいかれてる。そもそも、助けなんてきませんよ。どうせ」

「違うわ。助けは、来る。今は、皆動けないだけよ」

そうだろうか。絵美にもそれは疑問だった。最初に東校舎に言った時に、みんなから向けられた視線。彼女たちに、自分の命を預けていいものなのか、日和良見たいには思えなかった。

「違うわい。貴方は、美しい自己犠牲とやらをやりたいただけだ」

橘は力を込めて、日和良の鼻先に人差し指を突き付ける。

「どうせ、他の感染者たちも引きつけようとか、皆の安全を確保しようとか、そんな思惑もあるんじゃないんですか？……私たちを、そんなきれいごとに巻き込まないでください。それこそ、貴方だって理事長と変わらない」

私たち、の部分を強調して橘は告げる。絵美も、不安げな視線を向

ける。

「……ごめん。二人を危険にさらすのは、違うわよね」

流石にその言葉は答えたのか、日和良は再び顔を俯けしゃがみこんだ。

それを見てほっとしたのか、

「大体、私たち二人しか此処まで来てないんですよ。それで一体どうやって、皆が助けに来てくれるなんて信じられるんです。大体の人間は、煽られる葉っぱみたいにふらふらしてるだけだ」
そう吐き捨てる。

「でも、私は全ての人がそうだとは思わない。皆、どこかで持っているはずよ。立ち向かう——勇気ってやつを」

はつきりと切り捨てるその言葉に、橘は呆氣にとられたようだ。

「人間は、いつまでもおびえ続けていられるほどに弱いものじゃない。

きっと待っているわ。自分が、立ち向かえるその時を。

どこかで、誰かが、火をつけたら。何かをきっかけにして、眼を覚ましたら。皆、分かってくれるはずよ。自分が、何をすべきなのか。私は、そう信じてる」

真っ直ぐにそう見据えながら、言い放つ日和良。絵美は思わず笑ってしまう。

そうだ。これが彼女だった。

絶望を飲み込み、後悔を背負い、敵意にさらされながら。それでもあきらめず、へこたれず、そして誰かを信じられる。

そんな彼女だからこそ、自分はこれまで一緒に来たのだ。彼女の向かう先に何があるのか、それが知れたかった。

だが、それとこれとは橘にとっては別の話だ。どんな反応をするのか、絵美は様子を窺う。

彼女の瞳を、橘は目を眇めながら見つめる。

「……あなたは、」

彼女の言葉は耳障りな音によって中断させられる。

暴力的に、窓に何かが叩きつけられる音。絵美は唾を飲み込みながら、その音の場所に目を向ける。

万美だった。首筋からもはや白い骨を露出させながら、柵の隙間、窓の向こうから此方を睨みつけていた。いや、窓に張り付いているといった方がいい。右の頬に流れる血をまるでなすりつけているように、窓にべったりと張り付いていた。

いや、違う。あれは、むりやり押し込まれている。

そう理解した瞬間、ぴしりと窓に亀裂が走った。

思わず、三人は腰を浮かした。

不意に、うめき声が大きくなる。西側。続いて北側。そして入り口側。

四方八方から聞こえてきた。逃げ場はない。まるで獲物

恐怖から、思わず日和良は耳をふさぐ。

恐怖心が、自分の心を支配していた。怖い。誰か助けて。

しかし、その手を

思わずステンドグラスを仰ぎ見た。円形の小さな、しかし確かな神の光。

神様、助けて。

祈りの答えは、すぐ隣から聞こえてきた。ガラスの割れる音とともに、堰を切ったように、反対側のガラスも破られてきた。感染者たちが、教会の中になだれ込む。

「……きやがった」

窓が割れる。ドアが破られる。

絵美は思い知る。

死者たちに、生者に与える慈悲などないということを。

第三話 鐘がために誰がなく(4)

ガブリエル寮のロビー。

誰もが疲れ果てていた。考えることに。立ち上がることに。想像すること。

座り込んで、ただただ虚空を見つめる少女たち。

「――みんな。私たちは、どうすべきだと思う」

「――けれども、本当はみんな分かっていた。誰かが口火を切るべきだと。」

「先生は、とにかく建物の中にいろって……」

「そうすれば、誰かが止めてくれると思う？」

意味のない会話。わかり果てていた答え。そんな応酬が続き、彼女は決定的な一言を下す。

「この人里離れた場所で。警察がやってきて。すべてを解決してくれると思うの？」

霧生詠。その口火を切った彼女の演説は続く。

これまで何があつたか。大人たちは何をしたか。自分たちに一体何ができるのか。

いつの間にか皆が霧生の話に聞き入っていた。

だんだんと部屋の空気が、変わっているのにクリスは気づいた。

熱。うすら寒い空間に、人が生きている熱が取り戻されていた。

いや、それはあるいは一つの篝火のように、あるいは炎と化して――

――

「――私たちを救う人間がいるとすれば、それは――」

一つの、うねりを起こそうとしていた。

*

礼拝堂を取り囲んでいた死者の群。聖なる鐘の音につられてやって

きていた彼らは、生者の匂いを見事に嗅ぎとっていた。

窓と裏口。奴らは一度に複数の方向からなだれ込んできた。

まるで計ったかのような攻め手。それをみとめて、絵美の脳が一瞬フリーズする。どうすればいい。

しかし思いつきり手を引つ張られて、現実には立ち戻る。

「急げ！上だ！」

そう言いつと、橘は思いつきりランプや燭台を窓から入ってきた感染者達に投げ込む。「こつちだ！」

声を飛ばしつつ、相手の鼻先をかすめるようにして、階段のある戸の対角線に逃げ込む。注意をひきつけてくれているのだ。

「今のうちに」

日和良に肩を借りながら、絵美も上に急ぐ。しかし戸に入るところで、のろのろと入り口からはいつてきた集団に、追いつかれた。

「……！？」

長いすの上で高低差を使って立ち回っていた橘が、一気呵成に駆け込んできた。

先頭の真美に、槍を突き出す。突き刺し、押し倒し払いのけようとするが、刃先を握り込まれた。橘はあわてて両手に力を込めるが、相手は血が吹き出すのもお構いなくがっちりホールドしていた。

「……」人の声とも思えない声。獣の方向のようなそれと共に、信じられない膂力が加えられ、橘の体が一瞬ぐらつく。絵美は血の気が引いた。組まれたら終わりだ。

だが橘はとつさに手を離して、相手の拘束から逃れる。そうして背中から階段に飛び込んできた。

扉を締めて、懲罰室から持ってきた錠前をかける。「モップを貸して！」階段の上から日和良が手にしていたモップを投げ渡すと、ドアにつつかえ棒としてひっかけた。

ドアがどんどん叩かれる。なんとか、これで時間は稼げるはずだ。

*

呼吸も荒く二階部屋にたどり着いた三人は、部屋に入るなりへたり込みそうになる。

「まだ、よ!」

玉の汗を拭いながら、日和良が先ほど空にしておいたワイン棚を戸口に押しつける。橘と絵美も手伝い、これでようやく、唯一の出入り口は閉じられたことになる。

それは同時に、脱出方法も失われたことを意味しているのだが。

三人は棚が動かないように、背中で扉を押さえつけるように並んだ。「こうなりや持久戦かしらね」日和良が軽い口調で言う。

後は屋根を挟んである鐘楼が見える窓からでるだけ。自力での脱出方法は、完全に失われた。

「・・・・・・ここが最終防衛線です」

そうだ。もう、ここまでだ。そんな諦観にもにた思いを抱きながら二人をみると、不思議と乾いた笑いを発していた。それをみて、自分も思わず口元がゆるむ。

死を前にして、判断が鈍っているのか。

扉の向こうから近づいてくる死者の声を聞きながら、少しだけ絵美は目をつぶった。

「連中の勢いが、思った以上ですね」橘が言った。

「まるで、示し合わせたみたいだった」日和良がつぶやく。「知恵があるってことかしら」

そうだ。あの時殆ど同時に、挟み込むようにして窓と裏口を連中は突き破ってきた。ただ幸いだったのは、入り口に対して同時に体を寄せあったため、互いが邪魔になって入れなかったことだろう。そうでもなければ、今頃は。

「どっちにせよ、腹をすかせている相手なのは違いありませんよ」橘が簡潔に答えた。捕食者と餌の関係である以上は、話し合う余地などない。

絵美は必死になって体を持ち上げる。そうして三分の二ほど登った

ところで、ドアが壊される音。そして、大勢のうめき声の合奏が聞こえた。

階段の下まで奴らは来ている。

首をだらしなく垂らしながら、窓の外を見つめる。

「みんな、どうしてるんだろう」

「せいぜい、お互いに連絡を取り合ってどうすべきか悩んでいるくらいでしょうね。職員棟がパニック担っている以上、そっちで手一杯でしょう。下手をすれば……」

そこまで言って、橘は口をつぐんだ。これ以上気が重くなることを言っても益がないことを彼女も理解しているのだろう。

「ねえ。やっぱり、もう一度鐘をならしてみない？」

日和良の提案は、今度は苦笑を持って受け入れられた。

「……今更ですけどね。いい忘れていましたけど、スイッチはもうたたき壊してしまいました。どうしても、鐘の止めかたがわからなかったのだ」

「……ははっ。てことは、直にならさなきゃだめか」日和良が渴いた笑い声をあげる。

しかしその声は、近づいてくるうなり声にかき消された。

三人の顔がこわばる。息を詰めて、背後二気配を集中させる。

そうして永遠にも思える長い数秒の沈黙の後、背後から殴りつけられ留ような衝撃が、ドア越しに伝わってきた。

「……！！！」

ドアが悲鳴を上げる。大勢の感染者のうなり声が、いつその重さが、そのまま体にのしかかってくるようだ。

だめだ、だめだ、泣くな私。この二人に、迷惑をこれ以上かけたらいけない。

ガリガリとひっかく音。恐怖に震えるのを隠そうとして、絵美は必死に呼吸を整える。唇がふるえ、手の先が冷たくなる。視線はじつ

と、窓の外屋根の向こうにある鐘に注がれている。

くそ、あんなものが。あんなものがあるから。

だがやがて、衝撃は一旦止まった。うなり声。板一枚を挟んだ死の囁きに、絵美は今度こそ恐怖で息が止まる。神様。神様。

「……ゲームのルールは一つよ。助けが来るのが先か、連中に食われるのが先か。ここまで来たんだから、どうよ、賭けてみない」かすかに息を乱しながら、日和良が言った。

背中の重圧に歯を食いしばりながら、ニヤリと不敵に笑ってみせる。彼女は、まだあきらめていない。

「毒を食らわば、ですか。まったく」

橘も苦笑しながら、それにこたえる。

「どっちにしても、ここからみんなあっちに行くしかないんだから。いけるとこまで、ね」

学園中に鳴り響く鐘――それは、この二階部屋から屋根を挟んだ向こうにあった。鐘楼がそのまま屋根の一角と合体したような形となっているのだ。普段は下から梯子をかけて出入りされているのだが、梯子はどこにあるともしれない。

そのため、そこに行くには、三角屋根をわたっていく必要があった。距離は五メートルほど。

滑り落ちる危険を乗り越えたどりついても、そこには鐘以外何もない。

もしも感染者たちが来たら。考えただけでも怖気のはしる。

「いいでしょう。乗りますよ。せいぜいリターンに期待します」

「ありがとう。あとで好きなところにキスしてあげるわよ」

そりゃいい、と言って橘は日和良にポケットティッシュを投げてよこす。

「本気で鳴らすつもりなら、耳栓をしたほうがいいですよ。湿らせて、使ってください」

うなずきながら、日和良がティッシュを抜き取り、絵美と向き合った。

「絵美。いいわね」

「今さらだよ。私たちは、友達でしょ」

そう言つて、できる限りいつものように笑つ。そうすると、日和良も優しげな顔でうなずいてくれた。

「それじゃあ……悪いけど、行くわよ。3、2、1……
・・・ゴー！」

バットを手に、日和良が飛び出した。

*

日和良が窓から体を抜けださせた。屋根をわたつて、鐘を鳴らすために。

だがその動きに呼応するように、背中中の圧力が増す。一人分の重しが取れたのを知つたように、食人鬼たちはその勢いを増す。思わず一瞬息を止まる。隣にいる橘も、苦しそうな顔をする。

だが。絵美は息を吐ききり、もう一度背筋に前精力を込める。まだ、こんなところで終わつてたまるか。

まだ、希望がある内は。

しかしそんな決意などお構いなしに、感染者たちは手を伸ばす。部屋と階段を隔てる板をたたき割られる。

ドアの向こうから血の伝う、こわばつて腕が伸ばされて、絵美は悲鳴を上げた。すぐとなり、先ほどまで日和良がいた場所を、その手がまさぐる。何かをつかもうと、宙を搔く。」

恐怖で体が震える。目頭が熱くなる。だめだ、私。泣くな。泣くな。

そのとき、頭に響く轟音がきこえてきた。

日和良が鐘を鳴らしたのだ。

鐘が鳴る。鳴る。鳴る。

乱暴に、粗雑に、普段より秩序立っていない、うるさいだけの音。だがそれは、生きている人間が出している音だ。

届け。みんなに、届け。絵美は祈る。全身を岩にして、決して扉を動かさないようにしながら、

感染者も、動きを止めていた。何か戸惑っているように。そうして何十回もならした後に、一瞬沈黙が部屋に満ちる。

これで、みんなは気づいたはずだ。鐘がなったのだから。

だが、そこからはどうだ？この状況、全体がどうなっているのかもろくにわからず、統制もとれていない状況で、なにができるというのだ。

絵美は思わず、その首を動かした。そうして板の割れ目、柵の間から覗く向こう側を、覗く。

「見るな！」橘が叫ぶ。

目があった。死者の目。何を見ているのか、見当もつかない。が無造作に開かれたその口が、真っ赤に染まっていることだけは、はっきりしていた。そしてその牙が自分の方向を向いていることにも真美だった相手が、その顔面から突っ込んできた。扉はますます傷口を広げ、そこから凶暴な罵がつきだされる形となった。

「くそ、行け！さつさと、行け！」

橘に蹴りだされて、二階の屋根を絵美は転がる。痛みに顔をしかめるが、橘のその目を見て、絵美も覚悟を決めた。足を引きずりながら、窓から身を乗り出す。

「絵美！早く！」屋根の中腹には、すでに日和良がいた。こちらに迎えに来てくれたらしい。

「くそ、手遅れだ！」

橘が窓から飛び出してきた。すでに扉は開かれ、何体もが上っってきた。

三人は屋根に一瞬立ち尽くす。

「やるだけ、やったわよね」いよいよ鐘楼に追いつめられる形となるわけだ。

「どうかな。連中と本気でやりあってから、それは言いましょう」
相手は、五人ほど。ただの相手なら、この二人でやりようもあるかもしれない。

だが痛みを知らず、噛まれたら終わり。そんな連中と組みあって無事に済む確率は――

「待つて！あれ……」

そのとき、雑木林の向こうから聞こえてきた音。

それは、車のクラクションの音だった。

*

学園と礼拝堂を隔てるような林のせいで、向こうは見えない。
だが、その木々の隙間から、藍色の何かが見えた。それは近づき、やがてその姿を現した。

理事長のワゴン車だった。

「まったく……遅いのよ、バカ」日和良がつぶやく。窓から顔を出している少女の顔は、すぐにわかった。

学園のなかで、帽子を一日中かぶっているような奴は、一人しか知らない。

「おい！」音を鳴らしながら、大森響が窓から顔を出した。
ゆらゆらと歩く感染者たちの間をすり抜け、礼拝堂の周りにまで来ていた。そうして鐘楼の下に、車体を横付けさせる。

「こつちだ。上に、飛び降りろ！」

ワゴンの上には、マットが何段も積み重ねられていた。現状を何かしら把握していたということだろうか。

それにしたって、無茶な話だといった。改めて高さをみて、絵美は目がくらみそうになる。

二階といっても、礼拝堂は天井が高くとられているから、その高さは校舎の四階にも相当する。落ちればただでは済まない。

「私を信じる！その高さなら、何とか行ける！てか食われるよりま

しだろ！」

「ごもつとも、ホント、持つべき物は友達ね。橘さん、先にいける！？」

日和良が叫ぶと、橘は以外にもあっさり頷いた。

「ではお先に」素っ気なく答えると、屋根から飛び降りた。膝を曲げ、足をついたマットの上を半回転するようにして、衝撃を殺す。見事な着地だった。さすがというところだ。

「次は絵美」絵美は橘が真っ先に飛んだ意味を理解した。そういう意味か。彼女なら、何とか絵美も受け止めてくれるだろう。

「よし、いいぞ転校生！」

すでに窓に感染者が手をかけていた。やばい。

だが即座に日和良が、絵美と位置を変わった。

彼女は屋根の上に手を突きながら、そこを支点に相手を蹴りあげた。バランスを崩して、そのまま真美だった相手は、三階から地面にたたきつけられた。

後頭部からおち、首があらぬ方向に折れ曲がっている。さすがにそれ以上動く気配はないようだ。

絵美は我知らず、唾を飲み込んでいた。遺体の凄惨な状況だけでない。日和良の見たこともない、複雑な表情にだ。

「もう少し、建物の中につけてくれ。…………そう、そこ。よし、絵美さん、どうぞ！」

橘の声で、絵美の意識が戻る。絵美も必死に屋根を移動する。

「おい、急げ。来てるぞ」

下にも感染者たちが集まりだしていた。急がないと。

絵美は呼吸を一つ土手、飛び降りる。一瞬の浮遊感。それからの衝撃。車体が重さでばこん、という音を立てる。だがマットのおかげで、衝撃自体はほとんどなかった。そうして転がるのを、橘が車体の横からキャッチしてくれた。全身が痛むが、動けないほどではな

い。

「よし、絵美！ナイス、よくやった。……がんばったな」

うん、とうなずいて絵美は顔を緩ませる。響が来てくれて、本当にうれしかったのだ。

そのまま邪魔にならないように、車の後部座席に滑り込む。

「あと一人、急げ！」

しかし窓のうえ、屋根の上では日和良がもう一度けりを放った瞬間、ついに相手に捕まれた。

指が靴にくい込む。振り払おうとするが、しかし相手はその靴を思いつきり引つ張ってきた。

「ひよちゃん！」

「こなくそおお！」

掴まれたまま、日和良はそのままこちらに飛び降りてきた。

「バツクしろ！」

橘の声が飛ぶ。タイヤがうねりを上げる。

そうして間一発で、日和良の体はマットに沈んだ。

*

危なかった。あとすこしずれていたら、間違いなく地面にそのままたたきつけられていただろう。

「ひよちゃん！」

「木中さんは、中に！小林さん、こつちだ、大丈夫だな」

橘に抱えられる様にして、日和が後部座席に入れられる。着地態勢をうまくとれなかったのか、左腕を抑えながら、苦痛に顔をゆがませていた。

「わざわざマットを用意しとくなんて………響にしては気が利くじゃない」

だが飛び出た軽口はいつも通りだ。その様子に、絵美と響は少しだけほっとする。

「礼なら別の奴に言っとけよ。おまえの大嫌いな相手に」

日和良が顔をひきつらせる。となるとおそらくは……。それをミラー越しに満足げに見つめた響は、ギアを思いっきり入れた。

「そんじゃドライブだ。さっさと離れるぞ」

車がうねりをあげて、感染者たちの間をするすると抜けていく。

「よし、抜けたぜ。このまま、学園の外まで……」

しかし後部座席の窓から、突如手が差し込まれた。

「きゃあ！」

悲鳴が上がり、ハンドルが乱れる。一瞬で絵美には見当がついた。さっき一緒に落ちてきたやつだ。車体に張り付いたのか。

「しっかりつかまってるよ！」響が叫ぶ。何をする気なのか、スピードを上げたのだ。

車はそれに従って、その勢いのまま壁面へとぶつかりそうになる。

しかし響のハンドルさばきは見事だった。壁にぶつかる直前に横づけにして、感染者の体を壁にぶつけた。そのまま車体がごとくすれさせて、死体を振り払うことに成功する。

「……やべ」

だがやがて車が止まってしまった。

どうやら、車の大事なところまで壊してしまったらしい。

「……なんとまあ」

みんな、一気に脱力していた。がっかりしていた。

「こりゃ、免停ですむかねえ」

「もともと免許ないんだから、心配しないでいいんじゃない」

そんな軽口をお互いにたたき、日和良と響は渴いた笑い声をたてた。サイドミラーを絵美は見た。

感染者たちは、いつの間にかこちらを見つめていた。

再びのそりと、おっくうそうに近づいてくる。

「つつーことで、ここが終点だな。あとの帰り道は……」

「徒歩ってことね！」

四人は一斉にドアを開けて、飛び出した。
死者たちが迫りくる中を。

*

しかし一瞬の風切り音。

瞬間、こちらを追いつがつていた感染者の一人は、糸が切れたマリ
オネットのようにぐにやりと膝を曲げながら倒れ込んだ。

目の前で起きた出来事を脳が理解するより先に、車体に張り付き体
の半分が削られた感染者が、突然這う動きを止めた。

どちらも共通点は、頭をどこかでみたような、矢が貫通していたと
ころだった。

「おーい！無事かあ！」

声がしたほうを向いた。

そこには、クリステイーナ・稲葉や砂野一世をはじめとした、女生
徒たちの集団があつた。

*

「だいじよぶか？はよ、こっち来て」

角材をもったクリスが、こちらに手を伸ばす。

「みんな……助けに、きてくれたの？」

「うん。遅なつて、ごめんな」クリスがこちらの体を起こしながら、
目を伏せた。

「どうしたらええんか、わからんくて。鐘が鳴ったときはほんまに
みんなパニックって……」

「ううん、ありがとう。来てくれなかったら、私たちは……」

寮からではこちらで何が起こっているのかもほとんどわからなかつ
ただろう。

それでもわざわざ来てくれたのだ。思わず、絵美はクリスの体にしがみつこう抱きしめる。

「まあ、こっちは武器もようけ合ったしな。とくに」

実際、砂野の腕は神がかっていた。

腰から矢を引き抜き、つがえ、構え、弦が限界までのばされ、そして、放たれる。

ねらい変わらず、まるでそこにあつたかのように頭を打ち抜き、一人、二人と、倒れていく。

まるで機械のように、淀みなく、途切れなく。

マフラーで隠れた口元からは、何も聞こえない。

だがアーチェリーの天才の面目躍如にふさわしい腕前だった。

「それに、みんなをまとめたのはうちとちゃうしな。お礼やったら

……」

「ああ、小林さんに、橘さんに、木中さん。無事でよかったわ」

そういつてようやく現れたのは、霧生読だった。

「こっちのメンバーをまとめてくれたんが、霧生さんやねん」

「状況が状況だから。仕方なく、よ」

霧生は肩をすくめる。その事実、橘以外の三人は少し驚いていた。彼女と面識はあるが、あまり話したことはない。それになにより、彼女が他人のために動くというのがイメージしづらかったのだ。

「どっちにしても、あなたたちが無事でなによりよ」

そういつてほほえむ姿は、間違いなく美しい。彼女に、何か生気があふれているような気がした。

「なんにしても、お礼くらいは言わせて。ありがとう、本当に」日和良が、頭を下げた。

「でも」不意に橘が言った。「助けにきただけじゃ、ないんですね？」

「ええ、そうよ。私たち自身の手で、身の安全を守らなければならない。そういうことで、意見がまとまったのよ」

こちらの意図を見透かしたかのような瞳。

「そういうことや」

クリスはそれ以上のことを言おうとはしなかった。日和良と響は、戸惑ったように彼女たちの顔を見つめる。

彼女たちの言葉と、向こうで感染者たちを囲んでいる少女たちの姿をみて、彼女たちが何をしているのかを絵美は改めて理解した。

積極的な殺戮。

ついさきほど大人たちに否定されていた選択肢を、子供たちは選んだということになる。

「何か問題が？」

「いえ。そのほうが、選択としては正しい」

そう言つて、橘は向こうを向いてしまった。そうだ、たぶんそのほうが正しい。

自分の身は自分で守る。それは当たり前のことだ。

「本当に……」

思わず、絵美の口から何かがこぼれおちそうになる。

日和良も霧生も、いぶかしげにこちらをみつめる。

「あ、いや、どうも、本当に、ありがとう」

霧生はにつこりと微笑む。

「戦っているのは、彼女たちだから。お礼は、彼女たちに」

霧生は今なお礼拝堂から這い出た感染者に棒をふるっている少女たちのほうに視線を向ける。

何か言いようのない不安が胸の中に沸き上がるのを感じながら、同じように絵美はその光景を見つめる。

少女たちが殺戮に酔いしれ、真っ赤に染まっていく姿を。

*

いざ感染者の掃討には、十分もかからなかった。

いかに凶暴といっても、所詮はバラバラに襲ってくるだけ。

石を投げつけ、足元を角材ですくい、背中を押さえて鈍器で頭を打ちすえる。

霧生の的確な指示と、叫びながら感染者をうち据える少女達。統制のとれた動きの前に、食人鬼立ち放すすべもない。所詮は多勢に無勢だったのだ。

ただ、心の奥底で声がするのも絵美は感じていた。

だが、これで良かったのだろうか。そんな問いが、今更のように絵美の胸の中に沸き上がる。容赦なく撃ち殺し、たたき殺し、そうして自分たちの身を守る。それは本来の生き物が持つべきルール。課せられた宿命。

あれは。この今の状況は。

彼女たちがふるっているのは、日和良が言っていた「勇気」なのだろうか。

感染者たちの手は虚空をつかむしかできず、口は泥の中に沈む。

亡者たちはそのままなすすべもなく崩れ落ちていった。

あつけない。あつけなさすぎるほどに、事態は収束に向かっているといってもよかった。

「そうだ、先生たちは？職員室の方は……」

「副会長が行ったわ。浜形とか、生徒の方はすぐにでて大丈夫やったらしい。あとは、まあ……これから」

クリスティーナがそこまで答えたところで、女生徒の一人の悲鳴が

青空に響いた。

*

「おい、こいつまだ生きてるぞ！」

立木が、立ち上がろうとしていた。顔面に矢を突き立て、顔を陥没させて、目玉を飛び出させながら。

砂野が腰に差し込んでいた矢をつがえると、二呼吸おいてから矢を放った。額を打ち抜かれた立木は、今度こそいっさいの動きを止めて、前のめりに倒れ込んだ。

誰もなにもいわなかった。沈黙はそのまま一月の冷たく清浄な風の中に霧散していった。

それが当たり前のように。

けれども、先ほどまでの興奮はなかった。ただ、死すべきものが死んだだけ。誰もがその事実を、冷えた頭で享受していた。何の違和感もなく、なんの感慨もなく。

それに気づいて、絵美は身震いした。

そうして絵美は、振り返る。鈍色の空の下で、そこだけ鮮やかに飛び散った赤い色。

警備員の、臼井さん。亘さん。栗原さん。立木先生。佐志場先生。用務員の富野さん。保険医の真実先生。学校ですれ違うことしかしてこなかった、女生徒達。友達になれたかもしれない彼女たち。つい昨日まで、きっと、当たり前のように過ごしていた人たち。

それを殺めた。その事実と目の前の光景がつながった瞬間に、一瞬間の中から暑いものがせり上がってくる感覚を絵美は覚えた。だがいまそれをする事は許されない。秩序が失われたこの世界、狂気に

染まったこの場所で、それだけが守るべきルールだった。
正気に戻ることは許されない。

だから絵美は、生きている人間を見つめる。彼女たちの在り方を。

青ざめた顔で俯いている日和良。そんな彼女をどこか値踏みしているようにみている霧生。車の前でへたりこんでいる響。冷たい視線を死者たちに向けている橘。空を仰ぎ、何かを聞き取ろうとしているクリス。果敢ない視線を動かなくなった使者たちに向ける砂野。それから手の中に鈍器と棒をもった、大勢の女生徒たち。

私たちに見えている景色は同じものだろうか。私たちがしてしまったことは、いつたいたいなんだったのか。

それは、正しかったのだろうか。

死者と生者。先生たちと、生徒たち。私たちを分かったのは、いつたい何だったのか。なにが、それを決めたのか。

一瞬の思考。ささやかな韜晦^{とうかい}。

混濁した思考は一月の冬空に見える晴れ間のように一瞬だけ絵美の中に浮かび上がり、消えていった。

「こちら、鳳凜学園の……」

放送が聞こえてきた。生きている、人間の声が。

まだ無事だった人がいたということだ。橘がほっと息をついたのを絵美は見た。

放送は、グラウンドに集まるように言っていた。無表情の声で、告げていた。

行きましよう。誰かが言った。みんなにも答えようとしなかった。ただ、何かを堪えるように唇をむすびながら、歩き出す。

そつだ。歩こう。みんな立ち上がり、面をあげて、歩きだした。

絵美はもう、なにも答えることも動き出すこともなくなった。骸た
ちに一瞥をくれると、彼らと礼拝堂に背を向けて、グラウンドへと
急いだ。

第三話 了

第三話 鐘がために誰がなく(4) (後書き)

これでとりあえず一区切りというところ です。

最初の波が、という意味で。ちよつとまあゾンビものとしては、珍しい感じの流れじゃないかなと思いますが、お楽しみいただけたら幸いです。

ただこれも序盤の話なんで、またこれから先の流れを見て、また印象が変わるかもしれません。

いろいろと疑問や違和感は、次回以降に持ち越しで。同時進行でキヤラが多いと、時系列をちよつといじらないと辛くて。

ので、次回「ハイキング・デッド」お楽しみに。

手記5

ミッション系ということで、一応鳳凜でも聖書についての話を聞く時間がある。

私のところは実家が浄土真宗で、キリスト教についてはそんなに興味がなかったのだけど、宗教の授業時間は割と好きだ。うとうとしながら、たまに面白い話があると引き込まれてしまう。

彼の人が、罪人に対して石を投げる人々に「罪のないものだけが石を投げよ」と言い放った話だ。みんなはその言葉に胸を撃たれて、石を投げるものはいなくなったという。

というのは前置きだ。とか自分で云うのはいいんだろうか。まあ私の話は長いとかまだるっこしいとかよく言われるし、いちいち断っておかないと分かりづらいだろう。

いや、霧生さんの演説なんかを聞いた限りでも、そう思う。できるだけ平易な言葉で、できるだけ人の胸の中にもともとある様な言葉で、人の心の奥底にまで染みいる言葉。そういう風に他人に伝えられる才能は、多分私にはない。寮での一幕では、それを強く思い知らされた。

あの時。あの人が、なんて言っていたか。私には今でもちよつとしか思い出せない。よくあんなにすらすると、真の通った言葉を言い続けられるのかと、今なら思う。

けれども、それで充分だ。彼女の言葉は私たちの心に確かな光明を示してくれた気がするし、戦うのに必要な勇気と、怒りをくれた。襲いかかってきた理不尽と、恐怖。

そうした状況に立ち向かうのに必要な力を与えてくれたのだ。

「自分を救えるのは、自分たちだけよ。貴方達は、墓場まで大人に連れて行ってもらうつもり？」

時には引きつけるよう、時には押しつけるよう、時には責め立てるよう、時には持ち上げるように。彼女は私たちに、なにをするべき

かを問うた。問い続けた。

そうしていつの間にか、誰かが答えていた。「やろう」

疲れ果てていた体は、もう一度声を挙げて動き出そうとしていた。

だから私は、彼女を尊敬している。他の皆——あの時寮にいた連中は、大体がそうだろう。

ただ、それでも考えてしまう。私があの時、石を投げたことを。

そうだ、石を投げたんだ。もっとも、私の場合は部屋にあったフクロウの時計だったけど。

あの日。死者がゾンビとなり、学内を徘徊しだしたとき。私たちの住居に襲いかかってきた時。

私たちは、それと戦うことを選んだ。

始まりはガラスの割れる音。同じ寮と言っても、普通の学校に比べて出入りの激しいうちの学校では、学年毎に部屋が区切られていない。基本ランダムに割り振られる。その分お互いに遠慮して、それなりに静かに夜は眠れるから、悪くはないやり方だと思う。

私の部屋は二階で、丁度音がした場所の右斜め上にあった。幸いにも投稿してきていた隣近所の部屋の人たちと何があつたのか、とあれこれ話したりしていた中でのことで、みんな心底びっくりしていた。そんな中での突然の破碎音。みんなベッドの上で飛び上がった。いた。

窓から下を見ると、何か血の跡や足跡らしきものが校舎の方に続くブロック道に伸びていた。間違いない、と私たちは大慌てで状況を確認しに向かったのだ。

下の階では他の生徒たちも大勢が問題の部屋の前に集まっていた。クラス委員の雨宮さんがドアを叩いていた。しかし返事がないのにしびれを切らして、彼女はドアノブに手をかけた。ドアはあっさり

と開き、ぎいい、と音を立てながらドアが開かれた。

途端に悲鳴が飛びかい、廊下はパニックになった。私もそれに従う形で廊下を押し流された。

本当にやばい、とわかったのは、ロビーについたあたり。開け放たれたドアから、ゾンビがゆっくり出てきた時だった。

皆が逃げ出したせいで私は見えなかったのだが、部屋の中央で見上さんの喉首にかぶりつくゾンビがいたのだという。

調子が悪かったとかでベッドで寝込んでいた二年の見上さんをどうやって嗅ぎつけたのかは知らないが、ゾンビはガラスを割って彼女の部屋へと侵入したのだという。不幸中の幸いだったのは、見上さんが襲われた時に頭を打って、喰われ始めた時にはすでに死んでいたという所だろう。彼女にとっても、私たちにとっても。

部屋を開けた途端、そんな相手が立ち上がってこちらに向かって来たとなれば皆が恐慌状態に陥ったのも頷ける話だ。

私たちは廊下を下がり、玄関に続くロビーへと逃げ出していた。どうすればいいのか分からずに、ただ必死に逃げまどう私たちの反対方向、玄関口からもどんと音がしてきて、本当に駄目かと思っ

た。
「開けて！早く！」閉じられていた鍵を開けた向こうにいたのは、それが隣の寮の面子だった。

彼女たちはパニックになっている私たちを見まわした後、間もなく廊下からロビーへと到達してきたそれを見て、状況を理解したらしい。「そっち、反対側へまわって！」霧生さんが、ロビーにあった長テーブルの上のモノを手で振り払い、そのまま倒した。その意図を組んだクリスさんが反対側を持ち上げ、足を担ぐようにして、霧生さんと顔を見合わせた。

ああ、ともおお、ともつかない声を挙げるゾンビ。鼻先部分の皮膚が食われたせいか、真っ赤な人体組織が露出しているグロテスクなそれに向かって、二人は声を合わせて突進して行った。

部屋の壁にゾンビを思いっきり押しつけると、めき、と嫌な音がした。腕が折れた音だった。だが痛みにもだえる様など見せることなく、テーブルの端にいるクリスさんめがけて、必死に首をのばしていた。

だが届かない。ゾンビの拘束に成功していたのだ。それに気が付きゾンビは必死に逃れようとするが、続けてテーブルの端を押さえつけにきた四人がかりの圧力の前には敵わなかった。

「は、はやく。急いで！」霧生さんが、背後で立ち尽くす私たちに、声を挙げた。

一体何を？何を急げというのか？

それを最初に理解したのは、坂上さんからだった。彼女は、死んだ見上さんの一番の友達だったという。

悲鳴を上げ、ただ涙を流していた彼女は、地面に落ちていたコーヒークップを持ち上げた。

ひっひつと、えづくようにしながら、そのカップを、投げつけた。

カップはゾンビの頭にぶつかりと、鈍い音を建てた。

一瞬うめくような声を上げたが、やはりゾンビはそんなの屁でもないとばかりに、手足を動かしていた。クリスさんと霧生さんが歯を一層食いしばっていた。

坂上さんはそれを見て、何かが切れたようだった。顔が憤怒に歪み、指先にまで力がこもる。

みんな黙っていた。坂上さんの迫力に押されていた。

だから今度は、もっと大きいものを思いっきり花瓶を振りかぶるとゾンビめがけて投擲したのだ。私は思わず目をそむけた。鈍い音がした。恐る恐る見ると、当たった額がへこみ、血がぼたぼたと漏れ出した。

坂上さんは肩を震わせながら、それを見つめる。ざまあみろ、とでも言いたげに。

だがゾンビはまだ死んでいなかった

皆動けなかった。時が止まったように、茫然としていた。

「駄目……長くは、持たないわ」

慌てて近くにいた泉さんが霧生さんの体を支えていた。だがそれがずっと持たないのは、みんな分かっていた。

坂上さんは次に投げつけるものを探していたが、やがて周りで立ち尽くしている皆に気がついたようだった。

「何してるの」

鼻水交じりでの問いかけは、疑問の体をなしていなかった。それは問い詰めるような物言いで、

「で、でも……」でも、何だろう。分からない。多分私でも、それしか言えないということは分かる。

坂上さんは目を見開き息を荒げながら、私たちの方をみた。みんなとつさに目をそらしたと思う。

「あれが、人間なの。……人間に、見えるの！」

問いただされた子は、首を横に振った。いや、違う。化け物だ。「化け物よ。そうでしょ」

坂上さんは、ゾンビ以外の一切の敵が停止したような部屋の中で、みんなを見渡した。

「やって。……やるのよ！」

一喝した彼女の声に、皆が体をすくませた。だが恐怖におびえながら、恫喝に怯みながら近くに落ちているものを手に取っていた。お互いを窺いあうようにしながら、母親に叱りつけられる子供のよう

に。

やがて一人が、お皿を投げた。いかにもへっぴり腰で投げたお皿は、テーブル部分に当たって、割れることもなく床に落ちた。

坂上さんと、それから皆に責められるような視線が彼女に突き刺さる。その空気に耐えられないように別の一人がコップを投げた。頭

に当たり、ゾンビの呻き声が一瞬乱れる。
そうしていつの間にか流れが出来た。

拘束されたゾンビの顔の横には右腕の第一関節から先が此方に伸び
ていて、下手をすれば掴まれる恐れがあった。

だからみんな、決して近寄ろうとはしなかった。掴まれたくない。
それに触りたくもない。

攻撃手段は、自然と遠くからになる。

だからみんな、投げていた。いつの間にか、皆が一斉に。手当たり
しだい、何でも。

それでもゾンビは死ななかった。呻き、歯をむき、動こうとしてい
た。

私も、それに従っていた。熱に浮かされたように、部屋の隅に置い
てあったフクロウの時計を手にとったのだ。

そうして、投げつけた。血だらけの、ゾンビの顔めがけておもいつ
きり。

的当てゲーム。ゲームだったと思う。みんな、当てることだけを考
えた。

みんな興奮していた。死ね。死ね。死ね。みんなそう口走っていた。
「死ね」

私もだった。

ゾンビは、いつの間にか動かなくなっていた。私たちはそれにも気
づかず、手当たり次第に投げつけていた。

ようやくクリスさんと霧生さんがテーブルから手を離れた。力一杯
押しつけすぎて、手のひらは青じんでいた。

皆の息遣いだけが聞こえた。床に死体が転がった。

死体だった。

私たちが殺した、死体だった。

こうしてわたしたち十五人程は、加害者になったのだ。最初にゾンビを片づけた人間として。

イエスキリストの話を思い出す。

あるとき彼はなにを言っていたか。「自分に罪のない人間だけが、石を投げよ」

罪のない人なんていない。そうして誰一人として罪人に石を投げつけるモノはいなくなったという。

でも、違う。それじゃあみんな、どうして最初石を投げようとしたんだ、当たり前みたいだ。

今なら分かる気がする。彼の人が言ったことが正しかったから、みんなはやめたんじゃない。

みんな、最初に投げる人になりたくなかったから、投げなかったんだ。最初に石を投げる一人に。

多分。誰か一人でも投げていたら、きっと話は変わっていただろう。その中に、無思慮な者がいれば。罪の被害にあったものがあれば。罪の被害者を心の底から悼む者がいれば。

みんな、もう一度投げ始めたはずだ。罪人に石を。彼の人も俯き、静かに立ち去っていただろう。

それじゃあ、石を投げた私たちの隣。頭上。はるか遠くに。今でも彼の人はいるのだろうか。見守ってくれているのだろうか。

それとも。

——早乙女切乃

第四話 ハイキング・デッド（1）（前書き）

新章突入です。今回も、日和良たちと地獄にお付き合ってください。

第四話 ハイキング・デッド（1）

「教員等にいる先生方！こちら女子寮から来ました！生きている人はいますか！いたら返事してください！」

それから訪れた沈黙を答えとして、杉村明里は背後を振り返った。
すぎむらあかり
「行くわよ」

非常階段の下、校舎の脇。そこには五人ほどの学生が集まっていた。どの顔にも緊張が浮かんでおり、その手には武器となる得物が握られている。

「浜形さん。先生達は全員中に見ると見て、いいのよね」

明里の問いかけに、一際目立つ長身の少女——はまがたみちこ浜形路子ははっきり頷いた。

*

放送で明らかになった教務棟三階でのパニック。その真下、同じ教務棟にいた学生の中で、浜形は冷静に動けた数少ない生徒だった。二階ですでに学園外への避難の準備をしていた十人ほどの生徒たちと、現国教師の南を置いて、彼女は单身確認しに向かおうとした。だが階段を上ろうとしたところで、三階と二階の踊り場に向かって落下してくる影があった。

数学の北壁教諭だった。ほとんど落ちるように飛び込んできた彼には、顔の半分がなかった。

正しくは、顔の半分の皮と、片耳がなかった、になる。えぐり取られた顔から、しまう場所を失った目玉がぎよろりと階下の生徒たちを見据えたという。北壁は痙攣しながら、そのままこと切れた。

それを見て生徒たちは確信した。三階はすでに地獄だ。

恐怖の叫びがあげられる中で、階段を繋ぐ防火壁が閉じられたのは

妥当だったといえるだろう。非情な判断ではあったが、まずは自分たちの安全こそ確保しなければならない。

外に飛び出そうとする学生たちを必死になだめつつ、鐘によって感染者たちがいなくなっただ後で、職員棟にいた生徒たちは一旦脱出を果たしたのだ。

三階の職員室でむさぼりあうであろう死者たちを置き去りにして。

明里としては、彼女たちの判断についてとやかく言うつもりはなかった。多分自分でも同じことをしただろう、と思えるからだ。

なんせ戦える人員がいないのだ。上階にいた十人近くの職員たちでさえ手に負えないような事態だとすれば、それこそ単身で迂闊に動くべきではないだろう。

だが、今は。明里は改めて後ろにいる生徒たちの顔を見る。

皆緊張しているが、しかしどこか腹を決めたものの独特のさっぱりとした感覚があった。

何も彼女たちはそもそもが学生寮からわざわざ感染者を「片付け」に来た生徒たちだ。彼女たちなら、必要に応じて武器をふるうことをいとわないだろう、と背中を預けるに足る面子だった。

*

体育館でただ事態の推移を見守りながら、少しずつ周囲の様子をうかがっていた明里たちのもとに、彼女たちは現れた。

これからあのゾンビどもを倒しに行く。弓矢にモップやバット、大型の鈍器を抱えた少女たちはそう言うてのけたのだ。学生たちの提案に明里も驚きはしたが、その後広場の方へ出てきた生徒たちが、唯一残っていた佐志場を相手に――対処しているのを見て、その本気を理解したのだ。

その中でも、霧生詠^{きりゆうよみ}は特別だった。彼女は指示を出す立場として声

を飛ばしていたのだが、その指示が見事だった。

方針はとにかくシンプルなのだという。まず、ゾンビ——彼女たちは、こう呼んでいた——の足を払う。それから、背中を抑える。動くことが出来なくなった相手に背中から近づき、後頭部を叩きつ
ぶす。

それを複数人で取り囲むようにすれば、常に安全に奴らを狩れる。彼女はそれを命令する。

「やりなさい」いつもの調子、いつもの様子で。

それから再び彼女らは問うたのだ。このまま見殺しにするか、否か。その強い意志に押される様にして、迷いながらも、体育館にいた人員もその流れに乗ることを選んだ。感染者を、ゾンビを、駆逐する動きに。

*

階段を駆け上りながら、明里は思う。果たして自分がしていることはまともなのか、ということ。

そしてみんなも、まともなのかということだ。

皆が、自分がしようとしていることがどういうことなのか。どういう意味を持つのか。

分からない明里ではない。いや、皆だってそうだろう。

だが、それでも。

それでも、今こうしていることだけは正しい。そう信じたかった。

教務棟の中の様子を窺うことについては、霧生の考えとは異なる。霧生達による駆除行為に対して、当然ながら体育館にいたグループは困惑を示した。

しかし明里とて、すでに自分がなんら暴力とは無関係だなどと言い張れるような身の上でないことは知っていた。だからこそ責任と危

険を負う役目を自ら買って出たのだ。

それが教務棟の救出作戦。礼拝堂でまだ彼らが無事だというのなら、教務棟の職員達も助けられるかもしれない。当初霧生は戦力を分散させることを渋ったが、他の学生達の声を受けて了承した。

教務棟から脱出してきた何人かの希望を募り、こうして建物の中に入ろうとすることが出来たのだ。

もしかしたら、どこかに閉じこもって生きている先生がいるかもしれない。そんな一縷の望みを確かめるための問題は、建物の中に入る方法だ。

中はおそらく、すでにほとんどの教職員が感染者――ゾンビ化していると思われる。その数は、多ければおよそ十。侵入すれば、容赦なく彼らが襲いかかってくるだろう。

死者たちに対しての生者のアドバンテージである素早さが室内では失われる。だとすれば、相手を外に引っぱり出すことこそ重要となる。

そのうえで彼らを引きずり出すとなると、実質的に非常口しかなくなる。

三階の非常口のドアを開けて、声を挙げる。それで生者が出ればよし、死者が出てくるなら、一階まで引きずり出し、叩きのめす。それが明里たちが考えた戦術だ。

間は狭く、二人がすれ違うのが精一杯。ここなら感染者に雪崩打たれても、逃げ切ることは可能だろう。

ただ、突然出てきたときには一瞬でも時間稼ぎをしなければならぬ。そのため、浜形がその少し下から槍を構えて、いざというときに備えた。後の人間は、一階で待機させる。

藪蛇という奴を、自分をしようとしているのだろうか。そんな自嘲気味なため息をもらしながらも、明里の脳裏にはやはり一人の人物のことが引っかかっていた。やるしかない。そう思わせる相手。

非常口のドアに手をかけた明里が、背後の皆に指を立てる。三本。二本。一本。緊張が最高潮に高まり、ドアがまさにあけられるかと思った瞬間、明里は電流に打たれたようには飛びずさった。とたんにドアノブが回され、中から人影が飛び出してきた。すぐさま浜形が明里を押し退けながら、相手の胸元につきこみを入れるべく、踏み込んだ。

「待て！」

そう叫び声が届いたのと、浜形の突きが止まったのは同時だった。

「だ、大丈夫だ……無事だ、生きてる。僕は、生きてる」
そこに現れたのは、誰あらん——柿谷衡平だった。

*

「まったく。冷や冷やしたぞ。もう少しで、死ぬところだった」

階段の手すりにもたれ掛かるようにして、柿谷はそう漏らした。三階から無事に出てきたのは、三人だけだった。柿谷、西浦、それから哀川。

どの顔も憔悴し疲れはて、まるで別人のようだった。特に柿谷には普段の優男風の余裕はみじんも伺えず、一気に十は老けたように見える。

それでいて、目の奥だけはどこか野生的な光をともしており、陰影のこく見える顔に迫力を与えている。

明里は動悸を抑えながら答えた。

「どうして、答えてくれなかったんです？」

問いかけの口調が強いのは、自分自身でもいろんな思いを整理できないからだ、と分析する。

「ああ。そうだな。すまない。……トイレでもどしてたんだ」

そう言って、柿谷は新鮮な外の空気を吸い込むようにして、空を仰ぐ。他の二人も、力なくうなずいた。よく見ると、哀川などはシャツの脇腹のあたりに吐瀉物らしい汚れが見えた。

「まったく……本当に、世話をかけるな、お前たちには。それで大丈夫か、皆は」

そうして少しばかり気を緩ませながら、ようやく見せてくれたいつもの教師としての顔に、明里は改めて胸の奥が熱くなるのを感じた。「……よかった。本当に、よかった」

明里は最初抱きつきたい欲求に駆られたが、お互いの服にこびりついた血が障壁となった。勿論そんな雰囲気ではないというのは分かっているのだが。他の人の目もあるし。などと考えているうちに、そんな明里が使い物にならないのを察したのか、寮から来た一人が柿谷に簡単に現状を伝えた。

「そうか。……すまない。俺たちが、至らないばかりに」

弱弱しい声で、柿谷はそういう。

「何があった？」

突如問いかける浜形の声に、明里はぎょつとした。詰問するようなその声には、確かに怒りが滲んでいたからだ。だがそれに答える柿谷の表情は、ひどく歪んでいた。まるで笑顔を作るのに少しずつ失敗した副笑いのように。

「お察しの通りだよ。一人捕まえている時に、感染していた先生がいて……それが、暴れ出した。他の皆で止めようとしたが、そのうちもう一人も出てきて……あとはめちゃくちゃだ」

浜形はその長いまつ毛を伏せて、首を振った。彼女なりに思うところがあるのだろう。

「そうだ、理事長は？窓から落ちたはずだが」

西浦が話を変えてきた。

「そうだ、理事長……その名前を出されて、明里は何とも言えない顔になった。」

「両手両足を骨折しているようです。脈はありましたけど、意識はありません。一応西校舎の部屋に、運んで行きましたけど……」

職員室から落下したらしい彼女を見つけた時は、皆が驚いた。それが生きていたのだから、驚きは二倍だ。どうやら血のあとを見る限

りでは、渡り廊下の屋根にぶつかつたおかげらしい。

彼女の存在、生存こそが霧生を説得する材料になったのも確かだ。とはいえ殆ど虫の息だったため、彼女が今後どうなるかは、見当もつかないのだが。

そうか、と返答した西浦の声は、感情を窺わせるものはなかった。どういった経緯でそうなったのか。尋ねるべきか明里は迷った。しかし結局、続く言葉にその迷いは霧散して言ってしまった。

「とにかく、生徒はみんな一応外にいるんだな」はい、と明里は頷く。

「一度みんな集まつたほうがいいでしょうね」西浦と柿谷はそう言つて、重たげに腰を上げた。

「職員室に入つて、放送を入れる。グラウンドは大丈夫だな」

「いえ、柿谷先生……大丈夫ですか？ なんなら、放送は私たちが」明里の提案に、柿谷たちは目をそらしながら首を振った。

「あまりおまえたちは中に入らない方がいい。先生たちに任しておけ」

「でも、噛まれた死んだ人間が、起き上がる可能性も……」

「その心配はない」

それは、明里がはじめてみる柿谷の顔だった。

まるで暗い井戸のそのような、深く淀んだ視線を、彼女に寄越したのだ。

「死んだ全員の頭を、もう潰してある。……とにかく、グラウンドへ向かえ」

*

「生徒はみな、グラウンドへ集合するように。繰り返す。一度全員、グラウンドへ集合するように」

放送が流された後、五分もたたないうちに皆が校庭へと集まつた。

体育館にいた運動部の学生達、寮から出てきたものたち、校舎に隠れていた一年生たち。

みな不安なのだ。自分たちが置かれている状況も学園の全貌も何もわからない中で、学園の生徒たちは皆へたりこんでいた。放心したかのように中を見つめていたり、ぶつぶつと何かを呟き、体を縮めてふるえ、肩をよせあいながら、すすり泣く。

食堂にいた人たちは、幸いにもことなきを得たらしい。何が何だかよくわからないまま厨房に籠っていたということで、今はとにかく困惑した顔で居心地悪そうに固まっている。

そんな中であつて、小林日和良こばやし ひつよしはできるだけ堂々とたちふるまっていた。

だめだ。今へたり込んだら、崩れる。日和良は体のそこから沸き上がってきたものを必死に押しとどめながら、必死に胸を張る。

あれから、感染者を処理していく様子を、脱出した一同は眺めていた。

礼拝堂から出てきた感染者の足をすくい、押さえつけ、動かなくなるまで何度も何度も殴打する。

目を覆いたくなるような光景だったが、

その後全ての「対処」が終わる頃に放送が流れると、橘と絵美はそれぞれ手当を受けに行った。

まあ絵美以外はぴんぴんしていたのだが。橘など、自分から率先してそそくさと保健室に向かったほどだ。

そんなわけで彼女らは不在だが、話していたことは後で説明すればいい。

日和良は響と二人で、所在なくグラウンドに島を作っていた。

「なあ、ひよ」

「何？」

響は日和良と目を合わさずに前を向いたまま、罰が悪そうに尋ねた。

「あのときさ。絶対だめだって思った時。私がある、とか思ってたか？」

響と絵美と日和良。三人は無二の親友だ。この学園を逃げ出すための。

ただ、響にも絵美にも秘密はある。だから響が時折一人何処ともなくぶらつく癖があることを、日和良と絵美は受け入れていた。さつきだってそうだ。彼女はなぜだか体育館のさらに向こうにある、道場のあたりにいたらしい。そのことについても特に詮索するつもりは日和良にはなかった。

「もしもこなくつても、仕方ない、とは思ってたわ」日和良は正直なところを口にした。

響は鼻先をかきながら、ふうん、と何気ない声を出した。その何とも言えない顔を見て、日和良は少し小声で呟いた。

「ありがと」

「……ああ」

短いやり取り。けれど、それだけで二人には通じていた。そんな感覚を、日和良は覚えた。

「一応言い訳しとくとな。武器を探してたんだよ」

「武器？」

「理事長の家だよ」

道場より向こうには、教務員達の住居スペースがある。その中でも理事長の屋敷は、もっとも巨大な建物だ。確かに、あそこなら何かあるかもしれないが。

そんな風に互いの反応を窺うように話をしているうちに、教員達がグラウンドに現れた。

血まみれの風体を見て一瞬皆がざわつきはしたが、柿谷が話したすと皆彼の言葉を全身で聞こうとした。

それは、学園が始まって以来最も静かな集会だった。

内容は、学園の現状と今後について。

学内で、感染病らしきものが発生したこと。その特徴と、感染方法について。

職員の大半が死んだこと。生徒の死者については、まだ数えきれないこと。

外部との連絡方法が失われたこと。

学園が孤立状態にあること。

皆が断片的に理解していたことを、柿谷は皆の間で断定していった。その中で外部と連絡が取れないことをきくと、一部の生徒たちはざわついたが、すぐにため息とともに黙り込んだ。とにかく、みんな疲れていた。それは不安に怯えること、どうすべきか考えることにであり、結局うつむいて座り込んだ。

無味乾燥な、業務的な言葉が並べられていく中で、柿谷は、最後にこう締めくくった。

「おそらく、今の状況は誰もが想像したことがないくらい……危険だ。どうするべきか、何をすべきか。俺にも答えはない。ただ、自分の命が危険だと思ったら、必要なことをしてくれ。これは、お願いだ」

それは果たして、教師としての立場で許される発言だったかはわからない。だが確かな胸の内を聞いた生徒には、その言葉が持つ熱は確かに感じられた。

そう言っただけの顔を見渡すと、戻ってくるまでは杉村の指示に従って学園から動かないように、と言って締めくくった。

*

その後、日和良は体育館でうつらうつらしていた。

あの後。柿谷たちは、外部に直接助けを求めに行った。無事だった食堂のおばさんや職員さんは、彼らの自宅が心配だということと、

地元の人の協力が必要だろうという利害の一致を見て、同乗していた。

つまり教職員一同が車に乗りこみ、携帯で連絡が通じるところまで行って助けを呼びに行くことが決められた。

その間、学園に取り残されることとなる生徒たちは一か所に集まることとなった。

外部からの警戒や、学内の安全の調査をまかされた一部の生徒以外は、体育館の中に押し込まれる形になった。

まさしく普段の避難訓練などの体と同じではあったが、一同の様子は段違いだ。笑い声もなく、一同がひ

そひそと眉根を詰めながら話しているばかりだ。

それでも、一応食堂のおばさん達が拵えてきたおにぎりを食べたおかげで、まだましになった方だと言える。泣き声を発していた生徒は疲れて眠ってしまったている。監督役として残された哀川も壁にもたれて口を開けて眠ってしまったているのはどうかと思うが。皆が彼の顔を軽蔑の色で見るのも無理からぬことだ。

日和良その中に押し込められ、三角座りではし体を休めていた。他の皆に比べれば、日和良が暴れまわった時間は長くない。だがそれでも、一瞬の選択が生死を分かつ状況にあつて、神経が擦り減らないほどタフではない。

とはいえようやく、学園は静かになった。生者も死者も自ら動くつもりがなければ、こんなものだろう。

響はあのあと車を動かせる人間として、霧生に引っ張られていった。門のところで防波堤代わりに使わらしい。絵美や橘は結局そのまま体育館に来て合流することはなかった。怪我の度合いはひどくないはずだが、彼女らも休んでいるのかもしれない。どんなに感謝しても足りないが、彼女らの方が疲れているだろう。少し時間をお

いてから改めて話そう。

そのため、今日和良は一人になってしまった。

互いの無事を喜び合う、という気分でもないが、何か話し合っていないとひどく落ち着かない。そんな気分だったから、出口のところに見知った相手を見つけて、日和良の意識は覚醒した。人の波をかき分け、お目当ての相手に声をかける。

「あら、小林さん。無事だったなんて、相変わらずゴキブリ並の生命力ですね」

「あんたって……」名雲文香なぐもふみかから帰ってきたいつもの憎まれ口に、日和良は思わず閉口してしまった。

とはいえ、いつものようにやり返してやろうという気力はない。

響から大体の事情は聞いていたためだ。

響達が事態を把握したのは鳴海聡子なるみさとこが、道場に皆を取りまとめに来てくれたときらしい。その時響は困惑しながらも、絵美や自分を助けるために動くこうとしていたという。

そして最終的に響が車で駆けつけようとした時に、道場にいた名雲は提案をしてきたのだという。

「おそらく追いつめられているとしたら、彼女らは上の階にいます。着地できるように、マットを縛り付けたほうがいいですわ」まあその後しっかりと「なんとかと煙は高いところが好きなのでしょう?」とかいうあたりは、さすがだが、ともかくその読みがあつたおかげで、なんとかこうして無事に生き残ることができたのは確かだった。

彼女には思うところがないでもないが、感謝をしないではいられないほどには恩知らずではいらなかった。

「ありがとね。……正直、やばかったわ」

「別に、感謝されるようなことはしていませんわ。おわかりでしょう。実際に貴方のために動いたのは、誰なのかくらい」

「いや、まあこれは私なりのけじめというか、そういうあれだから。

独り言だから」

ふん、と腕を組みながら名雲は鼻息を漏らす。

「まあ、もしも感謝を形にしたいというなら。自分ができることをすることですわ。人の役に立つようなことを、ね」

「うん。そうする」

素直に頷いて見せた日和良に苦々しげな表情を見せた後で、名雲はそつばを向いてしまった。

しかし、これはこれで彼女らしいとも思う。お互いに生き方や信条は違うし、これで決定的に仲良くなる、というのも何か違うのだろう。

ほんと、あんたって……。日和良は苦笑いしながら、その場を辞そうとした。

「……何かしら？」

窓の外がにわかに騒がしくなってきたのは、ちょうどそのときだった。

*

体育館の外側でたむろっていた生徒たちが騒ぎ出し、声を上げながら走りだしていた。

「どうしたんです？」体育館の中にいた一人が、格子越しに一階に残った生徒に声をかける。

「一年が……バスに乗っていたらしい一年が、やってきたらしいの！」

バス。それはつまり、もうひとつ学園へと走り出したバスのことか。そして、病院へと引き返したはずの。

上げられた大声を聞き取り、そのことを理解した大勢の人間が、体育館を飛び出していた。

日和良は名雲の顔を見返すと、「ちょっと、私も見てくるわ」と行っ

彼女は困惑しながらも気をつけて」という声をかけてくれた。名雲は自分の職務、周囲を警戒することを止める気はないらしい。律義な少女に頭が下がる思いになりながら、日和良は走る人々の後ろについて行った。

そうしてたどり着いた校門の前では、野次馬が山をなしていた。バスが入ってくる時にぶつかったらしい片側の門はひしゃげ、その空白を埋めるために車が一台寄せられていた。

現在唯一の出入り口となる正門の守り役を任された、砂野はその車体の上に片膝を立てて座り、弓を構えながら道の向こうに視線を走らせている。

一同の視線の先に、日和良は目をこらした。

鳳凜のブレザーをきた少女が、確かにこちらに向かってよたよたとおぼつかない足取りで向かって来ていた。

ただ、疲れ果てているせいかうつむいていて、その顔色までは判別不可能だった。

「生きているって、本当なの？」近くにいた少女に声をかける。

「さつき、声を挙げてました。手も振り返してたし……」

砂野に視線をよこすと、彼女もこくこくと頷いた。とはいえ、皆が半信半疑なのは確かだろう。

もしも感染した人間だったなら。そう考えれば、皆が二の足を踏むのも無理からぬことだろう。

日和良は再び、少女に視線の照準を合わせ、考えを巡らせる。

それに、不可解なこともある。

バスに乗っていたはずだという少女。誰か顔見知りの生徒がそう言っただろう。それはいい。

だがだとしたら、なぜ彼女はこんなところにいるのか。

いくつも疑問符が浮かび上がりながらも、皆が少女に視線を注ぐ。そうしてあと少しで校門にたどりつく、というそこで足をつまづかせる。倒れ込んだ少女に、日和良は思わず駆け寄っていた。

「大丈夫？返事を、返事をして！」

しかし手を伸ばす前に、日和良は体に視線を走らせる。なぜか薄く黒ずんだ顔に、体の所々に見える擦り傷。片方の靴は脱げて、足には血が滲んだハンカチが巻いてあった。が、傷は浅い。

今のところ、噛まれたような傷は見えない。

日和良は意を決して、少女に手を伸ばし、うつ伏せになった体をひっくり返そうとする。

だがその瞬間、伸ばした右手を強い力で捕まれた。引き離そうと一瞬腕を引いたとたん、少女の口が開いた。

「お願い……お願いです」

それは必死の懇願だった。その目には確かな理性があった。掴まれた腕への力が失われていくのを感じて、あわてて日和良は少女を抱える。

「生きてる！生きてるわ！」

日和良が声を挙げると、それまで様子をうかがっていた少女たちも駆け寄ってきた。

「大丈夫。もう、大丈夫だから」

少女をあやし、安心させようとする言葉。

だが日和良の耳が、少女の願いを聞き取った。

「行かないと。早く、行かないと……」

熱病に浮かされたように上気した顔で、彼女は告げた。

「助けて。みんなを……」

太陽が傾きはじめた時間。

誰かが選択を突きつける。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8860s/>

Journals of the Dead

2011年10月20日05時18分発行